

倉橋由美子文学における女性像および女性論についての研究

劉, 苗苗

<https://doi.org/10.15017/1785343>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

倉橋由美子文学における女性像および女性論についての研究

九州大学大学院比較社会文化学府

劉 苗苗

平成二十八年六月

【凡例】

倉橋由美子の作品の引用について、注記をつけていない箇所は、『倉橋由美子全作品』（全八巻）（新潮社、一九七五年十月～一九七六年五月）により、『倉橋由美子全作品』未収録の作品はそれぞれ単行本によるものである。

目次

序論	1
第一章 夏・海・太陽と女性性	7
第一節 倉橋由美子と『異邦人』との出会い	7
第二節 『異邦人』と「夏の終わり」「蠍たち」「パッション」「醜魔たち」「悪い夏」における太陽と死	8
第三節 『異邦人』と「夏の終わり」「暗い旅」「蠍たち」「パッション」「醜魔たち」「悪い夏」「犬と少年」における太陽と性	15
第四節 「太陽と海と灼けた砂」を背景とした性行為―神話的な光景	19
第五節 太陽と反世界と女性性	24
第二章 性的倒錯に生きる女たち	37
第一節 「蛇」における男性化願望	37
第二節 「貝のなか」「密告」「死んだ眼」における同性愛とサディズム・マゾヒズム	43
第三節 「聖少女」「迷宮」「婚約」における聖女にして娼婦	49
第四節 女嫌いと「第三の性」の形成	53
第三章 男性化願望の挫折と結婚	61
第一節 「パルタイ」「婚約」「暗い旅」における結婚反対論者としての闘士	61
第二節 「結婚」「妖女のように」「ヴァージニア」における見合い結婚	66
第三節 精神的な恋愛観と現実的な恋愛観の狭間	71
第四節 男性化願望の挫折と結婚	77
第四章 倉橋文学に見るボーヴォワール受容	83
第一節 ボーヴォワール『第二の性』の受容―「私の「第三の性」を中心に	83
第二節 「暗い旅」におけるボーヴォワール受容―『女ざかり』と比較して	94
第五章 解体した母性神話	113
第一節 『アマノン国往還記』「どこにもない場所」「蠍たち」における肥満した母親像	113
第二節 「蠍たち」における母親殺し	119
第三節 「婚約」における我が子を食らう母親	124
結論	141
参考文献	144
付録	
初出一覧表	

序論

一、倉橋由美子とその文学

一九一一年九月、日本最初の女性文学雑誌『青鞥』が創刊され、新しい女たちが文壇に登場し、表現の主体となった。同じ女性文学としても、戦後を境目にし、大きな変貌を呈している。戦後になって、男女平等教育の中で成長してきた女性作家たちが自分なりに新しい表現の可能性を探り出そうとした。そのような時代の流れのなかで、反リアリズムの観念的小説の世界を構築することに成功したが、倉橋由美子である。

「第三の新人」以降の新世代作家で、石原慎太郎、開高健、大江健三郎と並び称せられている倉橋由美子は、一九三五年一〇月一〇日、高知県で歯科医の長女として生まれた。土佐中学校、土佐高等学校在学中から文学を愛好し始めたが、医学部受験に失敗し、一年間京都女子大学国文科に籍を置くが、一九五五年四月日本女子衛生短大に入学した。翌年自分の助手にさせたいという父の希望に背き、ひそかに明治大学文学部仏文科に入学し、斎藤正直の指導を受け、中村光夫に学んだ。卒業後大学院に進学したが、一九六二年父を失い、大学院を中退した。一九六四年結婚し、一九六六年より米国のアイオワ州立大学に留学、翌年帰国した。二〇〇五年六月一〇日、拡張型心筋症により六九歳で没した。主な作品には、『パルタイ』（一九六〇）『暗い旅』（一九六一）『スマキストQの冒険』（一九六九）『大人のための残酷童話』（一九八四）などがある。また、『わたしのなかのかれへ』（一九七〇）などのエッセイ・評論、『新訳 星の王子さま』（二〇〇五）をはじめ、児童文学の翻訳も多く手がけた。

倉橋由美子は一九六〇年『明治大学新聞』に「パルタイ」を発表し、当時の選者である平野謙に「以前大江健三郎の処女作を『東大新聞』にみつけたときに似た興奮を、私はおぼえた」と賞賛され、華々しいデビューを果たした。デビュー以来旺盛な創作活動を展開、文学作品を続々と世に送り出したが、文学史上において、倉橋の作家活動時期の区分について、まだ定まった説はない。『日本女性文学大事典』では、「サルトルやカミュやカフカ、安部公房や大江健三郎などの文体を意識した方法意識のまさった作風は、三十九年の結婚、四十年から一年間のアメリカのアイオワ州立大学大学院のクリエイティブ・ライティング・コースでのフルブライト留学生生活を経て、徐々に変化を見せる。その頃から能やギリシャ悲劇に関心を抱くようになり、『反悲劇』に影響が現れる」と見なし、作風や影響受容を根拠にして、結婚からアメリカ留学終了までの間（一九六四～六七）を転換期として、その前後の倉橋文学が大きな変貌を呈しているとする。また雑誌『昭和文学研究』では、「便宜上、倉橋由美子の長い作家活動を前期・後期の二期に分け」ており、「前期は一九六〇年のデビュ

ーから一九七一年まで、育児などにより作家活動を「開店休業」していた一九七二年から一九七八年を挟み、「城の中の城」連載を機に本格的な作家活動を再開する一九七九年から二〇〇五年死去するまでを後期と」³している。

本論文では、『昭和文学研究』の時代区分に従い、倉橋の文学活動は育児などにより作家活動を「開店休業」していた一九七二年から一九七八年を転換期に、デビューから一九七一年までを前期、「城の中の城」連載を機に本格的な作家活動を再開する一九七九年から二〇〇五年死去するまでを後期とすることができると考えている。

①前期（一九六〇～一九七二）実存主義作家カフカ、カミュ、サルトルらに強く影響されたこの時期は、抽象性・観念性の強い作品が多く出版されたが、結婚やアメリカ留学を経て、日本の古典への回帰が見られる。主な作品は『パルタイ』（一九六〇）『暗い旅』（一九六一）『スマキストQの冒険』（一九六九）『夢の浮橋』（一九七二）などがある。

②転換期（一九七二～一九七八）「開店休業」の看板を掲げ、育児に専念し、新作の刊行はほとんどない。

③後期（一九七九～二〇〇五）一九七七年にシエル・シルヴァスタイン『ぼくを探しに』で初の翻訳に挑む。以後、文学活動の重点が翻訳作品に置かれるようになり、この時期に完成した小説作品は少ないが、エッセイ集や翻訳作品が数多く出版された。

倉橋の前期作品はカフカ、カミュ、サルトルら実存主義作家の影響が色濃く見られるが、後期となると、その抽象性・観念性の強い作風が一転して、イデオロギーや神話・伝説、古典作品の枠組みによって現実を裁断する作品群へと変化していく。時系列を追って作品を読んでいけば、倉橋の女性観が作風の変化と連動して大きな振幅を示していることが分かる。倉橋文学における女性像の変化を辿ることによって、そこに表現されている女性像の特質を総合的に把握し解明しようとするのが本論文の目的である。

二、倉橋由美子についての先行研究及び問題提起

文芸誌によって倉橋由美子の特集がいくつか組まれており、「高橋和巳と倉橋由美子」『解釈と鑑賞』一九七一年八月）、「倉橋由美子」『ユリイカ』一九八一年三月）、「追悼 倉橋由美子」『新潮』『文学界』『群像』二〇〇五年八月）、「倉橋由美子の魔力」『文学界』二〇〇九年四月）が挙げられる。「高橋和巳と倉橋由美子」は批評史をまとめ、政治と性、表現方法、カフカとのかかわり等、倉橋をめぐる多角的な問題を整理している。倉橋の生前

において、文芸誌が倉橋由美子の特集するのは、『ユリイカ』(一九八一・三)が最後である。『ユリイカ』の特集「倉橋由美子」は『解釈と鑑賞』の特集から丁度十年が経過しているが、その間倉橋は育児に専念し、新作の刊行はほとんどなされていない。注目すべきは『夢の浮橋』(一九七二)『城の中の城』(一九八〇)が刊行され、へ桂子さんシリーズが開始されたこと、『倉橋由美子全作品』(全八巻)が刊行され、そこに倉橋自らによる「作品ノート」が掲載されたことである。桂子さんシリーズは、それまでの作風とは大きく異なり、初期作品に見られたカフカやカミュの直接的な影響は見られない。この作風の大きな変化をどう捉えるかが、『ユリイカ』の特集でも寄稿者共通の問題意識となっている。

次に倉橋に関する文章がまとめて雑誌に掲載されるのは、『群像』『文学界』『新潮』の追悼特集(二〇〇五・八)である。すなわち、二十年もの間、倉橋を評価しようという試みは行われなかったのである。その間、倉橋は作品を発表していなかったのではなく、代表的な作品に数えられる『大人のための残酷童話』『アマノン国往還記』や桂子さんシリーズの続編となる作品の数々を発表し続けていた。にもかかわらず、倉橋を正面から捉え、論じ、その価値を明らかにしようという大きな流れは一九八一年を最後に途絶えてしまうのである。

『ユリイカ』の特集以後、特に倉橋の死去にともない、榊敦子や菅聡子をはじめ、倉橋を再評価しようとする動きが高まってきた。二〇〇八年三月倉橋に関する先行研究や書誌情報をまとめた『人物書誌体系38 倉橋由美子』(田中絵美利、川島みどり共編)が刊行されている。また二〇〇九年三月『昭和文学研究』によって倉橋の研究動向が取り上げられている。しかし、現在に至るまで、倉橋に関する単行書は高橋斗志美の『倉橋由美子論』(サンリオ出版、一九七六年七月)の一冊のみである。高橋は「パルタイ」から「夢の浮橋」(一九七二)までの作品を追い、その反世界的構造を照射しようと試みている。

「洋服精神で押しとおしてきた女流作家」と評価されるように、倉橋文学は実存主義作家から栄養を取っていたため、抽象的かつ観念性の強い作風が日本の伝統文学から外されて、王道の文学とかなり距離を取る位置に置かれている。そのため、一時期文壇では収まりの悪い作家として時には非難され、時にはその存在を無視されるという扱いを受けてきた。しかし、いろいろなジャンル、いろいろな作品が寛容に鑑賞され、評価されるようになりつつある近年、倉橋文学を読み直すには絶好の土壌が与えられていると考えられる。休業以前、「夢の浮橋」(一九七〇)までの活動については比較的によく論究されているが、綿密な作品論は少ない。以上の背景を踏まえ、本論文は倉橋の小説の大部分を取り上げて、以下のよう

うに問題提起する。

- ① 性の捉え方、愛と結婚との関連性、そして母性感覚といった点において、倉橋文学における女性像がどのように表現されているか。
- ② 作風の変化とともに、倉橋文学における女性像も変化していく。その変化をどう捉えるか。
- ③ そういった女性像の変化には海外文学がどのように関わっているのか。

上記の三点の問題を考察することで、倉橋文学を再検討し、再評価することが本論文の目的である。倉橋の小説の大部分を取り上げ、そこに表現されている女性像の特質を総合的に把握し解明しようとするのが本論文の目的である。

三、本論文の目的と構成

本論文は、倉橋由美子の文学作品における女性像について考察することを目的とする。また、倉橋の女性像の形成に重要な影響を及ぼしたと考えられるシモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品を取り上げ、倉橋文学特に女性論との影響関係を明らかにしたい。

論文の構成は次の通りである。

第一章では倉橋文学における夏・海・太陽を舞台とする作品群を取り扱い、太陽に焦点をあて、太陽と死、太陽と性という二つの点における共通点を確認しながら、神話的要素を漂わせている近親相姦やレイプといった相違点に着目し、それを突破口に、倉橋文学における女性性について考察する。

第二章では、同性愛、近親相姦、サディズム・マゾヒズムなど、ゆがんだ行為を好んで行う女主人公に着目し、そういった性的倒錯に生きる女主人公たちの言動を分析することによって、倉橋がヒロインたちの倒錯的愛を通して表現しようとしたことを究明する。倉橋は「貝の中」「死んだ眼」などの作品において、レスビアン・ラブ、ゲイ・カップル、そして男性間のサディズム・マゾヒズム、聖女にして娼婦というモチーフを取り入れ、男性に「裏を提供する」あるいは妊娠するといった「第二の性」の体験をさせたり、女性を性的快楽からまったく無縁の存在として描写したりして、性への新しい考え方を提示しようとする。

第三章では、当時、見合結婚を蔑視する社会風潮が流行するなか、同時に複数の人間と恋愛を謳歌するという時代の先端を切る生き方を実行する女主人公も造形されるが、倉橋文学における女主人公は「結婚」という作品を分岐点に、結婚反対論者から、見合結婚の実践者へと変化していく。女主人公の言動には当時の流行要素や社会状況を反映する要素が盛り込まれたため、女主人公の言動を読み解くことは、当時の社会状況を把握するには絶好の材料を提供している。

第四章では、「倉橋の女性論の基本」と言われる「わたしの「第三の性」」の成立とシモーヌ・ド・ボーヴォワールからの影響について論じる。「わたしの「第三の性」」以外にも、倉橋の作品特に「暗い旅」における「あなたがた」の関係の背後にはボーヴォワールとサルトルとの関係と同様な性愛関係と理論的關係が働いているように思われる。ボーヴォワールが生涯を通して実践する契約結婚を取り上げた作品と、倉橋の作品およびエッセイとを比較することによって、倉橋の女性論思想を明らかにすることを目的とする。

倉橋文学における母親は肥満した体つき、旺盛な食欲、不気味な眼などの持ち主として表象されることが多い。第五章では、そういった母親像の造形にテリブル・マザーのイメージを取り入れた可能性について検討する。肥満した母親像以外にも、母親殺しが大きな共通点として挙げられる。母親殺し以外に、母が我が子を食べるというグロテスクな話も出てくる。母親殺しが最もグロテスクに描かれた「蠍たち」、そして我が子を食べる母親を描いた「婚約」を中心に考察し、ユングのいわゆる母親の元型である「グレートマザー」そしてフロイトの「同一視」という概念を援用し、そういったグロテスクなモチーフがどのようなプロセスを経て産み出されたのか、またその背後に潜む倉橋の真意を解説したい。

このような研究を通して、次のような成果が期待できると考えられる。

① 性の捉え方、愛と結婚との関連性、そして母性感覚といった点から、倉橋文学における女性像を全体的に把握する。

② 倉橋の女性像の成立に影響を与えた海外文学との関連性を提示する。

③ 倉橋の女性論思想の成立に決定的な影響を及ぼしたボーヴォワールの女性論との影響関係を提示する。

平野謙「今月の小説（下）」『毎日新聞』東京朝刊、一九六〇年一月二十九日、七頁

市古夏生・管聡子・浅井清『日本女性文学大事典』日本図書センター、二〇〇六年一月、一〇五頁

田中絵美利「研究動向 倉橋由美子」『昭和文学研究』五八集、二〇〇九年三月、六四頁

「『東京新聞の『大波小波』が、わたくしのことを、洋服精神で押しとおしてきた女流作家だとか、いつていました」（倉橋由美子「ロマンとは可能か」（初出『文藝』一卷二号、河出書房新社、一九六二年三月）『わたしのなかのかれへ』講談社、一九七〇年三月、七一頁）とある。

谷口絹枝「倉橋由美子「パルタイ」論―「わたし」の存在感覚からのアプローチ―」『方位』

（熊本近代文学研究会）一三号、一九九〇年八月、一四二頁

第一章 夏・海・太陽と女性性

倉橋由美子の前期作品には、夏・海・太陽を舞台として登場させている作品が多い。そういった作品において、理由のない殺人か近親相姦あるいはレイプが行われるという点において共通している。真夏の海岸、砂と海と太陽、その中で起こる無意味の殺人、そして不条理の観念といった点はいずれもアルベール・カミュ (Albert Camus, 一九一三～一九六〇) の『異邦人』と奇妙に似通っている。しかし、それらの作品は『異邦人』と異なり、近親相姦あるいはレイプといった要素が付加されている。夏・海・太陽という舞台設定を考えると、夏は陽射しが一番強い時期であり、そして夏の陽射しが照りつける広々とした空間として海は相応しい。そのため、夏と海はいずれも太陽を際立たせる設定として提示されていると考えられる。本章では、倉橋文学における夏・海・太陽を舞台とする作品群を取り扱い、『異邦人』と比較して、太陽と死、太陽と性という二つの点における共通点を確認しながら、神話的要素を漂わせている近親相姦やレイプという相違点に注目し、それを突破口にして、倉橋文学における女性性について検討していく。

第一節 倉橋由美子と『異邦人』との出会い

倉橋はカミュの『異邦人』について繰り返し言及している。たとえば、「青春の始まりと終わり」（一九六六）において、自分の人生を決めた本としてカフカの『審判』のほかに、カミュの『異邦人』を取り上げている。仏文科の学生時代、フランス文学と名のつくものを手当たり次第読んでいたら、文庫本の『異邦人』と出会ったのであると『異邦人』との出会いを語っている。そして、「真夏のアルジェの海岸、砂と海と太陽、そのなかで響きわたる銃声、理由のない殺人、裁判の進行に対するムルソーの拒絶と無関係、そして不条理の概念」といったものの魅力が「田舎の高校でもっぱら「教養主義」的読書をしてきたわたしの内部を、はげしく灼いたのです」と当時覚えた猛烈な感動を述べており、何度も繰り返し読んだと『異邦人』に対する賞賛を惜しまなかった。それに、倉橋が愛した作品だけを集めた書評集『偏愛文学館』において、「カミュの『異邦人』は戦後翻訳された外国文学の中でも断然輝きを失わない名作のひとつです。それに今でもまったく古くなっていません。これも他の「敬して遠ざけられている」名作とは大いに違うところですよ」と後年になっても依然として『異邦人』を高く評価する姿勢を崩していない。

また、倉橋は「異邦人の読んだ『異邦人』」（一九六八）において、「わたしはまず翻訳で『異邦人』を読んだ」とはっきり述べている。『異邦人』の邦訳は窪田啓作訳、中村光夫

訳などいくつかのバージョンがある。倉橋はエッセイにおいて、窪田啓作訳に高い評価を与えている。たとえば、「異邦人の読んだ『異邦人』」において、「窪田啓作氏の『異邦人』はたしかに名訳の一種だった」とし、大学で『異邦人』をフランス語のテキストにして日本語に訳すという中村光夫の翻訳授業を受けた時も、「みんな窪田氏の訳文を「参照しながら」訳すのだ」と当時を振り返って語っている。それに、「偏愛文学館」において、「窪田啓作氏の邦訳の文体があまりにも見事なためで、（中略）邦訳はいささか格調高くなり過ぎていくのです。とはいっても、カミュのフランス語の文体をお手本にして日本語で小説を書けばこうなる、というわけで、これは当時小説を書こうとしていた人たちに大変な衝撃を与えたはずです（少なくともわたし自身はそうでした）」と窪田訳からの影響を明らかにしている。そして当時の出版状況に前述した「文庫本」といった表現を考慮すると、倉橋が仏文科時代（一九五六年四月～一九六〇年三月）に出会い、愛読していたのは新潮文庫版の窪田啓作訳（一九五四年）であると考えて差し支えないだろう。

第二節 『異邦人』と「夏の終わり」「蠍たち」「パッション」「醜魔たち」「悪い夏」における太陽と死

① 殺意を引き起こす要因としての太陽からの逃避

『異邦人』は、一九四〇年五月に書き上げられ、後の一九四二年ガリマール社から刊行された、人間社会に存在する不条理をテーマにしたアルベール・カミュ（一九一三年一月七日～一九六〇年一月四日）の小説である。刊行後絶賛されることよって、カミュは短いが、まことに栄光に満ちた文学的生涯にむけて出発した。通常の倫理的な一貫性が失われる男ムルソーを主人公に、理性や人間性の不合理を追求したカミュの代表作の一つとして数えられる。

あらずじは以下の通りである。アルジェリアのアルジェに暮らす主人公ムルソーのもとに、母の死を知らせる電報が養老院から届く。母の葬式のために養老院を訪れたムルソーは涙を流すどころか、特に感情を示さなかった。葬式の翌日、海水浴に行き、以前同じ事務所タイプリストとして働いていたマリー・カルドナと関係を結び、映画を見て笑い転げるなど普段と変わらない生活を送るが、ある日、友人レエモンのトラブルに巻きこまれアラビア人を射殺してしまう。ムルソーは逮捕され、裁判にかけられることになった。裁判では母親が死んでからの普段と変わらない行動を問題視され、人間味のかけらもない冷酷な人間であると糾弾される。裁判の最後では、殺人の動機を「太陽のせいだ」と述べた。死刑を宣告さ

れたムルソーは、懺悔を促す司祭を監獄から追い出し、死刑の際に人々から罵声を浴びせられることを人生最後の希望にする。

「『異邦人』の哲学的翻訳」（サルトル）といわれる『シーシュポスの神話』のあとがきにおいて、清水徹は「小説『異邦人』の前身にあたる未発表の作品『幸福の死』」の主人公はメルソー Meursault というのだが、この名前は「海」^{メル} Mer と「太陽」^{ソレイユ} Soleil を意味しているという説がある。これにならって類推をつづければ、『異邦人』の主人公のムルソー Meursault という名前は、「死ぬ」^{ムール} meurs と「太陽」^{ソレイユ} Soleil を意味するということになるだろう」と述べており、「ムルソー」という主人公の名前は暗示的であり、太陽と死の関連性を示唆し、ムルソーの生涯を象徴するものと指摘したうえで、「『海』と『太陽』と『死』とは、カミュの全世界をつらぬく―そしてとくに出発のころのカミュが繰返し語った―三つの主題」¹³であると強調している。また、それに続き、太陽と死の関係を以下のように述べている。

きらめく陽光は、たしかに、自然への愛をさそう。そこには感覚の陶酔があり、生の祝祭がある。だが、すべてをつらぬくかに思える陽光も、物体に当たれば影をつくりだすことを、カミュは見落としていない。燦々と降り注ぐ陽光の下に立つ人間は、足もとに、自分の肉体の死の宿命を告げる暗い影を見いだすだろう。世界の現前と、そこにおける生の燃焼をもたらす太陽は、同時に、明晰を求める意識の光、あくなき絶対糾問の象徴でもあり、それゆえに、いつさいを明確な統一のもとに把握することはついに不可能であると告げる、いわば「死」の予告者でもあるのだ。生の悦びが同時に死へのあくまでも醒めきった凝視でもあるという、徹底的な矛盾の同時的現存、それがカミュにおける「太陽」と「死」との相関関係なのだ。（二〇四頁）

カミュは父親を戦争で亡くしたため、母と兄と共に、母方の祖母の暮らす労働者町であるベルクール地区のリヨン街に転がり込んだ。困窮した不自由な生活を強いられたが、海、空、太陽といったアルジェリア海岸の自然の美に囲まれ育ってきた。極度の貧しい生活の故に、一層、自然に対して豊かな感受性を持つようになる。しかし、カミュは一九三〇年、肺結核の最初の発作に襲われ、一七歳の青春はたちまち結核という死の影に脅かされた。そうして生と死の問題をより切迫したものと感じ、死ぬことへの恐怖や、生きることへの愛という狭

間に苦しみながら、カミュは人間の存在を生と死という二つの確実な明証の緊張した対決のうちにある存在とし、「死への恐怖は、生への羨望につながっていること」、あるいは、「生きることへの絶望なくして、生きることへの愛はない」⁵と認識するようになったと思われる。

アルジェの光と輝かしい美は、貧しい生活に追い込まれる幼年時代のカミュに貧困に耐える力を与える。それと同様に、「この太陽、この海、若さに躍動するぼくの心、塩味のするぼくの肉体、そして、情愛と栄光とが黄と青のなかでめぐり会う壮大な背景」⁶と語られる豊かな地中海自然は、結核と自殺の固定観念に悩まされているカミュを救いだし、生きる希望と勇気を見いださせる。美しい地中海の自然はカミュにとって、この世界と融和させる天国だった。そういった青春体験を背景に、死ぬことへの恐怖や、生きることへの愛はカミュの初期作品を貫くテーマの一つになっている。そしてカミュが愛していた太陽も生の燃焼をもたらすと同時に、影を作り出すように死を予告している。即ち太陽は生の象徴でありながら、死の象徴でもある。その点は『異邦人』における太陽の描写にも裏打ちされている。

『異邦人』にしばしば登場する海水浴の場面では、「私は太陽によって爽快になるのを感じ、それに気をとられていたからだ。(中略)沖に出て、我々は浮き身をした。顔を空へ向けていると、私の口もとまで流れて来る、水のヴェールを、太陽が払いのけてくれるようだった。(中略)マリーの体のほてりと、太陽の熱とのせいで、わたしはすこしうとうとした」⁷と描かれるように、太陽は海水と結びついて心地よい存在となり、ムルソーに幸福感を与えている。ところが、それ以外の場面では、太陽のイメージは一転して、幸福感をもたらすどころか、攻撃性を帯びる死のシンボルと化す。たとえば、ママンが埋葬される場面において、「陽の光が満ち」て「タールをきらきらさせた」、⁸「足が道にはまりこんで、きらめくタールの肉を押しひろげ」るといった描写から、太陽はいかなる物質をも溶かしてしまう存在として描かれていることが明らかである。参列者の顔からは「汗のしずくが額に玉をなして流れるなか、「私」は太陽の煌めきに堪えがたく、「こめかみに血が脈打っているのを感じ」る。

また、ムルソーがアラビア人を射殺する場面において、「ママンを埋葬した日と同じ太陽だった」という表現に示されているように、すでに死のイメージがかもし出されている。「太陽の光はほとんど垂直に砂のうえにふりそそぎ、海面でのきらめきは耐えられぬほどだった」⁹「熱くなり過ぎた砂は、今、私には赤く見えた」、¹⁰「太陽はいま圧倒的だった。砂の上に、海の上に、ひかりはこなごなに砕けていた」、¹¹「額に痛みを感じ、ありとある血管が、皮膚のしたで、一どきに脈打っていた」と描かれるように、陽射しが増して、攻撃性を帯び

てくることが読み取れる。そしてアラビア人が抜いた匕首からほとぼしる太陽の光は「刃」「剣」「剣」にたとえられることによって、太陽の攻撃性がピークを迎えることが如実に表象されている。「額に鳴る太陽のシンバルと、それから匕首からほとぼしる光の刃の、相変わらず眼の前にちらつくほかは、何一つ感じられなかった。焼けつくような剣は私の睫毛をかみ、痛む眼をえぐった。そのとき、すべてがゆらゆらした。海は重苦しく、激しい息吹を運んで来た。空は端から端まで裂けて、火を降らすかと思われた」¹⁾といった細部描写からも、「太陽のせいだ」と述べられた殺人の動機の一因として、太陽の攻撃性が顕然としていふることと言えよう。

ムルソーは最初、精神的に苦痛をもたらし続ける太陽に打ち勝とうと試みるが、失敗に終わる。その後、ムルソーは「太陽や骨折りや女たちの涙から逃れたい」と思い、影と憩いとを岩陰の涼しい泉に見出そうとするが、またもやアラビア人に遭遇する。事態を回避しようとするムルソーであるが、太陽の攻撃がエスカレートするうちに、次第に身体全体の自由が奪われ、冷静な判断力どころか、犯罪を犯してはいけないうという理性までも壊される。ムルソーは発砲することによって、ようやく太陽を汗とともにふり払うことができるのである。

② へ反世界へのシンボルとしての太陽の希求

倉橋は夏・海・太陽を舞台とする作品を数多く生み出したが、その中で、理由のない殺人が頻出している。それは真夏の無意味の殺人といった『異邦人』の要素からの影響が大きいと考えられる。

「夏の終わり」は一九六〇年『小説中央公論』一月号に発表された、石と海を灼く太陽の支配する真夏が舞台となる短編小説である。「わたし」は「妊娠や出産、そして結婚といった考えは石と海を灼く太陽の帝国にあつてはなによりも喜劇じみてみすばらしいものだ」（一六頁）という観念の持ち主であるが、自分が妊娠しているという勘違いに陥ると、恒常的な嘔吐のなかに押し込められ、追い詰められる。そして世界を拒絶しはじめ、「管理人の死、父の死、そして妹の死さえも望んだ。おびたしい死だけがこの軟体動物のように砂をなめている海にふさわしい」（一七頁）と宣言し、おびたしい死を持って嘔吐を中和しようとする。その結果Kは溺死させられることになる。

Kを溺死させる場面では、太陽が重要な役割を果たしている。『異邦人』における太陽の攻撃から逃げようとするムルソーとは対照的に、「太陽が支配する光の領域に出たとき、わたしたちはさらに太陽を求めて泳がずにはいられなかった。防波堤を過ぎ、岬をまわると、わたしは冷たい潮流に乗っているのを感じた。頭を並べている妹と眼をみあわせたとき、わたしは突然の決行を決意した」（一七頁）。この思い付きによる決行は一見「焼けつく真夏

や真昼の灼熱がもたらす有毒で燃える狂気を表す」⁵²という太陽の象徴性に証拠づけられるが、しかし、八月の太陽は夏の衰弱を告げるとともに、太陽に象徴される狂気や『異邦人』に描かれる攻撃性を失いつつある。

「蠍たち」は一九六三年一月『小説中央公論』に掲載された、近親相姦、母親殺し、完全犯罪といったグロテスクな主題が取り扱われる作品である。倉橋自身が言うところのK—L型小説⁵³の典型で、KとLという精神上双生児の姉弟を主人公とする。LとKは共犯して、完全犯罪でユカリ・Q・Sを殺した後、家に戻り、糞まみれの母親を首吊りで殺す。溺死させられるユカリ、Lに唆され殺しあうこととなる「赤豚親子」、吊し上げられる母親というように、「蠍たち」には死のイメージが氾濫している。

無意味な殺人といった点においては、「異邦人」と共通しているが、しかし、死の現場にいずれも太陽が顔を覗かせていない点においては、『異邦人』と異なっている。たとえばユカリを海に誘った日、「台風が接近しているらしく、海は高い波をたててうねっていました。（中略）彼女が水死するには絶好の荒模様でした」（三三三頁）と述べられている。その相違は殺人方法によるほか、オホーツク海やベーリング海に流れる北海道の海が舞台となることも関係していると推測される。S半島のR漁港についた日、「陽はまだ高かったのに、それは天の一角にあつて」、「わたしたちの太陽とは思えない衰弱した光を放ち」、「黄いろい矮星のような太陽」（二三三頁）と述べられるが、それと一線を画するように、翌日の太陽は「金色」で、「よく燃えてい」（二六頁）た。その二カ所以外に、太陽に関する描写はほとんど見当たらない。

「蠍たち」の後継作として位置づけられる「パッション」は一九六三年九月に『小説中央公論』一八号に発表された短編小説である。倉橋は「全作品」に付された自作解説において、『異邦人』との関連性について、「例によってこの小説のお手本をあげると、まず『異邦人』の後半の部分がそれに当たる。特に裁判の場面と、ムルソーが御用司祭に向って怒鳴るところは明らかにお手本になっていて、これと似たことをこの小説で書く必要上、「ぼく」は小説の前半でむやみに人を殺さなければならなかった。この点はムルソーが太陽のせいでも人を殺さなければならなかった事情と軌を一にする」⁵⁴と明言している。

「パッション」では、至る所、死のイメージが充満している。無意味な殺人といった点においては、『異邦人』と一致しているが、しかし、太陽と死の関連においては、殺人に太陽が強く関与している『異邦人』とは異なっており、太陽の影はあるが、事件の発生と決定的な関連性を持ち合わせていない。「黒い太陽」「血のような日の出」「濃縮ジュースのような黄いろい光」「黄疸病みの顔をした大きな夕日」という太陽に関するごく僅かな表現から

見れば、いずれも暗くて強烈な表現である。例えば、「日ごとにぼくの頭のように黒い太陽が空をひろげてとおり、よく灼けた砂のうえから海のなかまで海水浴にきた人間でいっぱいでした」とあつて、海水浴にきた人間を殺す遊びを繰り返すという叙述の直前に来る描写である。「黒い」と表現される太陽は単なる情景描写だけでなく、「ぼく」の心理とも重なり合った描写になっている。情景描写を通して「ぼく」の内面にある不気味さ、虚しさ、寂寥感、孤独感が暗示されている。

また、一九六五年一月に『日本』（八巻一一号）に発表された「醜魔たち」においても、死のイメージが氾濫している。睡気の翼が「ぼく」をおおう時、「ぼくのなかば麻痺した思考のなかにはいつもあの岬があった」。「ぼく」はいつも岬の向こう側の世界に憧れを感じている。ついに夢の中で、失敗を繰り返していくうちに、「ふいにぼくはエクスタシイの鳥と化して飛翔し、あの岬のむこう側をみる」。「ぼく」が夢見る岬の向こう側に、「どこにもない場所にそびえるねあんの城、想像力のランプから発するにせの光、理由のない風……」と描かれる《無》の城が待ち受けている。《無》の城を照らすのは「闇のなかに繫留、がらんだの、骨ばかりの、蒼白の太陽」である。しかも、よく見るとその太陽は「巨大な廃星」として、「荒廃の棘を輝かせてゆっくりと自転している」のである。廃星と化した太陽は向こう側の世界に存在するならば、現実社会の太陽は「にせの太陽」、「日々の希望がその運行を空にえがきだす幻の太陽」（三三三頁）として捉えられる。死の場面において、太陽は事件に関与していないが、「ぼく」の夢見る《無》の世界の象徴として提示されている。

「悪い夏」は一九六六年八月に『南北』（南北社）一巻二号に発表された、女流作家Lを主人公とする物語である。「Lの体内におこった内部感覚の変調は、ここ数週間のうちに頭脳をのぞくあらゆる臓器にひろがって、それはいわば、緩慢ではあるが着実な「死」の萌芽によるものではないかとおもわれた」と語られる冒頭から、死が物語の基調となして漂っている。癌を「もつとも戦慄的で魅力的な可能性」とし、また「藤椅子にもたれて目を閉じ、疲れた臉を指で撫でながら、近づいてくるもの、Lの内臓を侵し腹腔にひろがりはじめている「死」を待ち受けた。Lは下腹部一帯の鈍痛が消えていないことをたしかめて一種の安堵をおぼえた」（一三七頁）といった叙述から、Lは自分の死に接する、または死を垣間見ることに快感を感じ、それに対する欲求を実感することが読み取れる。

死のイメージが氾濫するものの、太陽に関する描写は少ないが、いくつかの役割をはたしていることが分かる。たとえば、「太陽の衰退、活力を失いはじめた海、引潮に似た逗留客の減少……あらゆる徴候が強盛を誇った夏の退位の近いことをしめしていた」（一七八頁）という自然の衰弱を描く場面では、太陽は季節の移り変わりや時間の変化を表す象徴とし

て描かれる。また、「Lは自分が独房で処刑の告知を待つ死刑囚に酷似しているのを感じた。遠方に石切場のようなもののみえる風景……ゆうぐれ、細い道をころげながら退場していく太陽、空を焦がす世界中の火事……Lは目をあげたままそんな幻影をありありとみた」（一四〇頁）という場面では、「退場していく太陽」という表現は、「もうなすべきことはなかった」と意識したLの虚無感を漂わせている一方、「前衛」作家であるLの転落をも意味あるいは予告しているのかも知れない。こういった自然の変化や登場人物の心情の象徴として描かれる太陽は太陽表現のほとんどを占めるが、『異邦人』のように、太陽の攻撃的な一面も描写されている。

LがMに会えず落ち込んでいる時、雨に降られ、熱を出すシーンがある。熱で意識が朦朧としてきて、「駱駝の瘤をおもわせる起伏、そのあいだにひかる死魚の目に似た沼、湧きあがる濃霧、そのむこうにみえるのはひとかかえもある太陽だった」という幻覚を見る。「駱駝の瘤をおもわせる起伏」「死魚の目に似た沼」「湧きあがる濃霧」といったネガティブな表現に、「むこうにみえる」「ひとかかえもある太陽」は一見希望へ誘うように見える。しかし、「きわめて緩慢な速度」であるが、太陽は攻撃的な側面を帯び、迫ってきつつある。太陽の攻撃的な側面から逃げようとするムルソーとは違って、Lは接近してくる太陽に恐怖を感じるものの、太陽を呑み込むという積極的な態度を取る。

以上のように、カミュの文学作品における無意味の死という要素が倉橋の作品群に受け継がれていることが分かる。しかし、『異邦人』と比べてみると、夏・海・太陽を舞台とする倉橋の作品群では、死の場面における太陽の役割が薄れている。また『異邦人』においては、ぎらぎらと燃える太陽は地中海特有の灼熱や光によって暴力的・破壊的感覚に結びつくが、倉橋の文学世界では、太陽の描写が少なく、また、それに加えて激しい変化を見せず、穏やかである。また、『異邦人』に大きな比重を占める太陽の攻撃的な側面があまり描写されておらず、そのうえ、攻撃的な太陽から逃げようとするムルソーとは対照的に、夏・海・太陽を舞台とする作品群の主人公たちは太陽を求める傾向が見られる。たとえば、「夏の終わり」において、Kを溺死させる直前の場面では、「太陽が支配する光の領域に出たとき、わたしたちはさらに太陽を求めて泳がずにはいられなかった」と述べられる。「醜魔たち」では、睡気の翼が「ぼく」を覆うとき、「ぼく」の半ば麻痺した思考のなかにはいつも「闇のなかに繫留された、がらんだりの、骨ばかりの、蒼白の太陽」が照らす《無》の城があった。また、「悪い夏」では、熱で意識が朦朧としてきて、Lは迫ってくる「燃える砂のように熱い」太陽を呑み込もうとする。

『異邦人』において、カミュは太陽の光によって精神的に追い込まれたムルソーに、発砲するという行動を取らせる。それと似たように、倉橋は作品群において、主人公たちを精神的なピンチから救うために、無意味な殺人以外に、近親相姦（「蠍たち」）、レイプ（「暗い旅」「悪い夏」）やサディズム・マゾヒズム（「醜魔たち」）など、様々な異常な行為を主人公たちに行わせる。しかも、無意味な殺人の場面だけでなく、倉橋はそういった異常な行為の場面にも必ず太陽を登場させている。換言すれば、太陽が照らす世界にはおびただしい無意味な殺人や近親相姦あるいはサディズム・マゾヒズムなどの異常な行為が相応しいことが読み取れる。

第三節 『異邦人』と「夏の終わり」「暗い旅」「蠍たち」「パッション」「醜魔たち」「悪い夏」「犬と少年」における太陽と性

① 肉欲を起こさせる太陽

「女の身体を抱きしめることだ。それはまた、空から海に降ってくるあの不思議な悦びをわが身にひきとめることだ」¹³と初期エッセイ「結婚」にあるように、カミュは太陽の光に肉欲のイメージを膨らませていることが読み取れる。話を『異邦人』に戻せば、母の埋葬の翌日、ムルソーは海で、以前同じ事務所でタイピストとして働いていたマリー・カルドナに再会する。彼はマリーがブイに登るのを手伝うと、ブイの上の彼女のそばによじ登る。彼はふざけたふりをして、彼女の腹の上に頭をのせる。空は青く黄色がかっていて、ムルソーは自分のうなじの下に「マリイの腹がしずかに波打つ」のを感じる。これはマリーが最初に登場する場面である。海水浴において、ムルソーは絶えずマリーに肉欲を感じている。そう感じたのは、太陽が強くなるると海に飛び込む、そして小麦色に日焼けしているマリーには、太陽のイメージを重ね合わせたからであると考えられる。即ちムルソーの眼には、太陽にやけているマリーは太陽の象徴であり、太陽と同じ価値を持つ存在として映っていたのかも知れない。

『異邦人』において、ムルソーを愛しているマリー・カルドナという女や、巷で女術と噂され、ムルソーを一連の事件に巻きこんだ張本人とも言えるレーモン・サンテスという男は、物語を展開するうえで重要な役割を担っている登場人物である。ヴィリジル・タナズは二人の名づけの意味に注目し、それぞれカミュの母方の祖母の旧姓や祖父の名¹⁴が織りこめられていると指摘している。そして、ムルソーがマリーの腹の上に頭をのせる場面について、「どうやらムルソーは、母を亡くした後、象徴的にマリーの、その海の子宮へ胎内回帰し、もう

一度新しい誕生をしようとするかのように」と興味深い指摘を行っている。それに続き、「青と金」という色彩の使い方に触れており、以下のように述べている。

「青と金」という色彩やマリイという名、そしてムルソーを「現代のキリスト」とアメリカ版の序文でいうカミュの言葉から、聖母マリアとキリスト、というテーマ系をわたしたちはテキストから容易に抽出できる。(中略)また逆に、海や花のイメージに包まれる小説のなかのマリイ・カルドナが、いかに作家の夢の力で造形されたものであるのかも、伝記的事実を知るといっそうよく分かってくる。彼女のような屈託のない明るさや自由はアルベール之母や祖母にはなかったようだから。彼は、とりわけ母に、彼女には許されていなかった生き方を、文学を通してつくりなおし、名のもとに送ろうとしたのかもしれない。ほとんど禁じられた愛のように。もしかすると現代のオイディプスのように。²³

マリイとムルソーとの関係は完全に聖母マリアとキリストとの関係に置き換えられなくても、マリイとムルソーは聖母マリアとキリスト的な要素があることは容易に否定できない。それはムルソーが囚われの身となっても、ずっと支えているマリイの姿からも裏打ちされる。母親の葬式の翌日に、海水浴で再会したマリイと性的関係を持つようになったのは、マリイに母親の温もりを求めていたからであるとも考えられる。

② 太陽を背景とした性交渉

「夏の終わり」において、「わたし」がKに肉欲を感じる時は、いずれもKが太陽の光に包まれている時である。即ち、太陽は性にとつて切っても切り離せない存在である。「一度海にひたるとからだは潮の匂いをたてて灼けはじめた。あらゆる烈しい色彩をまとった裸の人間たちは世界の過剰な成分から析出したきらめく結晶をまきちらしたようにみえた」(八頁)と語られる最初の出会いの場面では、「わたし」は店で海から上がり、ソフトクリームを食べていたKを見て、「さわやかでセクシユアルな興奮」を感じた。そして翌朝訪れてきたKに、「驚きと羨望を感じた。この感情はまもなく、かれを、その明晰な形態をもつ存在のままですべて所有したいという欲望に移行した」(九頁)。太陽のもたらす光のなかのKはきらきらと輝き、「わたしたち」に肉欲を起こさせる。しかし、太陽はいつも海を照らすわけではない。台風で天気が崩れた時、「光の欠乏がKを怠惰で無気力な青年にみせていた」(二三頁)のである。Kのイメージの転換は太陽の光と相関していることは容易に読み取れる。

「暗い旅」は一九六一年一〇月に東都書房から出版された、倉橋のはじめての書き下ろし長編小説である。「あなた」と二人称で呼ばれる女主人公が、突然失踪してしまった婚約者の「かれ」を探し、居場所を失う不安や苦痛などを味わいながら、少女から大人へと成長していく経緯が描かれる。「あなた」は十二歳の夏、海辺で裸の「Yの字」を書かせられ、少年たちに「眼による強姦」をされる。この受難劇は太陽が降り注ぐ夏の海を舞台として登場させている。「八月のある午後、満潮の近い海、膨んだ海、太陽のまきちらす白いきらきらした破片におおわれて伝説的な巨獣のようにその腹をなみうたせていた海……」という背景の下で、「眼による強姦」が行われる。またその後の場面では、「それからあなたは砂のうえに腹ばいになって、裸のまま、苦しい嗜眠状態におちた……受難のとき、砂に磔けられ背にいったいの太陽のせおった受難のとき……あなたは砂に指をつきたてて身悶えしていた、この熱い喪心からはいだそうとして……あなたがめざめたとき、世界はすでにおおきな翳におおわれ、海は岩礁をむきだして沖にしりぞいていた。口のなかの砂を吐いた。背中がひどい火傷のように痛んだ。ぬぎすてられた水着は塩と砂をふくんで乾き、昆布のようにこわばっていた。西の水平線の極度に膨れあがった太陽とむかいあったとき、あなたは嘔きけをともなう悪寒をかんじた……」（九九頁）と語られる所から、眼による強姦は終始太陽に見下ろされていることが読み取れる。

「蠍たち」では、二卵性双生児のLとKは幼い頃から共同部屋で暮らしており、くすぐりあいと山賊ごっこという遊びの繰り返しで育ってきた。山賊ごっこは、くすぐりあいで負けた方が身ぐるみ剥がれて縛られて、相手にどんなことでもさせるという遊びである。こういった近親相姦を仄めかすエピソードがたくさんあるが、二人が近親相姦に踏み出したのは旅に出たからの話である。「ときにはもの珍しげなふりをしてかれの外のかれにさわってみることもありました。といってもかれのほうはわたしにさわられるのを極度にいやがっていましたけれど」（二二頁）という一句からも明らかのように、それ以前に、二人はさりげなく近親相姦という罪を避けようとしていたのである。近親相姦の場面では、「腹を太陽にむけて」「ファロスが植物のように芽を出して陽に輝く」といった表現に明示されているように、太陽と性との関連性が受け継がれていることが分かる。また、「正午すぎ」「海岸づたいに二キロほど離れた滝の下」を考慮すると、正午過ぎの太陽が照りつける海辺で性交渉している光景が容易に想像される。

太陽と性の関連性は「醜魔たち」においても同様に反復される。「ぼく」は「どちらかといえば寡黙な少女で、めったに笑わず、笑うときには真夜中に突然あらわれた太陽のような笑顔を見せる」Mに性的欲望を感じるとき、その背景にいつも太陽の光が降り注いでいる。

例えば、台風が過ぎた翌朝、Mと散歩に出かけ、Mは腕を「ぼく」の腕に絡ませると、「その顔の皿に陽光をうけて目をとじたが、それはまるでぼくの《愛》を一滴もこぼすまいとしているかのようだった」。陽光に包まれるMの顔の「愛らしい誘惑」にそそられ、「ぼく」は「その顔から《愛》を吸いとってしまうために」（三五頁）Mを砂のうえに倒し、接吻した。

「悪い夏」では、Lは高熱により、太陽が迫ってくる幻覚を見るシーンがある。「燃える砂のように熱い外部」に耐えきれず、「Lはこの太陽をのみこもうと決意した。からだをひらく。火球を体内に吸いこみ皮膚の内側で抱きしめる……これはまさに原生的なもの、宇宙的なものとの性交だ、とLはのしかかる病魔の下で考える」。太陽を呑み込む行為に注目したい。太陽は「男性、力、生命力、霊、意識（超意識）、個性、そして青春」を象徴すると解釈される。「燃える砂のように熱い外部」のシンボルとして表現される太陽は、攻撃的な側面を持つが、生命力と希望をもたらす点においては、Lが「病み崩れていく内部」から見れば、一番必要としているものかもしれない。太陽を呑み込むという行為によって、病み崩れていく内部の空洞を太陽がもたらす希望に似た活力で埋めようとしていると考えられる。また、男性を象徴する点から言えば、太陽を呑み込むという行為は性的なニュアンスを匂わせる。また、強姦の場面を確認すると、LがMの作品を手にとって無人島に渡ったのはまだ冷たい朝である。「Lが悲鳴をあげるのと裸の少年たちが飛びかかるのと同時だった。無数の鋭い爪に衣服を剥ぎとられたとき、瘡せてはいるが、年齢を超えてその無垢な「性」の形態を保ってきたLの身体が太陽にさらされた。Mがモーターボートを運転してやってきたのは正午まえのことだった」（二八三頁）と描かれる強姦の場面から、太陽の存在を確認することができる。

「犬と少年」では、女流作家Lは家によく遊びに来る少年に、裸の少年少女たちが映っている写真を見せられるシーンがある。海・太陽・灼けた砂は直接物語自体と関わっていないが、その写真のバックグラウンドとなっている。「砂と太陽と海、そして裸の少年や少女たちがうつつっていた。あまりはげしい光や熱気の氾濫のために、空と海は真っ黒な死のようにみえたほどである。少年のひとりや少女の腹のうえに脚をのせてふざけておりべつのひとりや腹ばいになって頸を少女の胸の丘のかけにのせている」（二五三頁）と語られる情景が性的ニュアンスを仄めかしている。また、「パッション」においても海水浴の場面が出てくる。Lが貸別荘で滞在する間、二人はよく海に泳ぎに出る。「ぼくたちはおびただし流木のような人間たちをかきわけながら生ぬるい泥色の海で泳ぎ、それから熱い砂のうえで生殖行為にいたらないかぎりのあらゆる性的遊戯にふけっている裸体の群れを踏みつけて、

別荘に帰りました」(一一九頁)と語られる情景からも、夏・海・太陽という舞台に性的ニユアンスを読み取ることもできる。

『異邦人』における太陽の光に肉欲を膨らませるといふ太陽と性との関連性が夏・海・太陽を舞台とする倉橋の作品群に受け継がれていることが分かる。しかし、『異邦人』において、ムルソーは太陽の光に包まれるマリーに性的欲望を感じる場面が何カ所かあるが、いずれもその場での性行為に及ばなかった。それとは対照的に、倉橋の作品群では、近親相姦あるいはレイプといった場面では太陽が不可欠な存在といっているほど重要な役割を果たしている。換言すれば、太陽を背景とした性行為は倉橋文学においてパターン化されていることが読み取れる。即ち、倉橋はカミュの太陽と性の関連性を残しながらも、太陽を背景とした性交渉という独特の太陽のイメージを作り上げている。

以上のように、『異邦人』と比べてみると、夏・海・太陽を舞台とする作品群において、太陽の役割が変化していることが分かる。死の場面においては、『異邦人』に描かれる多様な変化に富む太陽も、物語の発展に強く関与する大きな役割から、単なる自然描写あるいは登場人物の心理描写を際立たせる役割に止まるようになる。しかしそれと違い、夏・海・太陽を舞台とする作品群に頻繁に登場する近親相姦あるいはレイプといった場面では、太陽が不可欠な存在と言っているほど重要な役割を果たしている。すなわち、倉橋はカミュ的な太陽の要素を取捨選択し、性交渉の場面における太陽の役割だけを残し、それに自分の観念を交えて、倉橋独特の太陽のイメージあるいは太陽の世界を作り上げている。

言い換えれば、倉橋の作品群を発表時代順に見ていくと、カミュ的要素が薄れていき、「太陽」と「海」といったフアクターだけが残るといった過程を辿っている。この点は「わたしはじめて他人のまえに出した小説『パルタイ』は、あきらかにカフカ、カミュ、サルトルの三位一体です。そのころわたしはフランス文学科の学生で、異様な感動をもって小説に読みふけていました。(中略)ところで、わたしにとってすでにカミュは死んで『太陽』と『海』だけが残る、サルトル先生は大きらいになり、いまだにわたしの文学的背骨をなしているのはカフカです。この背骨はよくわたしの身体に合っているとみえます」⁵⁵といった倉橋の言及にも裏打ちされる。

第四節 「太陽と海とやけた砂」を背景とした性行為―神話的な光景

夏・海・太陽を舞台とする作品群において、近親相姦あるいはレイプという表象が頻繁に登場している。しかもそういった場面においていずれも太陽の存在を確認することができるといえる。なぜ罪の場面に太陽を欠かさず登場させているのか、それは倉橋の文学世界を解く鍵と

なると考えられる。倉橋は「太陽と海と灼けた砂」という舞台と性の交わりとの関連性を以下のように述べている。

つまり性の交りは、いまや他者との粘液的な関係であることをやめ、ダンスや鬼ごっこと同じものになるわけです。そこで、太陽と海と灼けた砂を舞台に、見知らぬ少年と少女、男と女が、陰湿な愛の告白や結婚の申込みなしに自分の愉しみのためにだけ交るといふ神話的な光景が見られることでしょう。このとき、人間は人間であることをやめ、神々になります。なぜなら、かれらは異性にたいしてひとしく魅力的で、どの異性にたいする欲望においても無差別で、時と場所を問わず、自分と相手を愉しませる無限の能力をもっているだろうからです。²⁶

倉橋は性行為を生活や道徳や生殖や愛から引き離し、「見知らぬ少年と少女、男と女が、陰湿な愛の告白や結婚の申込みなしに自分の愉しみのためにだけ交わる」というオルギアの世界と重ね合わせる。夏・海・太陽を舞台とする倉橋の作品は一九六〇年代に集中するが、夏・海・太陽といったキーワードは五〇年代を風靡した太陽族を想起させる。太陽族は退屈で窮屈な既成の価値や倫理にのびやかに反逆し、湘南海岸に集う若き戦後世代の肉体と性を真正面から描いた石原慎太郎の小説『太陽の季節』に由来し、この作品は一九五五年『文学界』七月号に掲載され、翌年の五六年に第三回芥川賞を受賞し、同年映画化されたことよって一気に社会現象化していった。

『太陽の季節』と倉橋の作品群の間には、あからさまな共通項がいくつか含まれている。

①太陽の降り注ぐ夏の海を舞台とする。②竜哉は英子を五千円で兄に売ったことから明らかのように、竜哉をはじめとする男性達は女を玩具と見なし、男女関係を遊戯として捉えている。避暑地を訪れる津川一行が、女の子をとつかえて関係を持つのはオルギアの世界を思わせる。③「人々が彼等を非難する土台となす大人たちのモラルこそ、実は彼等が激しく嫌悪し、無意識に壊そうしているものなのだ」と地の文で述べられるように、主人公たちは既成のモラルや倫理などを強く嫌悪し、反抗する。しかし、素直に相手を愛することができなかった英子は後に、海上のヨットの上で、初めて、奪うのではなく、相手に与えることができたと信じた。その海上のヨットの上での性交渉は夜に行われた。竜哉たちが女子たちとの性交渉の場面はいずれも「太陽と海と焼けた砂を背景とした性行為」という倉橋の思い描く世界とは程遠いものである。

「太陽が照らす海辺で性交渉する」という場面は、近代の西洋の芸術家たちの絵画作品の中で表現されているギリシヤ神話の画面と、驚くべきほど類似している。例えば、テセウスとの恋に破れ悲嘆するアリアドネを慰めるバックスを描く、ジャン＝フランソワ・ド・トロワ作の《バックスとアリアドネ》⁵⁵がその顕著な一例である。



上記にあげた図では、裸体表現が官能的に溢れており、観る者を愛の甘美な世界へと誘う。そして、左奥に快晴下に穏やかな海が続いており、また黄色くかかっている雲の様子から、おそらく夕暮れ前の時間帯と推測できる。そういった点はいずれも「太陽が照らす海辺で性交渉する」という神話的な光景と合致している。また、図の真ん中には背中に翼のある少年の姿を確認することができる。エロス（ローマ神話の Cupid キューピッドに相当する）の象徴である弓矢および松明を持っている所から見れば、それはおそらくアフロディーテの息子、愛の神のエロスであろう。エロスは小さいはずらっ子でおもちゃの弓と矢を持っている姿で描かれることが多いが、図1のように、ほっそりとした翼のある、弓矢をもった青年と描かれる場合もある。ド・トロワが描いた官能的な裸体や天空を舞うエロスの軽やかな運動性などは、いずれも愛の神エロスの名前に語源を探ることができるエロティシズムを連想させる。

エロティシズムは官能愛または人間の性衝動（リビドー）のことだと考えられる。西洋哲学やキリスト教は愛をエロス、フィーリア、アガペーの三種類に区別している。この三者のうちエロスはもっとも自己中心的であると考えられている。性衝動に駆られるまま行動するという点は「かれらは異性にたいしてひとしく魅力的で、どの異性にたいする欲望におい

でも無差別で、時と場所を問わず、自分と相手を愉しませる無限の能力をもっているだろうからです」という倉橋の叙述と合致している。夏・海・太陽を舞台とする倉橋文学にはこういうオルギアの世界以外に、ギリシャ神話と似通っているところもある。たとえば、「暗い旅」におけるレイプの場面は受難劇として描かれている。

脚をひらいてその字の形をとることを命じたのはあの少年の変声期の声だった、あなたはもつとも無防備な姿をとらされていた、からだをおおうためのどんな造作もはぎとられて。それは眼による強姦だった、あなたのひらかれた脚のあいだに集まる少年たちの眼、あなたを刺しとおす灼けた串、熱い恥辱の痛み……音のない、長い時間のうち、少年たちは狂ったように笑い声をあげ、執拗な輪唱ではやしたてた、脚を踏み鳴らして、あなたのかすかな発毛について卑猥なはやしことばをわめきながら（「暗い旅」九九頁）

それに対して、アリストパネス⁵を代表とするアッティカ古喜劇作家の作品には、顕著な特徴の一つとして、排泄と性行為に関する冗談や弄言などが頻出することが共通していることが挙げられる。アリストパネスの喜劇『平和』には「あなた」の「受難劇」とすこぶる似通っているシーンがある。喜劇『平和』の八八六行では、この劇の主人公のトリュガイオスが、彼が巨大な糞食い黄金虫に乗り、天に昇って、連れ帰ってきた二人の女神たちの一人である、祭礼の女神テオリアに向かって、「さあ、まずその衣装をすつぽり地面に落とせ」と言って、観客の面前で、彼女に素裸にならせる。その上で彼は、丸裸になった女神を、客席の最前列で観劇していたと思われる、五十人の当番評議員ブリュタネイスたちの前に連れて行き、女神を評議会ブルーレーに、存分に賞味して楽しむように、引き渡すと言って、八七行以下で、次のような台詞を述べるのである。

トリュガイオス いやあ、いけない、あいつあ飛びかかって、この女の汁をなめちゃうよ。

「女に」さあ、まずその衣装をすつぽり地面に落とせ。

「女は着物を脱いで裸になる。トリュガイオスは彼女を連れて議員の席に近づく」

ブルーレーよ、ブリュタネイスよ、祭りのにぎわいの姫をごろうじあれ。いやさ、わしが差し上げることの数々をお考えあれ。すぐさまこの女の両の脚を空高く持ち上げて、お祭りができるといふものだ。この素晴らしい台所を見ていただきたい。なるほど煙で黒びかりしているわけだ、ここにや戦前には議会の鍋台がありましたからな。それからこの女を持つていれば、すぐさま明日にも全く素晴らしい競技ができます。また身体にちよつと

油を塗って、パンクラティオン競技を元気に、打ったり、掘ったり、拳固とともに、また一物で。その後には三日目には競馬をやる、そこじや駿馬と駿馬が重なり合って、車は車の上にはひっくり返り、フウフウ、ハアハア、ところが一方では御者どもはコーナーで車から落ちて、一物をひんむかれてリュタニスさんの受取り方の素早いこと。だがちよつと待った、何か申請を無料でやる必要がある日には、あんたは袖の下に手をつっこんで、休日だと言うことだろうぜ。⁸⁸

『平和』では、主人公トリュガイオスは平和の女神エイレネの侍女だった女神二人を、天上に押し込められていた洞窟の中から、苦勞して掘り出し引き出した上で地上につれて来る。片方を自身の花嫁にする一方、他方を評議会の五百人の議員たちの前で丸裸にし、恥を搔かせる。トリュガイオスは「台所」という言葉によって意味したのは女神の陰部のあたりを指し示す。丸裸にされ、無防備な姿勢を取らされる点、狂ったような笑い声、観客席に卑劣と言うほかない哄笑、女神の「台所」を鑑賞する「五十人の当番評議員」の眼はいずれも「あなた」の「受難劇」の場面と合致している。女神の観点に立つて見れば、恥辱が加えられたため、この喜劇はまさに女神の受難劇そのものとなる。

倉橋はエッセイにおいて、「『イーリアス』に魅せられたなら、次には『オデュッセイア』が読みたくなり、それらの背後にひろがるギリシヤ神話や英雄伝説へ、また古典期の悲劇からプラトンへと、ギリシヤ古典をめぐる旅がつづくことでしょう。そしてわたしたちがそこで出会うのは、まさしく第一級のものにかぎられています」⁸⁹とギリシヤ神話の世界に魅せられることを明かしている。また、ギリシヤ悲劇を「神聖にして不可触のもの」として、「現代の小説家や劇作家がそれを扱おうとすれば、それに対してひとつの解釈を示す自由と、そのミュトス（筋）を枠組として借りる自由だけが残されている」⁹⁰と高く評価したうえで、ギリシヤ悲劇を素材に再アレンジした「反悲劇」をも手掛けている。そのため、アリストパネスの古喜劇を読んだ可能性も高いと考えられる。

また、ギリシヤ神話関連の絵画には、「サビニの女たちの略奪」（ピエトロ・ダ・コルトーナ、ローマ・カピトリノ美術館蔵、一六二九年）を始め、「くの略奪」というタイトルのものが数多くある。たとえば、「サビニの女たちの略奪」や「レウキッポスの娘たちの略奪」（ビーテル・バウル・ルーベンス、アルテ・ピナコテーク蔵、一六一八〜一九年頃）に示されるように、女性の略奪は絵画作品において、エロティックな表現が多く描かれており、性的ニュアンスが含まれ、強姦を意味する場合が多い。言い換えれば、ギリシヤ神話の中でレイプが多く登場していることが明らかになる。「暗い旅」における「目による強姦」とい

う場面とギリシャ喜劇『平和』における女神の受難のシーンが酷似していること、そして文学作品にふんだんに使っているレイプの要素がギリシャ・ローマ神話と似通っていることが明らかになる。そういう共通点と、倉橋がギリシャ・ローマ神話に興味を抱いていたことを考え合わせると、倉橋は人物設定を考えるとき、ギリシャ喜劇の女神の受難劇の要素やギリシャ神話におけるレイプの要素を意図的に取り入れた可能性が高いと言えるだろう。

第五節 太陽と反世界と女性性

前にも述べたが、攻撃的な太陽から逃げようとする『異邦人』とは対照的に、夏・海・太陽を舞台とする作品群の主人公たちは太陽を求める傾向が見られる。たとえば、「醜魔たち」の「ぼく」が追い求める太陽が照らす《無》の世界では、合理性、常識、性行為が愛情と結びつくと強調される現実世界と反対に、不条理、愛情を排除した性欲と性行為が主張される。そして、近親相姦、レイプ、サディズム・マゾヒズムの場面には必ずと言っていいほど、太陽が登場している点を考慮すると、太陽が照らす《無》の世界にはおびただしい死や近親相姦あるいはサディズム・マゾヒズムなどの罪の表象が相応しいことが読み取れる。そういった発想は反世界という倉橋独特の文学世界と切り離しても離せない関係にあると考えられる。小鹿糸は「倉橋由美子論 反世界への降下」という論文において、〈反世界〉について次のように説明している。

〈反世界〉とは、倉橋の現実嫌悪と「世界内存在」としての違和とにイメージナルなものとがはたらいて創り出したロマネスクな観念である。それは「無の、創造的な王国」あるいは「凹型の世界」と呼ぶこともできる。世界すなわち現実此岸に所属する存在を正の存在とすれば、〈反世界〉に所属する存在を負の存在である。負の存在とは世界に自分を関係させるのではなく、自分自身に関係させる存在であり、その意味でこれは「純粹実存」の世界である。世界に所属できないものは、所属できないという限りで世界に対して後ろめたさに似た違和を体験する。その存在の惧れが〈反世界〉の構築へ誘うのだ。²⁸

小鹿は〈反世界〉を「無の、創造的な王国」あるいは「凹型の世界」とし、そこに所属する存在を負の存在とするうえで、倉橋を〈反世界〉の構築に向かわせたのが倉橋自身の現実嫌悪と「世界内存在」としての違和であると指摘している。ここで「ロマネスク」という言葉に注目したい。ロマネスク(英 romanesque)は文芸用語としては「ロマン(仏 roman)」から派生した言葉で、奔放な想像力によって現実の論理・事情の枠を飛び越えた幻想的な性質

を指すことがある。倉橋由美子は反リアリズムの文学世界を築き、文学作品の中で近親相姦など道徳的に許されない話を多く作り上げた。現実世界のなかで通用する掟や道徳に従って生きているわれわれから見れば、ナンセンスで理解しがたい話であるが、倉橋は想像力を大いに発揮し、あえて読者の反感を喚起するかもしれない〈反世界〉を描こうとしている。

倉橋は「わたしの『第三の性』」というエッセイにおいて、「女は、ボーヴォワールが指摘しているように、〈他者〉という範疇に属する。男の世界からのまなざしと加工によって石膏のようにかためられ形づくられた他者、男によってこうであるときめられた客体としての性、それが女である」²⁸と言及し、男性によって作られた世界では、男性は常に中心的な位置を占めるのに対して、女性はその世界から逸脱した存在で客体であることを明らかにしている。つまり、女は男という主体を客体化するという存在論的な構造を持たず、一方的に客体化される。現実世界に所属する存在を正の存在、〈反世界〉に所属する存在を負の存在とするならば、現実世界が男の世界であるため、女は現実世界に所属せず、〈反世界〉に所属する存在、すなわち負の存在となる。言い換えれば、現実世界＝男（正の存在）の世界、〈反世界〉＝女（負の存在）の世界という構図になる。

「醜魔たち」において、黒んぼQの存在が物語を展開するには重要な役割を果たしている。Qは性別不明であるが、「薔薇色のナイフ」「ぼくにつかまれ、みられ、愛撫されて軟らかく融けてしまうための肉の剣」「ぼくがこの黒い丸木舟をあやつるための操縦桿」といった表現から、男であることが明白である。しかし、「毛のない獣で、猥褻なほどのびちぢみするゴム人形で、薄い粘土かチョコレート²⁹の皮膚に包まれた明るい肉だった。つまり黒んぼのQは、女たちが（もちろんMをふくめて）白い皮膚で包んでいるあの不気味なくらやみを外側にもっているのだ」（三七頁）と語られるように、生物的に男性の性器を持っているとしても、Qは「ぼく」にとって女性を裏返しにした存在即ち「にせの女」である。

そしてQは「女性的な声」の持ち主でもあるだけでなく、女性の担うはずのセクシュアリティの客体として位置づけられる。「Qが教えてくれた、くらやみの表皮を切り裂いて果肉のなかに熱い硫黄のような意識をそそぎこむあの儀式は。ぼくは《愛》のない愛撫をつづけながら完全に明晰だった。なぜならばぼくは攻撃するぼくとぼくの対象と、両方を同時にみることができたのだから。Qの苦痛の叫びがぼくの意識の明晰を保証していた……」（三八頁）。同性間で行うサディズム・マゾヒズム行為が行われる。『レイプ・踏みにじられた意思』では、同性間サディズム・マゾヒズムについての叙述がある。

同性間サディズム・マゾヒズムには、それ独自の、男性ならではの力学があるのか。それとも単に、新しさを装った性的逸脱にすぎないのだろうか。刑務所の隠語から知識人の戯れ言まで、世界に通用するサディズム・マゾヒズムにまつわる言葉や、判で押したように変わらないその行為には、その本質が無視しがたいほどに露呈している。サルトルはジュネに代わって「臀部は男性がもつ隠れた女らしさ、服従の象徴である」と説明し、さらに二人とも服従とはペニスを受け入れる側に立つことだと認めている。男対男の関係においては、フェラチオも服従行為であり、コックサッカー（フェラチオをする人）は「ヒヨコ」と同義である。サディズム・マゾヒズムが常に男と女に関連づけて定義されてきたことは、とうてい偶然の結果とはいいたくない。それを定義したのはサディズムの中に男らしさの歪んだ解釈を見出す人びとであり、マゾヒズムの中に虐待と苦痛―これは「女性」と同義と見なされる―を見出す者が、それを受け入れてきたのだ。このことだけでも、サディズム・マゾヒズムが女性解放運動と真つ向から対立する反動的テーマであることは明らかである。³⁴

「臀部は男性がもつ隠れた女らしさ、服従の象徴である」とサルトルが説明しているように、黒んぼのQは「ぼく」にとって、ペニスを受け入れる側、即ち服従する側に属する。サディズム・マゾヒズムが男と女に関連付けて定義されるように、服従する方は女性的あるいは女らしさとして見なされる。「ぼく」の目から見れば、マゾヒスティックな男性であることが女性原理と同一視されるため、黒んぼのQは「にせの女」として映る。倉橋はエッセーにおいて、へ女に生まれるのではなく、女になるのだというボーヴォワールの言葉を根拠づけようとして、ジュネについて以下のように言及している。

身体によって他者と関係しながら世界のなかに存在する人間の存在論的構造として性欲とサディズム、あるいは愛やマゾヒズムがあり、このことが異なる性器をもつ人間を男性的または女性的にする。フロイトがあきらかにしたように、人間がその生誕から死に至るまで性的であることの意味は、生理的条件から説明しえない。たとえば男色のような性的関係は、《雄―雌》という生物学的条件をはなれて、性の存在論的構造だけをグロテスクな純粹さでしめしている。男娼とはみずからを他者に変身させた男、それゆえ世界のまなざしを受け、悪をひきうけた男だ。作家ジャン・ジュネが受け身の男色家でありかつ泥棒であったことは偶然ではない。男娼、犯罪人、アメリカの黒人やインドの不可触賤民などの存在は、女の性と類似の存在論的構造をしめすものだ。結局のところ、生物学的条

件は偶然的な事実であってそれはそのままみとめざるをえないが、そのことから《女であること》を因果的に説明しつくすわけにはいかない。女の宿命は歴史の結果である。³⁵

男女関係において、男性の主体性と女性の客体性は生物学的条件即ち異なる性器によって決められる。一方通行の主体―客体関係は性関係にも受け継がれ、女性は受身でなければならぬ。しかし、受け身の男色家であるジャン・ジュネはそういった存在論的構造を打破し、「自らを他者に変身させた男、それゆえ世界のまなざしを受け、悪をひきうけた男」となり、女の性と類似した存在論的構造を示す。それと同じく、「男娼、犯罪人、アメリカの黒人やインドの不可触賤民などの存在」もみずから他者を引き受けた女性的な存在と見なされる。倉橋はこの例をもって、「人は女に生まれるのではなく、女になるのだ」とボーヴオワールが宣言しているように、女性の「第二の性」は生物学的条件によって決定されたものではなく、歴史の結果であることを証明しようとしている。

近親相姦やレイプの場面においても同じような理論関係が働いていると思われる。一九七五年、フェミニストのスーザン・ブラウンミラー³⁶は、著書『レイプ・踏みにじられた意思』で次のような結論に達している。

人類最初の強姦が、最初の被害者たる女性の拒絶に端を発する思いがけない戦いであったとするなら、二回目の強姦が計画的なものだったことは明らかである。それどころか、男たちのもっとも初期の結束のひとつの形が、無法者の男たちが一人の女性を襲うというギャングレイプ（輪姦）だったことはまちがいない。こうして強姦が成功すると、それは男の特権となったばかりか、男が女を支配する際の基本的な武器となり、男にとっては征服欲の、女にとっては恐怖の媒介手段となった。肉体的抵抗にもかかわらず女性の体に無理やり侵入することは、男にとって女を征服した誇るべきあかしとなり、自らの力の優越を示す試金石、男性性の勝利の凱歌となったのだ。³⁷

レイプは男の意思と女の恐怖をつなぐ主要な媒体であり、女に対する根本的な力の武器となる。男は無理矢理に女に迫ることは、女の存在そのものに対する勝利と征服をもたらす手段となる。こうしてブラウンミラーはレイプをセックスの手段とせず、権力と支配の道具にすぎないと解釈している。後にこの解釈はレイプに関する定説と見なされるにいたる。また、L・イリガライ³⁸は『ひとつではない女の性』において、精神分析やフェミニズムの視点からレイプについて以下のように述べている。

これは次の問いにつながる。なぜ能動的／受動的という対立が、女性のセクシュアリティに関する論争のなかで、こうも強調されつづけるのか。この対立は、前性器期のひとつである肛門期の特徴だと定義されるにもかかわらず、その後も—心理的色づけも含めた—男性的—女性的という差異を標示しつづけて、生殖における男女各々の役割をも決定してしまっているのである。どのような関係が、肛門サディズム期欲動—男性には許され、女性には禁止される（女性の中で抑圧される）欲動—に対するこの受動性を養いつづけるのか。以来、男性は、子供（生産物）、女性（再生産機械）、性器（再生産の動作主）の唯一の所有者であることを確実にしていく。強姦（できれば受胎させる能力を持つのがいい）は、こうして性関係の模範となる。それに、幾人かの（女性も含めた）精神分析家たちは、強姦を女性の快楽の極みだと述べたではないか。⁸⁶

生殖における男女それぞれの役割が男女の生物学的差異によって決定されるように、性関係における男・女の役割も能動的・受動的に分けられている。子供、女性、性器は「生産物」「再生産機械」「再生産動作主」として見なされ、男性が女性への所有もそういった具体的な物への所有によって置き換えられる。そうしてレイプとは男性が女性に対する所有を確かめる手段として用いられるとイリガライは説明している。では、「暗い旅」や「悪い夏」に出てくる集団レイプはどのように考えればいいのか。

ブラウンミラーは前掲書において、コロンビア大学人類学部のロバート・F・マーフィーの集団レイプについての研究結果を紹介している。モンドウールターの集落では、「公然と複数の男性と関係をもったり、性的関係においてイニシアチブを取ったりする女性は、男性にのみふさわしいとされる行為に及んだと見なされ、男性の領域を侵しその役割を脅かすとされる。したがって、その行為は共同体全体の問題すなわち公的な違法行為と見なされ、その女性を罰することは集落の男性全員の当然の義務となるのである」と述べており、集団レイプは女性に課せられた役割を逸脱した女性に対して行われるものであると認識している。

また、集落の子供たちが無理矢理入れられた宣教師学校を脱走する例を挙げ、男の子は「皆の同情を集める」のに対して、女の子の場合、「最初に通るかかった集落の男全員に輪姦される」といった截然とした差があることから、「逃亡したということは、自ら男性の保護の外に飛び出したことを意味し、さらには男性の権威—それは宣教師の権威であり、部族の間でもその目的が広く受け入れられているわけではないにもかかわらず—を侮辱したと

見なされる」¹⁶⁾のであると説明している。すなわち集団レイプは性の逸脱行為の制裁以外に、男性権威を侮辱する制裁としても行われていることを明かしている。

こうして見られるように、倉橋が近親相姦やサディズム・マゾヒズムを登場させるのは、主体・客体化される男女関係に揺さぶりをかけようとするためであることが分かる。しかし男女関係の再構築を試みる一方、女性に対する男性の所有が確認されるレイプ行為や性役割を逸脱した女性への制裁と見なされる集団レイプが多く描写されている。性役割を再構築して、女性を男性と同じ地位に仕上げようと夢見る倉橋の矛盾が見られる。言い換えれば、当時の倉橋は新しい男女関係を構築することの限界を見ていたのかもしれない。この点は「醜魔たち」の黒んぼQの最後からも証明される。

「球状サボテンのような精神をもった知慧の悪魔」と自称する「ぼく」は、堅固な世界と日常生活の進行に対する嫌悪から、貝のなかに閉じ込められ、書物を読みふけることにはけ口を向けているが、しかし、読書は「サボテンのなかへ空虚をひろげ、くらやみを肥やしたにすぎない」。それにもかかわらず、読書が続けることによってもたらされた結果として、くらやみがはてしなく肥えてきて、「ぼく自身の重量で身動きできないほどになっていた」(二八頁)。そして、「床のうえに動くものけはいがあつて、光の傘を近づけると、自分の髪の毛のなかでころげまわるMの顔を裸の腕とが十字架の形に浮かびあがつたが、驚くべきことにその裸身のうえには濃密な、ほとんど不定形のくらやみがのしかかっているのだった。それは黒んぼのQというより、M自身の股のあいだからできた暗黒の塊のようにみえた」(三八頁)と語られるMが強姦される場面からも読み取れるように、黒んぼのQは現実味のなく、くらやみでできている存在である。

また、岬の向こう側の世界に憧れを感じるが、夢のなかで繰り返すだけで、実行に移すことがなかった「ぼく」にとって、失敗に終わったが、嵐の最中にボートを漕いで岬を回ろうとしたQに親近感を覚えないはずがない。この点は「コイツハバカダ、とぼくは感動のあまりいった」(三六頁)といった語句からも読み取れる。また、Qが「ぼく」の所にやってくる場面は、「すべては夢のつづきに似ていたが、これは夢よりもずっと稀薄な現実だった」(三七頁)と述べられており、Qは世界の裏の世界―「ぼく」の憧れる岬の世界の住人であることが仄めかされ、その存在の神秘性がより一層際立っている。

黒んぼは裏の世界への逃走に失敗した人と位置づけられるが、現実世界の住人というより、裏の世界の住人である可能性が考えられる。たとえば、「ぼく」の所にやってきた時、黒んぼは「アナタハオレノコトヲサツニサスツモリカネ」と「女性的な声」で聞いて、そのつもりはないという「ぼく」の答えに、「かくべつ安堵の色もみせず、密告するかしないは

ぼくの自由だし、どちらにしても大して変わりはないのだといった」。その理由を聞かれても、「大して変りはないからだ」（二七頁）と繰り返す。

また、「ぼく」は《愛》に脅かされることなしに、女性の内側に潜むくらやみに吸い込まれるという危険をおかすことなしに、女性を相手に認識することができない。《愛》や内側に潜むくらやみによってもたらされる呪縛から逃れるために、「ぼく」は黒んぼのQ（にせの女）を作り出したと考えられる。「にせの女」で裏の世界の生活を楽しんでいる「ぼく」にとって、Mをはじめとする現実世界での生活はまるで無意味となってくる。そういった事態を回避させ、「ぼく」を現実世界につなぎ止めるために、Qを消去することが取り残される唯一の選択肢となる。「にせの女」としてのQはMを積極的に犯すとは考えられにくいから、MがQを唆したのか、もしくはQを誘惑したかのどちらかである。「にせの女」であっても、男性器を持っている以上、セクシュアリティの客体に止まるはずがない。すなわち裏の世界が成立しないことを「ぼく」に突きつけることによって、「ぼく」に裏の世界への期待を切斷し、《愛》という釣針で現実社会へと囲い込もうとする。そして「ぼくは頸にぶらさがってゼリーのようになぶられているMをやがて《妻》ということばで呼ぶほかないことをその夜さとしたのである」（三九頁）という語句はMに軍配が上がったことを示している。

また、「悪い夏」からも倉橋の矛盾を確認することができる。姿を消した青年は行方不明となるが、「かれはこの世界の外へ脱走したのではなく、Lのなかへと脱走したのかもしれない」（二七一頁）という語句から、倉橋の妖女に関する叙述を連想させる。倉橋の認識から見れば、妖女即ち「生まれたときから女の胎をもたず、そのかわり体内に、ことばを分泌する虚無のくらやみをかかえた女」¹⁵こそ、小説を書く女の正体である。そして、倉橋は自分が二十代の頃「《少女》と《青年》との半陰陽的具有者として小説などを書き、《若い妖女》というようなものを演じ」てきたと告白している。それに続く「この《青年》もわたしのなかの他人です。わたしは小説を書きながらこのわたしのなかの他人を拡大してきたといえます」¹⁶という叙述から、「ことばを分泌する虚無のくらやみ」と「わたしのなかの他人」を置き換えても差し支えないと思われる。男性化願望を密かに抱えている倉橋にとって、「わたしのなかの他人」即ち「かれ」の存在は大きい。

Mに若い頃の自分を見いだすLは「Mの作品のどのページをひらいても、そこにあるのは魂の自由な運動としての線であり、渦巻きながら進行する「生」そのものとしての文体なのだ」と驚きながら、「これははたしてMの書いたものだろうか？ Mの秘密の恋人である真の「作家」がMの体内にひそんでいてMの手を操って書かせているのではないか？」（一七八頁）という想像に喜びを感じる。というのは、Mの文学世界の裏に、自分のなかのかれ（あ

るいは男性的な部分)が常に存在していることが確認できたため、Mが自分と同じく妖女であることにある種の安心感と親近感を見出したのかも知れない。

Lが創作活動にスランプを感じ、低迷期に陥ることから創作活動担当のかれの衰退を垣間見ることができる。そして、「朦朧状態のなかで、Lは自分の存在が熱気に融けて海面へ流れていくような感覚を確認した。これは子宮の出口から暗黒そのものに似た血がとめどなく流れでているのだろうとLは辛うじて考えたが、もう自分の手をそこへ移動させることもできなかつた」(一八二頁)という語句から、生理の到来と解釈されやすいが、しかし、「ことを分泌するくらやみ」を考慮すると、「子宮の出口から暗黒そのものに似た血」は生理の到来というより、自分のなかのかれは血を流して消えていくことが暗示されている。

「Lの意識は地上をはなれてあらゆるものをみおろすことのできる高さに浮遊していた。たとえば砂のうえに奇妙な象形文字に似た形をして自分の裸体が横たわっていることもLには鮮明にみえていた。あれは切り裂かれたところから血を流して絶命している自分の死体なのだとLは考える」と描かれるように、強姦された後、Lは空中に浮遊している意識と地上に残されるLの「死体」と分かれる。すなわち意識と身体の分離は強姦されることよって果たされる。Lは女性性から脱出することを狙い、肉体を極限までに縮小すること努めたが、「上唇がめくれ、快樂のために収縮したかのような、小さな象牙色の顔があらわれる」と描かれる快樂に満ちた顔は、その努力が実を結ばなかつた現実を突きつけられる。そうして、地上に残されるLの「死体」はL自身で、空中に浮遊している意識はLの中に潜んでいる「かれ」である可能性が高い。

倉橋の夏・海・太陽を舞台とする作品群は真夏の海岸、砂と海と太陽、その中で起こる無意味の殺人、そして不条理の概念といった点において、カミュの『異邦人』と共通している。しかし、倉橋はカミュ的な太陽の要素を取捨選択し、性交渉の場面における太陽の役割だけを残し、それに自分の観念を交えて、「太陽と海と灼けた砂」に性行為という独特の世界を作り上げている。ギリシャ神話を主題とする絵画作品を拾っていけば、「見知らぬ少年と少女、男と女が、陰湿な愛の告白や結婚の申込みなしに自分の楽しみのためにだけ交わる」という神話的な光景はギリシャ神話から影響を受けた可能性が高いと考えられる。そして、近親相姦、レイプやサディズム・マゾヒズムといった罪の場面に必ず太陽が照らすことを考慮すると、太陽は《無》の世界すなわち「反世界」のシンボルとなっていることが分かる。倉橋がそういった「反世界」を作りあげたのは既成道徳ないし既成世界(男性優位社会)へ異議を唱えたかったためと思われるが、女性に対する男性の所有が確認されるレイプ行為、性役割を逸脱した女性への制裁と見なされる集団レイプの描写や、サディズム・マゾヒズム関

係の破たんといったことから矛盾が見られ、当時の倉橋は男女関係を再構築することの限界を見ていたのかもしれないと推測される。

倉橋由美子「青春の始まりと終わり」（初出「青春の始まりと終りーカミュ『異邦人』とカフカ『審判』」『高校生新書47 私の人生を決めた一冊の本』三一書房、一九六六年四月）『わたしのなかのかれへ』講談社、一九七〇年三月、二五九頁

倉橋由美子『偏愛文学館』講談社、二〇〇五年七月、九六頁

カミュの『異邦人』は日本でもセンセーショナルを言っているほどの反響を呼び起こした。とりわけ、殺人を「太陽のせいだ」としたムルソーの言動をめぐる、「異邦人」論争が勃発したことがよく知られている。詳細は省くが、窪田訳が『新潮』一九五一年六月号に掲載されると、広津和郎が『東京新聞』に六月十二日から三日間、「カミュの異邦人」を掲載し、それに対して中村光夫が同じ『東京新聞』に七月二十一日から三日間、「廣津氏の「異邦人」論について」を掲載した。詳細は省くが、中村はムルソーを「正直だ」と擁護する立場を取った。（臼井吉美『近代文学論争』下、筑摩書房、昭和四五年十一月、二一三〜二三四頁参照）。倉橋は数年後に、中村の授業でこの問題作に詳しく接することになるのである。

⁹倉橋由美子「異邦人の読んだ『異邦人』」（初出『新潮世界文学』四八巻、月報（三）、新潮社、一九六八年四月）『わたしのなかのかれへ』三二〇頁

¹⁰前掲書、倉橋由美子「異邦人の読んだ『異邦人』」三二〇頁

¹¹前掲書、倉橋由美子『偏愛文学館』九七頁

¹²『幸福の死』は『異邦人』の初期草稿で、一九三六年から一九三八年にかけて執筆された。大筋は完成していたが放棄され、カミュの死後に刊行された。

¹³清水徹「あとがき」、『シーシュポスの神話』新潮社、一九六九年七月、二〇三頁

¹⁴カミュ「裏と表」『カミュ全集1 アストゥリアスの反乱・裏と表・結婚』新潮社、一九七二年九月、一四六頁

¹⁵ハマニユエル・ロブレス「アルベール・カミュー太陽と悲惨の刻印」窪田般彌訳『海』二巻七号、一九七〇年七月、一二五頁

¹⁶原文は次の通り。 (...) parce que j'étais occupé à éprouver que le soleil me faisait du bien.(...) Au large, nous avons fait la planche et sur mon visage tourné vers le ciel le soleil écartait les derniers voiles d'eau qui me coulaient dans la bouche.(...) Les deux chaleurs de son corps et du soleil m'ont un peu endormi.(Albert Camus, *Oeuvres complètes d'Albert Camus*, Paris: Aux éditions du Club de l'Honnête Homme, 1983, pp.66~67.)

引用した断片を含む浜辺の場面の一節の原文は次の通り。C'était le même soleil que le

jour où j'avais enterré maman et, comme alors, le front surtout me faisait mal et toutes ses veines battaient ensemble sous la peau. A cause de cette brûlure que je ne pouvais plus supporter, j'ai fait un mouvement en avant. Je savais que c'était stupide, que je ne me débarrasserais pas du soleil en me déplaçant d'un pas. Mais j'ai fait un pas, un seul pas en avant. Et cette fois, sans se soulever, l'Arabe a tiré son couteau qu'il m'a présenté dans le soleil. La lumière a giclé sur l'acier et c'était comme une longue lame éincelante qui m'atteignait au front. Au même instant, la sueur amassée dans mes sourcils a coulé d'un coup sur les paupières et les a recouvertes d'un voile tiède et épais. Mes yeux étaient aveuglés derrière ce rideau de larmes et de sel. Je ne sentais plus que les cymbales du soleil sur mon front et, indistinctement, le glaive éclatant jailli du couteau toujours en face de moi. Cette épée brûlante rongait mes cils et fouillait mes yeux douloureux. C'est alors que tout a vacillé. La mer a charrié un souffle épais et ardent. Il m'a semble que le ciel s'ouvrait sur toute son étendue pour laisser pleuvoir du feu. (Albert Camus, *Oeuvres complètes d'Albert Camus* t.1, Paris: Aux éditions du Club de l'Honnête Homme, 1983, pp. 72~73.)

¹⁸ アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎ほか訳、大修館書店、二〇〇八年九月、六一三頁

¹⁹ 「わたしの小説作法」において、「わたしがこれまでに書いた、また書くようしてきた小説は大きくわけて二つのタイプになるようです。ひとつは幻の城をつくって世界の意味に形をあたえるもの、いまひとつは「わたし」のなかを掘りぬいていくもの。第一のタイプでは、しばしばKやLという記号であらわされる人物を登場させます(それでわたしはこれをK—L型の小説と名づけています)。かれらは独立変数であって、わたしの定めた仮説的状況のなかで動きまわり、わたしはかれらの行動を観察し記述します」(『わたしのなかのこれへ』一九三頁)とある。

²⁰ 倉橋由美子「作品ノート」『倉橋由美子全作品4 妖女のように・蠍たち』新潮社、一九七六年一月、二六三頁

²¹ アルベール・カミュ『カミュ全集1 アストウリアスの反乱・裏と表・結婚』佐藤朔、高島正明訳、新潮社、一九七二年九月、二〇一頁

²² アルベール・カミュの母方の祖母の旧姓はカタリナ・マリア・カルドナ。祖父はエステベ・シントス。どちらもスペイン系で、シントスはフランス語読みだとサンテスとなる。

²³ ヴィリジル・タナズ『ガリマール新評伝シリーズ世界の傑物6 カミュ』神田順子、大

西比佐代訳、詳伝社、二〇一〇年二月、四一三〜四一四頁

³²前掲書、アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』六一三頁

³³倉橋由美子「小説の迷路と否定性」(初出「現代文学の構想 吉本隆明著「言語にとって美はなにか」にふれて 小説の迷路と否定性」『日本読売新聞』六月六日〜二十七日、一九六六年六月) 『わたしのなかのかれへ』二九〇〜二九一頁

³⁴倉橋由美子「ある破壊的な夢想」(初出『婦人公論』四人巻二号、婦人公論社、一九六三年二月) 『わたしのなかのかれへ』一〇〇頁

³⁵ジャン＝フランソワ・ド・トロワ「バックスとアリアドネ」一七一七年頃 ベルリン美術館蔵。図は『ベルリン美術館の絵画』(コリン・アイスラー、高階秀爾監訳、中央公論社、二〇〇〇年三月、四一八頁) 所収のものによる。

³⁶アリストパネス(前四四五〜前三八五年)ギリシャ最大の喜劇作者。アテナイに生まれ、前四二四年頃「騎士」によって劇壇にデビューした。生涯の作品数は四四篇といわれるが、現存するのは一篇のみであり、その作品は悪口雑言や地口もじりなど猥褻なまでに自由奔放な言辞の中に、痛烈な政治批判や風刺を加えるという、正に喜劇の王とよぶにふさわしい作風である。「平和」は前四二一年の作品である。

³⁷アリストパネス『ギリシャ喜劇I アリストパネス』(上) 高津春繁ほか訳、ちくま文庫、一九八六年七月、四八三頁

³⁸倉橋由美子「ホメーロスヘイリアス」(初出『The highschool life』一六巻、アド・マーカー・ケイニング・センター、一九六八年九月) 『わたしのなかのかれへ』三二五頁

³⁹倉橋由美子「ギリシヤ悲劇とパゾリーニの「アポロンの地獄」」(初出「青年の自己発見は悲劇か ギリシヤ悲劇とパゾリーニの「アポロンの地獄」」『映画芸術』一六巻一三号、映画芸術社、一九六八年二月) 『わたしのなかのかれへ』三三八頁

⁴⁰小鹿糸「倉橋由美子論 反世界への降下」『日本文学誌要』二九号、一九八三年一月、七二頁

⁴¹倉橋由美子「わたしの「第三の性」」(初出「私の「第三の性」」『中央公論』七五巻八号、中央公論社、一九六〇年八月) 『わたしのなかのかれへ』講談社、一九七〇年三月、二六頁

⁴²S・ブラウンミラー『レイプ・踏みにじられた意思』幾島幸子訳、勁草書房、二〇〇〇年三月、一六六頁

⁴³倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』講談社、一九七〇年三月、二七頁

⁴⁴S・ブラウンミラー (Susan Brownmiller) 一九三五年二月一五日〜) は、アメリカのフ

エミニスト、ジャーナリスト、市民活動家。フェミニズムの視点から見たレイプの問題に関する著者で知られている。ブラウンミラーの代表作は一九九三年に出版された『レイプ・踏みにじられた意思』である。彼女はこの本の下調べに四年間を費やしてレイプの歴史を渉猟し文学、ポップミュージックから統計に至るまであらゆる側面から洗い出した。彼女はこの本において、レイプは「全ての男が女を恐怖状態に置いている脅しの意識的なプロセス」であるとしている。

³⁵前掲書、S・ブラウンミラー『レイプ・踏みにじられた意思』六頁

³⁶L・イリガライ (Luce Irigaray、一九三〇年五月三日～) は、ベルギー出身の哲学者、言語学者。専門は、フェミニズム思想、精神分析学。六〇年代初頭に渡仏し、パリ第八大学でジャック・ラカンに師事する。一九六四年から、フランス国立科学研究センターで研究生生活を行う。二〇〇四年から二〇〇六年までノッティンガム大学客員教授。

³⁷L・イリガライ『ひとつではない女の性』棚沢直子、小野ゆり子、中嶋公子訳、勁草書房、一九八七年十一月、七三～七四頁

³⁸前掲書、S・ブラウンミラー『レイプ・踏みにじられた意思』一九九頁

³⁹倉橋由美子「妖女であること」(初出『冬樹』巻号不明、冬樹社、一九六五年二月) 『わたしのなかのかれへ』一八九頁

⁴⁰倉橋由美子「毒薬としての文学」(初出「私の文学 毒薬としての文学」『われらの文学 21』講談社、一九六六年一〇月) 『わたしのなかのかれへ』二九九頁

第二章 性的倒錯に生きる女たち

倉橋由美子は人間の「性」というものを執拗に見つめ、描いた作家である。彼女ほど、内なる女性性と闘い続けた作家も珍しく、女性性につながる、食や肉、生理、性行為というものの違和感までもあらわにしている。つまり、心と体の「ズレ」に苛まれるために、生ということ自体に違和感を持たざるをえなくなっている。このように、倉橋の文学には女性性をめぐる葛藤があらわだが、倉橋はやがて、その葛藤を超越したところで、独自の華麗かつ幽玄な世界を構築するようになっていく。倉橋文学特に前期には、同性愛、近親相姦、サディズム・マゾヒズムなど、常識では考えられないゆがんだ行為即ち性的倒錯に生きる女たちが多く描かれている。

上野千鶴子は『女という快楽』において、「性革命」の攻撃目標を、「現代社会の抑圧的な性規範（と考えられるもの）——一夫一婦婚的な近代家族制度とそれを支える恋愛結婚（ロマンチックラヴ）イデオロギーとに向けられた」ものと見なし、さらに「(一) 一夫一婦婚（モノガミイ）に対して同時複数性愛（ポリガミイ）を、(二) 異性愛（ヘテロセクシュアル）に対して同性愛（ホモセクシュアル）を、(三) 法律婚に対して事実婚（同棲）を、(四) 嫡出子に対して非嫡出子の市民権を、(五) 「攻撃的な性」と「受動的な性」からなる性分業的な男女関係の神話に対して、「ベッドの中の平等」と女性の性的主体性を主張した」といった具体的な対象を掲げている。倉橋が造形する性的倒錯に生きる女たちはまさしく現代社会の抑圧的な性規範に異議を呈したものであると考えられる。

第一節 「蛇」における男性化願望

「蛇」は『文学界』一九六〇年六月号に発表され、同年八月に『バルタイ』（『週刊明治大学新聞』一九六〇年一月一四日）「貝のなか」（『新潮』一九六〇年五月号）「非人」（『文学界』一九六〇年五月号）とともに文藝春秋新社より刊行された『バルタイ』に収録された。粗筋は以下の通りである。男性主人公Kは口のなかに異物を感じて目が覚めると、七メートルもある蛇を飲み込んでいる。授業料の督促を受けているのに来るはずの送金が来ない。そんな中、アルバイト先で「おくさん」に弄ばれたあげく首を切られる。恋人のLに会うたびにセックスを強請られ、自分が妊娠しているのではないかと心配する。一方、蛇に飲まれるのが当局の陰謀に引つかかっているのだと、寮生に「犠牲者」と仕立てられ、国会特別調査の証人として喚問される。解雇・診察・契約・訊問・審判など一連の事件が起こり、外界か

らの疎外を体験しながら、蛇に飲み込まれるまでの経緯が描かれる。

平野謙は、男性妊娠という設定について「男性への強烈な対抗意識がある」（『新日本文学』）という久保田正文の解釈に疑問を呈し、「この作家を駆って『バルタイ』から『蛇』にいたる特異な作品系列を生ませた」のは、「男性への対抗意識というより、男性に対する観念的なコムプレックス」⁵⁴であると指摘している。江藤淳は「畜生道を人道の上におこうとするものは、道徳的非難を覚悟しなければなるまいが、男の学生が女に下敷にされて妊娠させられることを書いても、せいぜい異常感覚を告白するだけのことである」「大男のQ教授の毛だらけの腹が妊娠していたり、学生の口から出た蛇が学生を呑んだりするのは只の思いつきの地口で、あまり趣味のよくないウイットにすぎない」⁵⁵と批判している。永岡定夫は「男性は、『他者』に変身し主体になりかわった女性から『もの』としてみられる恥（オント）に甘んじなければならぬ——哀れなKの姿を、こう見ることもできるだろう」⁵⁶と述べている。

中山和子は「批評の荒野 1960 —『バルタイ』から『囚人』まで—」において、平野謙と江藤淳の「蛇」評を否定し、「わたしの『第三の性』という倉橋のエッセイを援用して、倉橋は「蛇」を創作したのは、男女の不平等性の元凶を生物学的性別に求め、よって、女性のありかたを「第二の性」から「第三の性」へと転換しようとしているからであると解釈している。安藤秀国は「倉橋由美子の初期作品におけるカフカ受容」において、倉橋自身の「これは徹頭徹尾ヘカフカ—安部公房的小説である」という言及に従い、「人物の名称と性格付け」「冒頭の状態 動物への変身」「主人公の対応」「召喚」「審判」といった点から、『変身』をはじめとするカフカの一連の小説との関連性を指摘し、「蛇」を『変身』や『壁』などから多くの要素を取り入れている」⁵⁷と捉えている。本節では、男性妊娠という設定に焦点をあて、男性に背負わせた妊娠という生理現象の意味を明らかにし、またその創作意図を究明することを目的とする。

既に先行研究で指摘されているように、倉橋由美子は「蛇」において、男性の身体に女性機能を背負わせ、女性に男性化の要素を付加し、男女転倒の世界を展開している。具体例として、月経も妊娠も男性が体験することになっていることが挙げられる。たとえば、家庭教師のアルバイト先で、生徒さんの「坊ちゃん」が体調不良を訴えると、「坊ちゃん」の母親である「おくさん」が「それがじつは先生、けさから坊ちゃんはあれがはじまっているんですよ」（八九頁）と言う。授業が一段落すると、Kが食堂に案内され、ホルモン酒を飲んでいる場面を見ると、「坊ちゃん」もホルモン酒を強請るようになる。そのとき、Kは「一般に坊ちゃんくらいの年齢ではいちばん用心してないと、すぐぼくみたいに妊娠してしま

いますよ」（九〇頁）と「警告するつもり」で言い聞かせる。Kと「坊ちゃん」の男性性と妊娠に関する叙述を考慮すると、「おくさん」が口にした「あれ」は月経のことだろうと推測される。

Kが恋人のLにセックスを強請られるときにせよ、アルバイト先で「おくさん」に犯されるときにせよ、自分が妊娠することを過度に心配する描写が何箇所もある。たとえば、Kが恋人のLにセックスを強請られるとき、「でも、こんなにしょっちゅう会っていて、ぼくはほんとに妊娠するんじゃないかしら？」と心の中で思い、難色を示すが、「Lのうれしそうな眼を見ると、そうもいつていられた」（九六頁）い。また、アルバイト先で「おくさん」に犯されるとき、Kは「もうおりてくださいませんか。とても痛いし、それにぼく、妊娠するとまずいんです」（九一頁）と「泣き声」で「哀願」する。

「蛇」において、Kの指導教官であるQ教授が妊娠中の設定となっている。Kは国会の特別調査委員会に証人として召喚された際、Q教授に保佐人を依頼するが、Q教授は「狼狽したように」、「ぼく、ぼくは……、現在妊娠しているので」と告げ、断ろうとする。Kはそんな話を聞いて、「気の毒に思」いながら、Q教授の「へそのまわりに赤褐色の剛毛がうずまいて」いる、大きな腹を眺める。Q教授が妊娠したことを「狼狽したように」言い出すと、Kは「気の毒」に思う。さらに、Kは自分が妊娠することを心配し、病院に診察を受ける。女を生育の道具とみる男性であるが、自分が妊娠する設定になると、「妊娠するとまずい」と妊娠を怖がったり、また他人が妊娠することを知ると、「気の毒に」思ったりする。その反応は現実社会の中心にある男性が一般的に抱く、母性を女性の美德とする考えとは正反対である。倉橋は男女の位置を逆転させ、男性の細かな心理描写を通して、もし男性が妊娠する体質になるとしたら、妊娠を拒否するに違いないと語り、母性礼賛の男性中心社会へ異議を提出しようとしている。

また、アルバイト先で「おくさん」に犯されるとき、Kは「とても痛い」といい、「降りてくださいませんか」と頼んでも、「しかしおくさんは眼をつりあげてがんばっていた。Kは絶望して、おこしかけていた上体をまた力なくベッドに沈め、気の遠くなるおもいで苦痛にたえた」（九一頁）。それに、恋人のLに蛇を飲んだという相談に乗ってもらいたくて会いに来たにもかかわらず、Lは無関心を示し、蛇を飲んだため、口に悪臭が発するKに香水まで飲ませ、キスとセックスを迫る。倉橋はアルバイト先の「おくさん」とLを自分の生理的な欲求にひたすら従い、性欲と快楽のためにのみセックスを求める人物と造形している。

性的関係において、男女の間には非対称的な位置づけが存在する。フロイトは性的関係における男女の位置について、「男性の性細胞は能動的に動いて女性の性細胞を探し出します

が、女性の性細胞すなわち卵子は動くことができず、受身のかたちで待っているのです。性的基本有機体のこの振る舞いは、性交時における性的個体の動作の象徴ですらあります。雄は性的結合体を目的として雌を追い、掴まえ、その体内に侵入いたします。ところが、これは心理学のために、男性的なものの性格を攻撃性の契機に還元したものとすべきであります」⁴⁸と述べている。

精子のイメージそのままに男性は性的関係において能動的であり、それに対して、女性は卵子のイメージそのまま受動的であるとされる。しかし、倉橋は男女の性的関係における不平等を訴え、能動的な男性⇨主体性、受動的な女性⇨客体性という一般化された構図に揺さぶりをかけることよって、男女関係への見直しを呼びかけようとしていると考えられる。倉橋は「蛇」のなかで、男の冷たさ、男に弄ばれること、妊娠することなど、女性が体験するはずの出来事を男性に体験させ、体験時の思いを男の口を通して細かく描くことよって、女性の他者性を強く訴え、定則となる男女の性的な役割を転倒させ、男性を女性の付属品のような存在と描き、男権社会からの拘束を打ち壊そうとしている。男女位置の置き換えという大胆な発想から、妊娠を自己疎外と見なし、身体という牢獄から女性を救い出そうとする倉橋の姿が見られる。

蛇の表象

Kは蛇を吞んでしまうが、蛇は完全に消滅するのではなく、時々頭を覗かせたり、Kには時折蛇の習性が現れたりする。蛇の習性はだんだん強くなり、空腹のため、Kの恋人であるLを飲みこんでしまう。Lは完全に消化されず、蛇に飲み込まれた状態で意識を持ちながら生きるため、「K・蛇」という共生状態から「K・蛇・L」という状態に変化する。下剤を飲まされると、「Lの声は急速によわまっていき、Kは肛門が力づよくおしひろげられるのを感じ」、黒い卵が排泄物として体外に排出される。このようにして、「K・蛇・L」の共生状態が解消されることになる。卵が「蛇の排泄物」として排出されるシーンは以下のように描かれている。

「ああ、Lさん、困ったことになりましたよ。いったいどのへんにいるんです、いま？」
「もういないわよ。とつくに消化されたにきまつているでしょ。あら、下剤がやってきたわ……どうするつもりなの、あなた、これから……」

Lの声は急速によわまっていき、Kは肛門が力づよくおしひろげられるのをかんじた。蛇のしっぽの先端がじよじよにはみだしてくるのだった。Kは排便の姿勢でしゃがんだ。しっぽは三十センチほどたれさがり、その末端の開口部がほとんど床にふれようとしたと

き、駝鳥の卵ほどある黒い糞がころりとでた。緊張がとけて、守備たちは感嘆の声をあげた。糞は非常にすべすべしており、どこか銀河系の外からきた未知の生命を封じているのではないかとおもわれるほどだった。《みごとな排泄物だ！ほとんどこれは芸術品といっていいだろうな》Kはうっとりしてその卵をかかえあげた。抱いて撫でてみると、生きた黒人の肌のように、かすかに汗ばんでさえるのだった。これが蛇の排泄物だなんてだれも信じられないだろう、とおもい、Kは誇らしげに守備たちをかえりみた。

(中略)

Kは念入りに黒い卵形の糞を磨きはじめた。それは磨けば磨くほど光沢をまし、Kをすっかり魅惑していた。

中山和子はこの排泄物について、「Kの中の蛇にのみこまれた恋人Lが、消化されて美しい卵に変貌したのである。Kが蛇の中へはいっていく結末は、やがてKも消化され同様に「みごとな排泄物」に変貌する可能性を秘めているだろう」とし、その排泄物をLが完全に消化され変貌したものと解釈している。中山説は一見理に適っているように見えるが、不合理な点もある。Kは下剤を飲まされる前に、「ああ、Lさん、困ったことになりましたよ。いったいどのへんにいるんです、いまは？」と心配そうに聞く。Kの質問に対して、Lは「もういないわよ。とつくに消化されたに決まっていますよ。」という。換言すれば、この時点において、「K・蛇・L」の共生状態にあるのはLの身体ではなく、意識だけである。それでは、Lの意識はどこに消えたのであろうか。

被告が蛇をのんだのか、それとも蛇が被告をのんだのか？という問いに対して、K自身は自分が蛇を呑んだと主張するが、それと反対に、「われわれは革命党の立場にたつことによつてのみ、真実をつかむことができます。かれは当局の陰謀の犠牲となって蛇にのまれたのであります」(八六頁)という革命党員の寮生Sの発言から考えると、平野謙の指摘した通り、蛇を「反共産党主義的あるいは非共産主義的なイデオロギー形態のシンボル」と見なすことができる。しかし、「審判」の節では、「蛇が善良なる学生をのんだとかれはいう。これは驚くべき詭弁であります。いったい、だれが、なにものが、蛇をして学生をのませめたか！」(一一九頁)という革命党の代議士が叫んだ言葉から、蛇がKを呑んだという認識は革命党における統一的な見解でないことが分かる。そのため、蛇は「反共産党的あるいは非共産主義的なイデオロギー形態のシンボル」と見なされるかどうかは検討する余地が残される。ここでは政治的なつながりはさておき、蛇は何を象徴しているのかを検討してみたい。

蛇は大昔から、東西の神話や民間伝承の中には、悪魔の化身であり邪悪なシンボルとして、また生命や豊穡、再生など多義的な象徴性を持つ動物としてしばしば登場する。蛇の外見が男根に似ている点から、性的に男性を象徴することが多いが、蛇は、平和的で控えめで穏和で無口だという点から見れば、女性的でもある。そして、参拝の途中、一夜の宿を求めた僧・安珍に清姫が恋心を抱き、裏切られたと知るや大蛇となつて安珍を追い、最後には道成寺の鐘の中に逃げた安珍を焼き殺すという安珍清姫物語では、蛇が執念深き、執着心の具象化された存在として描かれる一方、娘が蛇身に変ずることに蛇女房などを考慮すると、蛇と一体となった女性、蛇から人間へ、人間から蛇へと変身する女性のイメージが存在することが明らかである。

また、近藤良樹は「昔話・神話にみる蛇の役柄―知恵・生命・異性の象徴となる蛇―」において、「神話学者は、「定期的に脱皮して新しく生まれ変わる、もしくは別の生命となつて再生すると広く信じられてきた」蛇は、「本来は太女神自身と同一視されていた」と説き、世界各地の神話に普遍的に見出される古代の「蛇―女神」「蛇―母神」の存在を指摘する。これらの女神・母神は生と死を司る神であつて、大地の豊穡性や女性原理を象徴していた」と指摘している。こうして蛇が持つ「生命」や「豊穡」といった象徴性は母性や女性原理と結びつき、蛇は男根のほか、女性の象徴性をも持ち合わせていることが分かる。すなわち蛇は男根と子宮の性的両義性を持つ両性具有者となる。

また、『イメージ・シンボル事典』によると、蛇は「突然日常生活に姿を現し、苦痛と危機をもたらす無意識を表す。このことから、蛇は無意識の中の母のイメージの顕現と考えられるので女性的であるが、男根のシンボルであるので男性的でもある」³⁰と解釈される。また、蛇の卵は「蛇の排泄物」とされるが、銀河系の外から「未知の生命」を封じてきたかのような、みごとな黒い卵という表現を考えると、ここでは排泄物というより、産み出されたものと考えの方が妥当であろう。倉橋は初期エッセーにおいて、「女は要するに子宮だ」「出産と育児を人間社会にたいする崇高な義務だ」という母性に関する社会通念を強く否定し、初期作品の中で女主人公が子を産まない、あるいは妊娠した後強い現実嫌悪と自我疎外を感じ、中絶を決めるといふ物語のパターンを生み出した。このようなことから、倉橋の母性への反感や嫌悪が人一倍際立っていることが分かる。ここで、排泄という言葉づかいには、出産を貶している意味合いが込められていると考えられる。それは初期の母性嫌悪・否定の認識と合致している。

「非常に長い桃色の物体が、自分の口から外へ、くねくねと伸びている」「遺物はぶるぶると身をふるわせ、蠕動しながら、しだいにKののどふかくはいりこもうとしている」と描

かれるように、蛇は経口的にKの体内に入ろうとする。口を首元まで大きくさき、蛇をくわえ呑みこんでいくその姿において、蛇が男根に想定されるならば、K自体は女性的と見なされる。「経口的に体内に入りこんだ蛇を、古代説話さながらにペニスを象徴として解釈することができるわけである」³²と永岡が指摘した通りである。物語の終盤の「Kの口から蛇がずるずるとたぐりだされ、同時にKのからだは頭から次第に蛇のなかに没していくのだった」(二二二頁)という入れ替わりは、ウロボロスを連想させ、蛇の再生を象徴する一方、Kは女性的な側面が薄れ、蛇に吞まれるペニスをイメージするもの変わっていくことが読み取れる。すなわち、Kは女性化した男性であると考えられる。

吞まれる方は男根を象徴するという構図はそのままLにも当てはまる。蛇に吞まれたLは男根を象徴する男性的な側面を持ち合わせているならば、吞む行為の主体である蛇は女性的となる。そういう性的行為がもたらす結果として、蛇が排泄すなわち出産することになる。吞む主体と吞まれる客体という立ち位置の入れ替わりから見れば、蛇も男性化した女性Lと女性化した男性Kと同じように、両性具有の存在として位置づけられていることが分かる。

第二節 「貝のなか」「密告」「死んだ眼」における同性愛とサディズム・マゾヒズム

倉橋文学には、同性愛カプトルを取り上げたいくつかの作品がある。しかも、それらの作品の多くは一九六〇年代に集中している。例えば、レズビアンを描いた「貝のなか」は一九六〇年『新潮』五月号に、ゲイカプトルを描いた「密告」と「死んだ眼」はそれぞれ『文学界』一九六〇年八月号、『マドモアゼル』一九六〇年九月号に発表された。

「貝のなか」は歯科大の新生入生として、狭い女子寮の部屋で三人の寮生とともに暮らすことになった「わたし」の生活を描いたものである。語り手がとらえる世界はすべてが極端にデフォルメされたものとして描かれている。語り手の「わたし」にとっての彼女たちは、狭い部屋のなかで、そこだけで通用するルールのもとに馴れ合って生きていく存在として映っており、その馴れ馴れしさ、自他の境界をあっけなく浸食してこようとする仲間意識、そして女性性が持つ、ある種のいやらしさに嫌悪を覚えている。

V・スジコは男と会わない夜は、寮生のP・イクラと同性愛的関係にある。P・イクラは貞淑な配偶者のように、スジコの寝床をしつらえるなどして、スジコの身の回りを世話している。イクラが尽くす、スジコが尽くされるというバランスのとれた関係は、スジコが「わたし」を狙い、新しい相手に選ぶうとするこによって均衡が破れる。そのことが発覚すると、P・イクラは「スジコはもう自分をかまってくれなくなった」としくしく泣いたり、「わ

たし」に急接近し、「卑屈なほどわたしにかしずくようにな」るが、「わたし」に拒否されたにも関わらず、「わたしの日常生活のひだに猫がするように身をすりつけ、わたしの身のまわりを世話した」（四七頁）りなどして、レズビアンの関係においても典型的な女役を演じている。イクラは男に尽くす伝統的な女性のように振る舞うが、それに対して、相手のスジコは性に対して貞操観念を持たず、大いに享受していて、男のように振る舞う。すなわち、この同性愛的関係において、普通の恋愛関係にある男女の行動パターン即ち「男役」と「女役」の役割分担が見られる。

同じ寮生であるタラコはスジコの奔放的な性の扱いかたを非難する一方、「お兄さま夫婦」の経験から得た知識と称して、性器の適合状態、避妊の技術にまでおよんだ性知識を熱心に語る。「わたし」は彼女が身体の清潔さに気を配りはじめたことや、度重なる外泊しているのを知って、その話はタラコ自身の経験を参考にしたものではないかと指摘すると、タラコは「わたしが彼女の品行をスジコのそれと同列に考えていることにひどく憤慨し、自分が処女であること」（五〇頁）を強調する。相手の性器についておおっぴらに語るスジコとは反対に、性知識を語りたがるが、自分は処女であるとひたすら強調するタラコの姿には、当時の社会背景を垣間見ることが出来る。

一九六〇年代のフリーセックスを謳歌する社会背景のもとで、「学生反乱のバリケードの内側では、性的に自由な女子学生が、誰とでも寝る便利な「公衆便所」と男子活動家の間で呼ばれていたことは、公然の秘密だったし、一部の女性たちは、自分の性的な「開放度」を証明するために、気のすすまないセックスをも受け容れなければならない、という悲喜劇も起きていた」²²と上野千鶴子が当時の女子学生の性事情を概括している。そして、昭和三六年十一月号の『婦人公論』には「誌上裁判・結婚前性交はか非か」と題された記事が載っている。リードとして、「結婚前の女性の五〇％が婚前性交の経験者だ、とキンゼイ報告に」あり「処女性についての考え方が変わりつつあるようだ」として、「ここではそのような処女性無視の風潮を被告として、処女性の価値について検事、弁護士からそれぞれ異なった考え方を提出してもらった」²³とある。

性科学者・朝山新一（マナーとタッカーの『性の署名』の記者）は調査によって花嫁の八五％が処女だが、若者の考え方は変わりつつあるようであり、性的な「開放度」が謳歌されること、しかし同時に性経験が多ければ多いほど、男には勲章、女にはステイグマになるという「性的二重基準」道徳が依然として深く根を下ろしていることを指摘している。このように、男役のスジコが性経験を自慢げに披露するのに対して、タラコが処女と偽り、性経験を隠そうとする背後には、女性たちが性的な主体性、性的な自己開放を求めながらも、旧道

徳に深く囚われているという現実があった。

「死んだ眼」では、倉橋文学によく主人公として登場するKは同性愛者であり、アメリカ人のフレッドという相手がいる。Kは「他人の眼に出会うといつも屈辱が汗のようにふきだしてきて、そして「屈辱ということばを頻繁に使う癖があった。世界のなかでかれがしめていける存在、その符号について、かれはほとんど性的に陵辱された人間の屈辱感に似たものをもっているらしかった」(二四六頁)。その屈辱の感情の出所は「ぼくとフレッドとの関係は……」で始まる告白によって明らかにされる。フレッドとの同性愛的関係において、もっぱら「裏を提供する」Kは、その交わりの瞬間に、「アメリカ人に対する日本人として恥さらしな男娼にされる」(二四七〜二四八頁)と絶えず屈辱を感じる。ここで、「肛門の形をした屈辱のなかに押しこめられているKの日本人意識」について考えたい。

倉橋は「わたしの文学と政治」(一九六二)において、「あの神話的な子供の日々を戦争の時代にすごしてきたわたしは、楽しいかくれんぼに似た疎開や防空壕での遊びが終わり、世の中とおとなたちの生活とが次第に堅固さをとりもどしていくにつれて、自分が女であることを知り、とまどいをおぼえはじめたものでした」²⁵と戦争について回想している。当時、防空壕で遊んだ疎開生活は楽しいかくれんぼに似ていたと回想されており、戦火から遠ざかった疎開地にいたため、倉橋は戦争の残酷さを体験したことはなく、比較的平穏な幼年時代を過ごしてきたということが読み取れる。そのため、戦争は倉橋の人生に暗い影を落としていないと先行研究で語られるのが一般的である。しかし、倉橋の戦争に関する数少ない描写のなかに、戦争によってもたらされた屈辱感が鳴り響いている。

Kが「裏を提供する」ことに屈辱を感じるのには、相手がアメリカ人であることに原因を求めることができる。日本の敗戦は焼け野原といった表面的なものに止まらず、恥に対する考え方、神話、大和魂といった精神的な層にまで日本国民に強い衝撃を与えた。アメリカ軍が日本から撤退した後も、日本人は劣等感を感じながら生きていたとも言えるだろう。「第一フレッドは日本語をしゃべらないがぼくは下手な英語をしゃべる。このことだけでも、ぼくがかれのまえでぼくの裏側を提供しなければならなくなるのだ」というKの告白からも、依然として屈辱の感情に包まれた六〇年代の時代背景が窺われる。また「あなたは占領下のフランスにうまれるとよかつたんだわ」、「Kはもつと健康的で英雄的なレジスタンスに参加しただろう」(二四七頁)といった「わたし」の発言にも裏打ちされることができ。Kが感じた屈辱の感情はKだけのものではなくて、当時の日本人一般が共有していたものと考えられる。倉橋は「密告」の自作解説において、「ともかく「密告」は一見してジュネ風の小説である。しかし私が言葉の銅版画にして示したかったのは、子供の頃のある夏の一日、

太陽が空に止って白っぽい「永遠」が支配していたような感覚で、それは終戦の時の空白と重なってもよい」と回顧し、敗戦で感じた屈辱を共有している時代像を全面に出していることから、八月十五日の敗戦の衝撃がその後の倉橋の文学世界に対する感覚を決定していると言っても差し支えないだろう。

「密告」は、模範生の「ぼく」が先輩のSから任務を引き受け、QとPの行動を観察し逐一密告するという物語である。QとPは「一瞬世界のカーテンをめくりあげてその裏をぼくにみせたようにおもわれる」（二八九頁）同性愛的関係で結ばれる。二人の関係を顕著に示す場面を見ると、防空壕掘りの作業で、「ぼくたちは上半身を裸にしていた。Pの胸は厚くて、かたちのよい筋肉でおおわれている。かれはまぎれもない男だ。Qだけは汚れたシャツで胸を隠している。そしてかれの手は、まわりの視線に用心しながらたえずPの肉にさわり、泥でその恋人に化粧をほどこし愛撫している。かれは、Qは、Pにとっては女であるにちがいないかった」（二九三頁）。また「女の声と調子で」（二八九頁）話し、「女のことばで愛の媚態」（二九三頁）を示すQの姿からも、Qが「Pの情婦」であることを確認することができると。PとQには男役と女役の割り当てが見られる。

PはQをおもちゃのように扱っており、気が向いたらQを相手にして遊ぶが、気が向かない時は「譲ってやってもいい」と躊躇なく捨てる。そしてQへの思いやりも見せず、「おれのことならなんでもきくのだ。からだ中舌でなめまわしてもらったこともある」と自慢げに見せびらかすと、Qは「青ざめて関節を震わせながら恥の電撃に耐えようとした。そしてPにむかって黄ばんだ憎悪の眼を向けたが、どうしようもないとわかったとき、かれはいっそうPの酷薄さをあいしようとしてとめるのだった」（二九四頁）。即ち二人は愛情によって結ばれているわけではなく、一種の変態的な関係にある。

Qが酒場で「ココア色の顔とカリフラワーのようなちぢれ髪」、「はちきれそうな髻」、汗で「栗毛の馬のよう」に光る首筋、「原始時代の巨大な石造貨幣をおもわせる上下の唇」に断片化される黒人に一目惚れし、簡単に乗り換える。上野千鶴子はゲイカップルとレズビアンカップルとの区別について、以下のように述べている。

ゲイカップルはポリガマスなのに比べて、レズビアンのカップルはモノガミイの傾向が強く、特定の相手に忠実で長期間の安定した関係を結ぶ。自分以外の相手に対するパートナーの「性的魅力」や「収入」や「地位」についても、ゲイビープルは大へん気にするのに、レズビアンは頓着しない。ゲイであることは、乱婚的傾向を保持する権利とほぼ同義だし、エイズもまたそういう回路を経て伝染している。ベッドの外でのパートナーの社会

的地位に敏感で、それをベッドの中にまで持ち込む傾向を見ても、ゲイの人々は、男性的価値観を、そのまま同性愛の中に引き継ぎ拡大しているといえる。レズビアンはそうではない。レズビアニズムを選ぶことは、現在の社会にある男性的なポリティクスに、はっきり背を向けるという「政治的な選択」を意味する。その意味で、まさしく性は政治なのである。²⁶

Pと黒人は、筋肉隆々という立派な身体を持ち主という点において共通している。そしてQが黒人を見て、「あのニグロのあれ、どんなにおおきいかしら」と感嘆する所からも、Qは黒人やPに性的な魅力を感じていることが分かる。「レズビアンのカップルはモノガミイの傾向が強く、特定の相手に忠実で長期間の安定した関係を結ぶ」という上野の語句を裏返せば、ゲイカップルは特定の相手に忠実で長期間の安定した関係を結ばないことになる。Qが黒人により換える所を見れば、まさしくその通りである。そしてQはPとの関係にしる、「ニグロ」との関係にしる、相手に性的な魅力を感じ、女役を演じている。「密告」では「Qと黒人とは、たがいにそのからだを、とりわけもつともデリケートな恥の赤さで輝く美しい大小の枝を愛撫しあっているだろう。あらあらしい侵入の儀式がQを悶絶させているだろう」(二〇二頁)という描写から、おそらくQは、「死んだ眼」のKがアメリカ人の「フレッド」に奉仕するように、「ニグロ」に「裏を提供する」位置に置かれているだろうと推測できる。KとQはいずれも同性愛関係において常に低い立ち位置にあることから、ゲイカップルはベッドの外のパートナーの社会的地位に敏感で、それをベッドの中にまで持ち込む傾向があることが読み取れる。

「密告」と「死んだ眼」にあるゲイカップルでは、どちらも日本人男性を受け側にし、攻め側には外人男性を据えるが、一言に外人と言っても、白人と黒人の違いが見られる。日本人男性がアメリカの白人男性を相手にして、劣等感を感じたのは敗戦意識に解釈を求めることができると、黒人男性を相手にしても、「裏を提供」すると設定されたのはなぜであろう。

最近の人種研究では、ジェンダーと同じく「人種」も歴史的な構築物であることは常識となってきた。「ホモ・サピエンスは一属一種、どの人も九九%以上のDNAが同じなのに、わざわざ「人種(Race)」というカテゴリーをつくって、肌の色で人間を区別する。ジェンダーが「男でない者」、すなわち男になりそこなった男と女とを排除することで維持される境界であり、男が男として主体化される装置であるように、人種とは(それを発明した)白人種たちが、「白人でない者」を排除することで、「白人であること」を定義するための装置

だったことは、白人研究「藤川編 2005」のなかで次々とあばかれてきた」⁵²。「白人であること」とは、劣等人種を支配してもよい資格を持つことだった。女性は男女の力関係において弱い立場に置かれ、第一の性とされる男性から客体化され、第二の性とならざるを得ない。それと同じように、ゲイ、有色人種などに属したマイノリティーの男性たちは同じく客体に過ぎず、異性愛と家父長制の支配下、彼らが生物学上の「男」であったが、主体として扱われることなく、女性と同等の立場で抑圧されていた。倉橋は「わたしの「第三の性」」（一九六〇）において、黒人と女の性との類似性を以下のように述べている。

身体によって他者と関係しながら世界のなかに存在する人間の存在論的構造として性欲やサディズム、あるいは愛やマゾヒズムがあり、このことが異なる性器をもつ人間を男性的または女性的にする。フロイトがあきらかにしたように、人間がその生涯から死にいたるまで性的であることの意味は、生理的条件からは説明しえない。たとえば男色のような性的関係は、《雄—雌》という生物学的条件をはなれて、性の存在論的構造だけをグロテスクな純粹さをしめしている。男娼とはみずから他者に変身させた男、それゆえ世界のまなざしを受け、悪をひきうけた男だ。作家ジャン・ジュネが受け身の男色家でありかつ泥棒であったことは偶然ではない。男娼、犯罪人、アメリカの黒人やインドの不可触賤民などの存在は、女の性と類似の存在論的構造を示すものだ。⁵³

倉橋の認識では、女性とは「男の世界からまなざしと加工によって石膏のようにかためられ形づくられた他者、男によってこうであるときめられた客体としての性」である。女性が第二の性として客体化されるのは生理的な条件によって決められたものではなく、歴史の結果である。そして「男娼、犯罪人、アメリカの黒人やインドの不可触賤民などの存在は、女の性と類似の存在論的構造を示すものだ」（二七頁）と述べられるように、白人から異端と見なされ、排除された存在としての黒人は、存在論的構造に立って考えれば、男性に立てられた価値観によって統治され、抑圧されている女性の立場は類似している。言い換えれば、サイドが『オリエンタリズム』のなかで述べているように、「相手を理解不能な存在—すなわち異人、異物、異教徒として「われわれ」から放逐する様式には、人種化とジェンダー化のふたつがあり、このふたつが密接にからまりあっている」⁵⁴。

異端と見なされる存在をさらに同性愛者と絡めることは、正統の道徳観から見れば、底辺にいる者をさらに底辺に落とすのと同じ意味となる。Qと黒人が同棲している場所は「窓のすぐ下には、港の油を浮かべた掘割の水があった。有機物の腐臭がしていた。この生あたた

かい水には、あなたがたの世界から吐きだされたあらゆる汚物が、猫の死骸も、精液も、腐った花も、ときには神像さえも浮んでいる」(二〇一頁)と描かれる。「あなたがたの世界」即ち一般の道徳と価値観が当たり前のように守られる世界から見れば、この場所はきわめて不潔な場所である。しかし、この劣悪な環境こそ、通常の世界から排除された黒人と同性愛者との融合した異端者にはもつとも相応しい居場所となるだろう。同性愛者として黒人男性と関係するQは、倉橋が描こうとする「反世界」の住人としてもってこいであると考えられる。即ち黒人と同性愛者を絡めるという発想は「反世界」という独特の世界観から来たものと推測できる。異性愛が主流を占めるなか、倉橋は同性愛者を造形することによって、性的規範を覆し、当たり前とされる異性愛に異議を呈していると考えられる。

第三節 「聖少女」「迷宮」「婚約」における聖女にして娼婦

男の性の二重基準は、女性を「生殖向けの女」と「快楽向けの女」という二種類の集団に分断している。「聖女」と「娼婦」、「妻・母」と「売女」、「結婚相手」と「遊び相手」、「地女」と「遊女」……の、あの見慣れた二分法である。生身の女には、カラダもココロも、そして子宮もあれば女性器もあるが、「生殖用の女」は快楽を奪われて生殖へと疎外され、「快楽用の女」は快楽へと特化して生殖から疎外される⁸⁰。倉橋文学における「聖女にして娼婦」という女主人公は性の二重基準をひとつの身体で演じ分け、この境界を乱そうとする。

「聖少女」において、女主人公未紀はいつも白い服を身にまとう。たとえば、「この日の未紀は白いニット・コートを着ていたとおもう。太い毛糸がからみあつて縄文式土器の紋様に似た編み目をつくっているゆるやかなコートに、おなじ毛糸のストール。このコートの下には白銀の色をした繻子の中国服(九四頁)と「ぼく」が未紀との最初の出会いが回想される。しかし、「その下に(ぼくは想像したが)黒い下着でいたいたしく包帯された裸身。この少女にかぎって、なぜ黒い下着がいようないたましさを暗示するのか?それが隠しているのは、すさまじくえぐりとられたような暗黒ではなかったか?」と語られるように、白の影にはいつも黒が覆い隠されている。そして、「ぼく」が未紀と泳ぎに出かけた時、「未紀の肌はたいへん白かったので、白いビキニの裸は燃えあがる熱気のなかに立つとろうそくのように融けていくのではないかと見えた。未紀は水をおそれずにいきなりクロールで泳ぎはじめた。ヴァイキングの船と白い航跡はあまりに幻想的だった」と未紀の真つ白のビキニ姿に驚きを隠さなかったが、「もしも腕をあげるときにみえる一房の毛の黒さがなかったら、これは完全な幻影だっただろう」(二五二頁)と語られるように、白の下に依然として黒が見え隠れしていることが分かる。

白は、日本の神話では、アマテラスオオミカミの色であり、象徴は空、光となる。光、月、星、雪など天上界から降り注ぐものの多くが白であるように、白は黒い地上を照らし、ある時は覆い、清浄なる世界を象徴し、清浄、神聖、純潔、永遠を象徴する存在となる。従って、いつも白で身を包む未紀は神聖なる存在、清らかな存在そのものとして提示される。しかし、神聖なる白に、白と対をなす黒が影を忍ばせている。黒は恐怖、死、不安、怒り、孤独、憂鬱など悪いイメージばかりを連想させるように、神話の世界では黒は死の世界の色、闇の色である。「パパ」との近親相姦が黒となり、未紀の白に影を落とっていると考えられる。白と黒に引き裂かれるシーンとしては、以下のような場面が最も顕著である。

浴室で鏡と対面。ものすごい顔。お化け。川を剝がれ、道路工事のように掘りかえされた顔。びつくりして鏡のなかのあたしを指でこすってみただけです。優美であらあらしく、顔の半分は獣で半分は聖女。充足と荒廃。左の眼が少し充血して、薔薇色の欲望のなごりみたいに光っています。唇があれいているのは、ゆうベキスしすぎたせい。これがはじめて男をあいした女のもつ型とおりの顔らしい。笑ってみました。罪を犯したあたしと和解するためのおまじないの微笑。(二〇一頁)

鏡に映る未紀は、顔の半分は獣で半分は聖女である。モラルが普及する近現代では、近親相姦は道徳に反した、獣同然の行為とされるため、禁じられたタブーを破り、「パパ」と近親相姦を犯した未紀の顔は、白によって表象される聖女の面と黒に表象される獣の面という融合した形をなす。即ち罪の意識がその獣の面となり、未紀の顔に現れている。「聖女」は、聖母マリアのように自分が性的対象となることを回避し、純潔を極めるというイメージを持つ。未紀はそういった聖女のイメージを一転させて、進んで禁じられた近親相姦のタブーを破ろうとすることに聖女であることの意味を求めている。未紀はノートに、小説を書くことによって、「不可能な恋人であったパパに対するあたしの不可能な愛を聖化しようとしたのでした、あたしの肩から、毒蛇のような愛にみちたいまひとつの頭を生やそうとしたのでした、にせの恋人パパを愛するために」(二三〇頁)と告白する。

「ぼく」は近親相姦を行う資格があるのは「自分の兄や妹を愛することができるほどの精神的エネルギーを持った女、あるいは男」という精神的王族に限られたものとし、「炭焼き小屋や貧乏人に属する賤しい事件」とは違い、精神的王族の行う近親相姦は「自分たちだけで愛しい、神に対抗して自分たちもまた神の一族であると主張することがゆるされるのだ」と主張する。それに対して、未紀は「すすんで罪を犯すことは、聖女になるみちかもし

れませんわ」と言い、「聖女は神にはならないわ。聖女は神につかえるマゾヒストですもの」
(一七四頁) と付け加える。

倉橋は「インセストについて」(一九六六)において、インセストという「悪」の構造的性質を分析し、インセストを聖化することにこだわる理由を述べている。禁じられた近親相姦がもともと「自然」に属することから、「近親相姦は人間が「社会」から「自然」まで下降しようとする「悪」である」と「悪」の性質を認める一方、ルージュモンが「死への情熱」とよんだトリスタン＝イズーを例に取って、エロス(愛)を「人間が「社会」から上方へ、「天国」のほうへ、「死」にむかって脱出しようとする場合の「悪」としたうえで、「エロス(愛)と近親相姦とは、「社会」の「上界」および「下界」をなす「悪」という見取り図を立て、「近親相姦にエロスの翼をあたえ、「社会」から「死」にむかって飛翔する情勢に転化せしめること」⁹。即ち近親相姦を聖化することによって、近親相姦に新しい意味合いを与えようとしている。

「すすんで罪を犯すことは、聖女になるみちかもしれませんわ」と聖女に新しい意味づけをしようとする未紀とは正反対に、母は「中世のどんな聖女のもっていた性的抑圧のメカニズムより強力なしろもの」の塊で、「女が子どもを生むということは文句なしに聖なるいとなみだ」と生殖を崇拜するが、生殖に先立つ性交渉を「あさましい(彼女お得意の形容詞)行為」(一〇一頁)と見なし、性交渉を蔑む。母は女性には「お華、お茶、お料理のお稽古」が当たり前のように思い、大学を出てからの習い事が遅くなると心配する。良妻賢母教育を受けながら育ってきた母は良妻賢母教育の体験者でありながらも、実践者でもある。例えば、未紀が母に性経験があることを打ち明けると、母は結婚前の若い娘が性交渉することを、「けだものofすること」そして「野合」(一三〇頁)という強烈な言葉づかいで、一般道徳にそって未紀を非難する。

未紀のノートに描かれた「パパ」の原型には、実際に近親相姦を犯した「パパ」の姿に、昔母の愛を持ち逃げした元恋人の「かれ」の要素が付加されている。「パパは母に対してなんの幻想もいわずに結婚したといっていました(母の美しさと家柄のよさだけを。パパは結婚の条件としたつもりだったようです)」という一節から推測すると、恐らく何かの事情で母は「かれ」から引き離され、「パパ」と結婚させられたのである。「かれ」がドイツへ留学に旅立ってから、母は愛を封印し、「誰も愛さない女、犬や猫もあいささない女」となり、結婚して「パパ」の妻となり、「あたし」の母となった。「あたしが生まれた日に」、「パパ」は日記に「彼女ノ穴ハコレデ用ヲハタシタワケダ。ソレハモウボクノタメニヒラクコトハアルマイ」(二二三二頁)と書いている。愛の上に成り立つ結婚どころか、愛を排除した結婚で

あるため、女性の存在意義を生殖機能に帰するという世間一般の考え方に従って、母は最初から生殖の女と見なされ、「あたし」を出産し、生殖機能を果たした後は、もはや無用の存在となっている。生殖機能を聖なる行為として祭り上げる一方、快楽としての性を汚れたものだと性を否定する。すなわち性に対する両極の意識を持ち合わせている。

「暗い旅」は一九六一年東都書房より出版された、倉橋はじめての書き下ろし小説である。「その共同生活のなかで、あなたの肉は暗く輝かしい焰で彩られていた、あなたは色情狂で聖女だった……あのもつとも猥褻で神聖な性の儀式、あのむなしく贅沢をきわめた肉の競演、あの醜悪で魅惑的な遊戯の連続……あなたは春から夏の終わりまで、二人の勤行僧のような苛酷さで相手の肉を食べあったのだ」（一一二頁）と描かれた場面から、色情狂で聖女であるという構図が見られる。そういった構図は後一九六三年『新潮』七月号に発表された「迷宮」にも反復される。病床生活の「あたし」にとって、少年が唯一の遊び相手である。少年に親近感と友情を感じた「あたし」が、童貞を捨てたいという少年の願いを聞いて、「ちよつとした犠牲をとまなうあの契約行為」に快く参加する。そして、その行為が終わった時、「とてもすばらしい考えがひらめ」いて、「男の子にいったの、あたしにお金ちょうだいって。一回につき、一枚でいいわ。そのお金で、あたしは男の子から堂々とパンを買うことに成功したわけなの」（六八頁）だ。少年の初体験を手伝う行為に聖的意味を見出した一方、性に商品価値を見出し、セックスを提供することによって対価を得ようとする。聖女と娼婦という両極端に位置する女性が融合させられ、聖女にして娼婦という奇妙な構図が成り立つ。

「聖少女」において、未紀は近親相姦を行うことに聖なる意味を吹き込み、典型的な聖女のイメージを逸脱する新たな聖女像を作り出そうとする。それに対して、「迷宮」において、「あたし」は自分をさらけ出し、犠牲にすることまでして、少年の願い事を叶えようとする。それは自分を捧げることによって他人の幸福を祈るという聖女のイメージにつながる。

聖女と娼婦という意識構造は性の意識構造から生じる両極の意識としてある。男にとつて女とは、生殖機能と快楽機能を分離させた存在であり、聖女（Ⅱ快楽機能を排除し、母性の温もりや優しさを求める）と、娼婦（Ⅱ生殖機能をさておき、快楽機能のみを求める）という性の両極端に位置するふたつのイメージがある。聖母マリアが処女懐妊するように、聖女には生殖機能が求められ、生殖へと疎外される。その反面、娼婦には性欲を満たす器具と見なされ、快楽が求められるが、生殖から疎外される。こうして女のセクシュアリティは、生殖向きと快楽向きとに分断されて、互いに対立させられながら、疎外されていた。

妻のセックスを「不払い労働」と見抜いたジョバンナ・フランカ・ダラ・コスタは、『愛

の労働』(一九九一)のなかで、夫に「ノー」を言えない妻に比べれば、男にけっしてタダでやらせないことで、娼婦は男による搾取を拒む、誇り高いインディーズである」と娼婦を評価している。それと同じように、上野千鶴子は「聖女」は「娼婦扱いたくないで」と娼婦に対する蔑視をあからさまにし、「娼婦」のほうは「奥様」と違って「カラダをはって生きている職業婦人」であることを誇ることで、「しろうと女」の依存と無力さを憫笑することになる⁸²と「金をもらおう」という意味で娼婦を高く評価している。この点において、倉橋は同じような考え方を持っている。たとえば、「婚約」において、F・Bは婚約条件として、「ただし、あなたと寝室をともにするばあいは、一回につきいくらの割合でお金をいただくわ。けれどいくらお金を積んでもおなじベッドで眠るのはおことわりよ」(一五七頁)という条件を要求する。

「迷宮」において、「あたし」が優しくしてくれるお返しに、あるいは他人を助けるといふ精神から出発して、処女性を捧げるといふ行為に聖なる意味を見出す一方、性に値段をつけて金銭に引き換える発想に娼婦性を見せている。上野千鶴子が述べているように、聖女と娼婦は抑圧と搾取の程度の差があり、格差と蔑視があるが、いずれも女性の抑圧のふたつの形態であり、どちらもていのよい「他者化」に違いない。そして、他人を助ける精神に処女性を捧げるにせよ、性に値段をつけて販売するにせよ、どちらも女性を性器に還元しながら、女性性ないし処女性をたやすく扱う傾向が見られる。彼女の性行動は過度に自罰的、自傷的に見え、自分の身体への復讐感情が自傷行為に発展したようにも読み取れる。

第四節 女嫌いと「第三の性」の形成

倉橋文学における女主人公はいずれも感受性の強い女性である。その感受性は特に、乳房や妊婦の腹をはじめとする身体表現、生理表象などに対する嫌悪によって明らかになっている。倉橋文学におけるミソジニーは女嫌いを指すのではなく、女性性という記号に対する反応を指していると考えられる。倉橋は文学において、身体描写から女主人公が自分の身体に違和感ないし嫌悪感を覚え、倉橋が理知的なタッチでそれを大きく上回る生理、身体感覚を以て世界を捉えているように見える。

小倉千加子が『セクシュアリティの心理学』のなかで、女性の「思春期」を定義して、「自分の身体が自分のものではなく、誰かの快楽の道具であり、誰かに見られることに気づく時期」というのは、けだし名言といふべきであろう。男の欲望の対象となると、人は「女になる」⁸³。倉橋の女主人公たちはまさしくそういった外界からの視線に厳しく反応していると同時に、冷静な視線を外界に向けている。例えば、「わたしにとって、眼は、他人にみら

れて動物的だがよく澄んでいると感嘆されるためのオブジェではない。他人や世界を眺め、わたしと世界のあいだに座標軸を打ち立てるための原点なのだ」(二四六頁)と「死んだ眼」で述べられるように、倉橋の女主人公たちは常に客観的かつ冷静な眼で、他人特に女性ないし自分自身を厳しく見つめている。

「貝のなか」で描かれているのは、自分を取り巻く環境、他者、なによりも「わたし」自身への耐えがたいまでの嫌悪の念である。寮生が出かける前に、髪にブラシをかけ、化粧をするという日常生活において極ありふれた場面の描写も、「わたし」の目から見れば、「彼女たちは鼠のようなこまかいしぐさで鏡にむかった。髪にブラシをかけるとき、彼女たちがめいめい四足獣のしかたで座り、一日の生活のために顔を塗りはじめのをみると、わたしは首にのぼってくる憎悪の血に酔った」(四〇頁)と映っている。「白っぽい臓器に似た寝具」、「腸管のような人間たち」、「灰色に毛ばだったカーテン」に「ロープからたれさがるおびただしい下着類」からなる寮の描写、そして同居人たちの「余計な肉にすぎない」とされる身体表象としての乳房、「四足獣」のような座り方、「部屋に充満する臭気」といった描写は悪意に充ち溢れている。

「婚約」では、「Kは、丸々と張りきった肉、しかも褐色の運河に似た条痕が縦横に走っている神聖とも猥褻ともいえないような肉の塊をみた。それは呼吸のたびに、見苦しいほど露骨にせり上がってくるのだった」(一六九頁)と表現されるF・Bの妊婦姿は醜悪そのものでしかない。また女性器は、「妖女のように」では「まだ苔の生えていないおなかの下の切れこみは鋭い刃物をうけた傷あとのようにみえた」(二一八頁)と描かれており、「暗い旅」では、「あれは穴だった、醜悪だが魅惑的な花の形の烙印だった、世界がその歯によって噛みとった傷口だった……(中略)その穴は薔薇色の内壁をもち、あなたの不気味な内部を開示していたこの凹型の存在、これが女なのだ……」(一〇一頁)と述べられている。そういった観察から女性身体への嫌悪が顕著に読み取れる。

また、見る側に立ち、女性の身体を厳しい視線で見つめるだけでなく、見られる側に立たされ、嫌悪の塊になった女主人公も少なくない。「パルタイ」では、「わたし」が《労働者》と幾度か関係を持った後、「わたし」が妊娠してしまう。腹部の膨張がSに見抜かれ、相手を詰問されると、「息がつまり、恥をのみくだそうとして眼を白黒させ醜い顔を」(三〇頁)し、恥ずかしい思いをする。「迷宮」では、「パジャマの紐をといて診察をうけるときみたい自分で裸になったら、男の子はそのとき、わりに大きいじゃないか、とうれしそうにいったけれど、いまになって考えると、その印象は不だし侮辱的でもあるような気がするわ」というのは、のちに父の古い日記を読んだときも、あたしがまっかなモンキーに近い姿をし

て母のなかからでてきた日の日記に、父が一種の嫌悪をもって、あの男の子がいったのとおなじ印象を書きとめてあるのを発見したし、男にとってはこの種類の印象をもつのはもつともなことでしょうから」(六七頁) という衝撃的な告白がある。これは男性に見られて、恥ずかしいというより、自分の身体への嫌悪だと解釈するのが妥当であろう。

女性性のもう一つの表象として生理はどのように描かれているだろうか。「貝のなか」では、「血と獣皮のような匂いがほとんど恒常的に《貝》のなかを支配していたのは、わたしたち四人がじゅんぐりにもついていた月経のせいだとおもわれる」(四四頁)。「妖女のように」では、「汚辱の血」「ひどい復讐」「大きな鉄をもって葡萄を摘みにくる死神」と見なされ、その予兆として「心を包む皮膚と一枚つづきになった真夏の埃っぽい風景のむこうに、みえるはずのない海がみえており、獣の皮を剥ぎめるような波立ち、潮の匂い、不吉な海鳴り」(二二二頁)。「剥離の感覚、砂漠のひろがり、水のない河を逆流する《時》、存在の《蝕》」(二四三頁)といった感覚が挙げられる。「夢のなかの街」では、「はじまりは一滴の血。それはわたしのからだのなかにひろがっている死からしたたったものようだった。」「ふいにめまいが襲い、倒れてしまった。またしてもはじまりは一滴の血。わたしのなかの死が痙攣し収縮して血を吐きはじめたのだった」(一七一頁)「からだだが冷たくなり、全身の穴から水銀のような汗の粒が吹きだすのを感じて倒れかかった。そのときわたしは血を流しはじめていた」(二七七頁)といったいくつかの表現から見れば、生理には死のイメージが覆い隠されていることが読み取れる。

「暗い旅」では、十二歳に訪れた初潮が、「それは世界があなたを強姦したその傷口から流れだしたあなたの恥のしるしだ、それがあなたを女にする刑の執行だった」と描写されており、生理を境目に、「あなた」が女への一本道を歩まなければならないという真実を思い知らされる。そして、女であると宣告されたことで、「あなた」は「突然の変態のあとで別のあなたになって」しまい、「世界の胸から祝福の乳を飲んでいた」「絹のような肉にくるまされた子ども」から別のあなたになってしまし、「世界との和合も破れて……そのときから世界はあなたの他者、悪意の執行吏であるあの他者となった……」(九七頁)。そういった描写から、初潮が女になることを意味していることが明らかにになる。

また、倉橋の女主人公たちは冷感症か、または性の快楽から無縁の人物として造形されている傾向がある。デビュー作の「パルタイ」では、「わたし」が始終周囲の環境や人物ないし自分自身に冷静な眼差しを向けている。《労働者》との性交渉の場面では、「わたし」は明晰な意識を保ちながら、その性交渉を「《種》を異にする動物同士が偶然に出会い、その場で交わりでもしたような遠々しさのためにいらした」とまるで他人事のように観察し、

「《労働者》がわたしのなかにあっても依然として異物であり」、「わたしは傷ついたというよりも極度におしひらかれ、不愉快だった」（二七頁）と快楽を排除した性交渉を体験していることを明示している。

「パルタイ」以降の一連の作品では、女主人公たちが性交渉に積極的な協力を見せるが、本番となると、止まらない痙攣を起こす傾向が見られる。例えば、「婚約」では、「Kは急にむきなおるとF・Bの首をかかえ、顔中にキスを浴びせた。F・Bもキスをかえそうと焦っていたが、のどどところに笑いの塊がつかえてひくひく痙攣するのでどうにもならないよすだった。とうとうF・Bはけたたましくふきだした」（一五五頁）と描かれる。「結婚」では、「KはSになってLを抱いたが、腕のなかで非常に弱いさざなみがおこり、次第に振幅をます痙攣となつて、Kがどんなに力をこめてもとまらなかつた。Lは頸をのけぞらせ、Kは一瞬Lの口で死よりも黒い舌がはためくのをみたような気がした。ボクガ抱イテイルノハオソルベキ笑イノ爆薬ノツマツタ袋デハナイカ？たちまち猛烈な爆発がおこつた。Kはこの永久につづきそうな笑いの発作をとめる手段を知らなかつた」（七〇頁）と書かれる。「暗い旅」では、前述した性の快楽から無縁の女主人公のイメージを一転させ、「あなたは勤行僧のような苛酷さで相手の肉を食べあつた」（一一二頁）と色情狂で快楽を貪る「あなた」が造形されるが、それはポーヴォワールとサルトルの関係を真似て、手本を取つたうえで必要とされたからと考えられる。

「妖女のように」では、「あたしだってほんとはそんなに悪人ではないんだから、あなたを夢中にしてあげたいのよ。ところがあなたの掌で撫でられたりまるめられたりやさしい息をふきかけられたりすると、とたんにくすぐつたくてたまらなくなるのよ」（二一六頁）という文言から、痙攣を起こす傾向が「妖女のように」にも受け継がれていることが分かる。そして、「まかりまちがえればあなたは色情狂になる女だが、少なくともいまはちがうね。たしかにあんたはひと皮むけば、男をこけし形の道具そのものとして使つてやろうというつらぐまえをかくしてるよ。でもいまのところはセックス嫌悪の精神的包皮をかぶつてるから、まずこいつを剥ぎとらなきゃいけない」（二二〇頁）という従兄弟の口説きの文言や「包茎的ヴァギナ欠損症」「頑固な精神的処女性」といった挑発的な言葉から見れば、おそらく「わたし」は冷感症を抱えているのだろう。倉橋の前期文学を全体的に見れば、冷感症の二つの大きな特徴が見られる。一つ目には、性欲が欠乏し、行為を欲しないにもかかわらず、相手を理解するなどを理由に、性行為を許すが、性行為に冷静な視線を向け、性交経験を重ねる毎に忌み嫌う。二つ目には、性的刺激に全く快感を感じないどころか、笑いか痙攣が止まらない。倉橋の女主人公たちはそういった冷感症のニュアンスを漂わせている点におい

て共通している。彼女らにとっての性は、快樂とは無縁のものである。

性行為において、男は「凸型の、充実した肉の柱」即ち「エゴの強大なファロス」の持ち主であり、それに対して、女というのは凹型の存在、自分自身を押し広げて男を包み愛する型の存在であり受け身である。生物学の相違は性交渉における男女の立ち位置を決定する。男性は性行為を通じて、女を他者化したうえで、征服する手段の一つに挙げられ、即ち性行為は男性が世界を征服する一環として成り立つ。「パルタイ」では、《労働者》に結婚を申し込まれた時、「わたし」は「《所帯》をもちたいなどという表現」に戸惑いを覚え、「子どもを生むことができる、しかしわたしはそうするつもりはなく、処分しようとおもっている」(三三頁)ときっぱり断る。換言すれば、「わたし」は妊娠、出産などの生物学の相違即ち肉体的には女性であることを認めるが、社会の求める性的役割即ち生殖の性としての女性になることを拒否している。性行為を拒否しないが、性的に快樂を感じないか、触られると笑いか痙攣が止まらないとは、セックス(肉体上の性)において女性という分類を引き受けたが、ジェンダー(性的役割)において女性を引き受けようとしなない証拠となる。精神的に受け容れようと決めても、身体が拒否反応を起こす。

男性化した女性、同性愛やサディズム・マゾヒズム、聖女にして娼婦といった性的倒錯に生きる女たちの造形はそういった反感を呼ぶ身体表現、生理表象、快樂とは無縁の性交渉については冷感症などにその深層的原因を求めることができると考えられる。そして、そういった主人公の造形は、いずれも倉橋の女性性という記号への認識と関わり合っていると考えられる。倉橋はエッセイにおいて、女であることに対する居心地の悪さを全面に出している。例えば、「性と文学」(一九六四)において、「いつからか、わたしはほんとうに存在しているのではないかもしれないという不安にとりつかれました。女でありながら女であることにも居心地のわるさを感じるのです。そしてわたしをとりかこむ他人たちがこわくなりました。なぜかかれらは正しく、わたしは贗物めいているのか？なんとかして本物の存在に近づこうとするのに、いつかほんとにそんざいするようになるだろうとは信じられないのです」⁹²と述べており、女であることに対する不安と嫌悪を赤裸々に描写している。

倉橋の女主人公たちは因習的な性の役割分業に対抗し、ジェンダー規範の外側で生きていくことを自ら選択し、男性至上主義に進んで屈服することを拒んだ。その解決法として思い浮かんだのは、女を演じることである。「暗い旅」で述べられるように、「おそらく、負けるが勝ちという原則こそ、もつとも狡猾な戦略でありうるだろう、そこであなたは呪文のように入った、あたしは女だわ、あたしは女になろう……つまり女であることを演じなければならぬのだ、とあなたはおもった、それでいい、それ以外にあなたの復讐と解放はないの

だ……あなたは微笑を浮かべた」（『暗い旅』一〇一頁）と解決法に女を演じることを挙げて
いる。それは倉橋が「わたしの『第三の性』」のなかで、新しい女性の生き方として提示し
た「第三の性」と一致していると考えられる。

無論、この生きかたは女がその性を脱ぎすてて第一の性に復帰することを意味するもの
ではない。女はみずからをいわば第三の性につくりかえるのだ。女は男によつて女として
客体化されたことをひきうけたうえでしかもみずからを別のものにつくること。だから、
これは、女が第二の性という立場を拒否して第一の性と抗争することではなく、むしろ第
二の性としての立場を利用しながら第三の立場に移行していくことを意味する。すくな
くともこれは世界からおしつけられた性の符号を――剥ぎとるのではないが――価値の正負
の符号でなくするための遠く長いみちに通じるものである。⁹⁹

倉橋の女主人公たちは単に被抑圧者として支配的な男性社会に挑戦したのではなく、む
しろ自己を男性と同じ立場に位置させ、自らの生きる道を「選択」する確固たる意志を持ち、
男性たちと共存することを選んだ女性たちであった。この女性たちは、『女というイデオ
ロギー』の言葉を借りれば、「へ男」の対極の存在としてのへ女」ではなく、へ男」という論理自
体を崩し、包み込み、溶かしてしまふ存在としてのへ女」⁹⁹として理解されるべきだろう。

- 43 上野千鶴子『女という快樂』勁草書房、一九八六年一月、二五〇～二五一頁
- 44 平野謙「文芸時評」『毎日新聞』（東京朝刊）、一九六〇年五月二八日 七頁
- 45 江藤淳「寓話と道徳―文藝時評―」一四（七）、一九六〇年七月、一七五頁
- 46 永岡定夫「若手作家を斬るその（二）倉橋由美子論」一九七〇年一〇月二日、四頁
- 47 安藤秀国「倉橋由美子の初期作品におけるカフカ受容」『愛媛大学法文学部論集』（人文学科編）二三号、二〇〇七年九月、二七頁
- 48 フロイド『続精神分析入門』古澤平作訳、日本教文社、一九六九年六月、一七五頁
- 49 中山和子「批評の荒野 1960―「パルタイ」から「囚人」まで―」『昭和文学研究』三九号、一九九九年九月五九頁
- 50 前掲書、アト・ド・フリス『イメージ・シンボル事典』五六二頁
- 51 前掲論、永岡定夫「若手作家を斬るその（二）倉橋由美子論」一九七〇年一〇月二日、四頁
- 52 前掲書、上野千鶴子『女という快樂』勁草書房、一九八六年一月、二五〇頁
- 53 小谷野敦『恋愛の昭和史』文藝春秋、二〇〇八年三月、二三一頁
- 54 倉橋由美子「わたしの文学と政治」『わたしのなかのかれへ』四一頁
- 55 倉橋由美子「作品ノート」『倉橋由美子全作品1 パルタイ・雑人撲滅週間』新潮社、二七〇頁
- 56 前掲書、上野千鶴子『女という快樂』二五七頁
- 57 上野千鶴子『女ざらい―ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店、二〇一〇年一〇月、四二頁
- 58 倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』二七頁
- 59 サイド『オリエンタリズム』平凡社、一九八六年一〇月
- 60 前掲書、上野千鶴子『女ざらい―ニッポンのミソジニー』四四頁
- 61 倉橋由美子「インセストについて」（初出『話の特集』二号、日本社、一九六六年三月）『わたしのなかのかれへ』二五五頁
- 62 前掲書、上野千鶴子『女ざらい―ニッポンのミソジニー』四七頁
- 63 小倉千加子『セクシュアリティの心理学』有斐閣、二〇〇一年五月、三頁
- 64 倉橋由美子「性と文学」（初出「性と文学 私の立場①密室の中で見る悪夢 紙の上の毒虫のような私」『読売新聞』（夕刊、一九六四年三月三〇日、九頁）『わたしのなかのかれへ』新潮社、一四九～一五〇頁

倉橋由美子 「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』三〇頁

海老根静江、竹村和子 『女というイデオロギー— アメリカ文学を検証する』南雲堂、一九九九年二月、一九六頁

第三章 男性化願望の挫折と結婚

倉橋由美子の結婚に対する認識の変化を読解するには、昭和三十年代の前後の作品が重要であると考えられる。テキストは、『妖女のように』『結婚』『ヴァージニア』である。この三つの作品は昭和四十年代という時代を共有している。そしてそれぞれ結婚が重要なモチーフとなっている作品である。さらにこれらの女主人公はそろって女性にして作家業をやっている。本論文では、これらの作品における女主人公を中心に、彼女たちの立場を当時の日本における恋愛をめぐる具体的な言説の中に位置づけて考察し、恋愛・結婚に対する態度を明らかにしたい。

第一節 「パルタイ」「婚約」「暗い旅」における結婚反対論者としての闘士

倉橋は「ある破壊的な夢想」（一九六三）において、「わたしは、インポテントな社会主義者や「人民」には絶対に実現できない、結婚の廃止、家庭の分解、愛という名の人間接着剤の追放、そして完全な無差別成功のユートピアをしめしてみたいとおもいます。ただしそれは劣弱な人間にたいする「社会保障」のない世界であり、人間はたがい他人にたいして「商品」以外のなものでもない世界です」²³と述べており、結婚や家庭への嫌悪感や反感が読み取れる。そして、「全作品」に付された「作品ノート」において、「最近では女の方にこの種思想、信念を掲げて世間並みの結婚に反対する「闘士」が目立つ」²⁴と述べている。倉橋の前期作品には、そういった「奇想、珍想の類」の考え方を持つ結婚反対論者が目立っている。

倉橋は一九六〇年一月に『明治大学新聞』に「パルタイ」を発表し、当時の選者である平野謙に「以前大江健三郎の処女作を『東大新聞』にみつけたときに似た興奮を、わたしはおぼえた」と賞賛され、華々しいデビューを果たした。「パルタイ」では、女子大生である「わたし」がパルタイから離脱するまでの経緯が描かれる。「わたし」はパルタイに入る手続きをしながら、『労働者』と理解しあい、かれらの現実のなかから、生きたエネルギーを汲み上げるため、『学習サークル』のチューターとしても働いているが、『学習サークル』に来る『労働者』に「未知の動物に感じるような興味」を感じ始め、性関係を持つようになる。

「手足の関節が太く、ガニ股で歩き、皮膚は黒くて熱」くて、そして「具体的なことしか話さ」ずに、「その実体はあの単純で具体的な生活だけだ」（二六頁）と具象化された『労働者』のイメージには、女性の心をつかむ魅力的な要素は一つもない。しかし、「わたし」が『労働者』興味を感じ、性関係まで踏み込むのはなぜだろう。しかも『労働者』と寝た時に

疎外感を感じ、「種」を異にする動物同士が偶然に出会い、その場で交わりでもしたような遠々しさのために「いらいらした体験は決して愉快なものではなかった。それにも関わらず、「労働者」がそれを望むなら、わたしは今後いつでも応じることができると、わたしもそれを望んでいたとおもう」（三五頁）。また、「わたし」が妊娠の事実を「あなた」にうちあけ、「あなたをあいいしているのではなく、『労働者』をも、Sをも、また、パルタイをもけつして「あいいしているのではない」ということを述べる。そういった点を考慮すると、『労働者』と関係を持ったのは、愛情からでなくて、「いつか『労働者』と理解できるかもしれないという希望」（二七頁）に駆られたからと考えられる。

『労働者』と数回、関係を持った後、「わたし」は妊娠してしまう。その事実がSに見抜かれ、相手を詰問され、「息がつまり、恥をのみくだそうとして眼を白黒させ醜い顔を」（三〇頁）し、恥ずかしい思いをする。その後『S石油』の『組合調査』で『労働者』に遭遇したとき、『労働者』は「わたし」のことが忘れられないと告白し、結婚話まで持ち出す。「わたし」が『所帯』をもちたいなどという表現に戸惑いを覚えた様子を見て、「子どもがほしいのだ」と付け加える。「わたし」は「子どもは生むことができる、しかしわたしはそうするつもりはなく、処分しよう」（三三頁）ときっぱり断る。

また「婚約」は一九六〇年『新潮』の八月号に掲載された、KとF・Bの婚約話をめぐる不条理な物語である。倉橋の末尾の断り書きにあるように、「婚約」はカフカをモデルにした小説であり、カフカの伝記的事実と思われるエピソードが数多く挿入されている。カフカと思われる主人公Kは世間からはみ出された人間でありながら、そういった「存在のゼロ地点に流刑されている状況」を逆手にとり、書くための条件とする小説家である。しかし、Kは「眼をあけたまま現実を夢みる」という小説書きの生活に満足しながらも、「正常なみちすじをたどって、つまり結婚して子どもをつくり、家庭を築くという事業を完成すること」によって、実生活で世間なみの安定した存在の獲得を狙おうとする。「世間のむこうがわにいてかく」「世間のこちらがわにいて生活する」という一見矛盾に充ちた生活を夢見るKに、持ち込まれたF・Bとの婚約話はまたとないチャンスとなる。

婚約話でひたすら「愛する」ことを要求してくるKと正反対に、「あいいするなんて、ちつても本質的な要因ではありません。あなたがおっしゃるように、わたしは世間というものゝ代表なんだし、その資格にともなう機能はまちがいなくはたしてあげますわ」という一節に示されるように、F・Bは愛を結婚の必須条件とせず、結婚して家庭を持つことによって世間にもぐり込むことを狙うKを満足させるのと引き換えに、保証金の交換、親戚の挨拶まわりなど正式の、公的な手続きのほか、食べ物や洋服など些細な事柄に至るまで条件を出し

てくる。制度としての結婚について、男女間の愛情が不可欠とされている世の中の建前を一蹴するような、風刺性の高い作品である。

- ① 下女代わりの仕事をする。しかし、自分に命令してはいけない。いやな仕事は断る。
- ② 寝室をともにするばあいは、一回につきいくら割合で金をもらおう。けれど、ひとりでないどぐつすり眠れないから、同じベッドでは寝ない。
- ③ 服やストッキングや下着などは今着ていると同じ程度のもを買い換えること。
- ④ 食事は下女なみでいいが、毎食肉。爬虫類以外の肉。野菜や果物類は食べない代わりに、酒を一日0、6リットル飲む。
- ⑤ 外出の自由。恋愛の自由。

以上挙げた契約結婚の条件から見れば、結婚しても今まで通りの生活のクオリティを保ち、結婚に束縛されることなく、自分らしく悠々自適の生活を送りたいF・Bの姿が読み取れる。女性は結婚して、夫に養わせているため、経済的にも精神的にも家庭内に束縛されがちであるが、F・Bはそういった一般の結婚とは異なった、自由を確保した平等契約の上になり立つ結婚の理想の姿を描き出している。これは契約者双方の合意の上になり立つた契約のため、双方にとって申し分のないものはずである。しかし、Kが首を切られたことにより、保証金の履行が結婚の大きな壁となり、F・Bの妊娠の知らせが届くまで結婚話はずると伸ばされる。Kは家に閉じこもったまま、書く衝動に駆られ、小説を書かざることさえなかったと言い訳するが、一見合理的に見える言い訳の裏には、結婚の一步前で踏みとどまり、結婚に踏み出す勇気が持てないKの揺れ動く心が見え隠れする。

「ぼくはあなたと結婚してそれを実現したいとねがっていますが、自分でもほとんど信じられないほどですよ。じっさい結婚は人生最大の恐怖なんです」（二五五頁）というKの告白から、かれの心裏に結婚への憧れがある一方、結婚への恐怖も潜んでいることが読み取れる。こういった心裏に潜むアンヴィヴァレンスこそ、Kを優柔不断で矛盾に満ちた人間にする。読者側に言わせれば、弱いKは決して反感を買うような人間でない。この点から、「婚約」は倉橋がカフカへの愛着に充ち満ちた作品と言っても差し支えないだろう。倉橋がのち、全作品が出版された際に自作解説を付し、「この小説は小説の形をとったカフカに対する批評であるでも解するほかない代物であって、それが成功した批評になっていないのは、当時の私が人生と文学とに対するカフカ流の曖昧な態度を批評するだけの力がなくて、むしろそれに共感を覚えていたからである」⁸²と書いている。婚約話の展開が物語の中核を据えるが、Kの結婚に対する曖昧な態度という点においても、倉橋が共感を覚えたと考えられる。言い換えれば、この時期における倉橋作品の女主人公は結婚を視野に入れて考えようとする

るが、その裏に結婚への恐怖が依然として潜んでいる。彼女たちはKのように結婚への恐怖と戦いながら、婚約の手続きを開始しようとするが、結局結婚への恐怖には勝てず、結婚は思い通りの大きな転機とはならない。

「暗い旅」は「かれ」を探す物語であるが、主に「あなた」と「かれ」との関係をめぐる展開されている。「あなたがた」の関係は、結婚という形に拘らず、各自の自立と自由を確保するうえで、互いに愛し合うというものである。そのための規則として、互いに愛人を作っても嫉妬してはいけないこと、愛人との関係をも含め、一切隠し事をしないことなどがある。そうした開かれた恋人関係はポリアモリーという結婚の新たなトレンド、ボーヴォワールとサルトルとの契約結婚、そして大正時代の大杉栄の同時複数恋愛を連想させる。

アナキストとしてよく知られる大杉栄は自由恋愛論者で、居候中に堺利彦の義妹堀保子と結婚するが入籍せず、才媛として知られる東京日日新聞の記者神近市子に続き、平塚らいてうから『青鞥』の後継者と目された伊藤野枝とも愛人関係となる。大杉は「お互いに経済上独立すること、同棲しないで別居の生活を送ること、お互いの自由(性的のすらも)を尊重すること」という三条件からなる同時複数恋愛思想を市子に提案し実践していた。しかし、市子は大杉に経済的に援助し尽くしていたが、大杉が野江に愛情が移ったことでショックを受け、大正五年(一九一六年)一月九日、神奈川県の日陰茶屋で、大杉を刺したいいわゆる日陰茶屋事件を起こし、世間を騒がせた。

新しい結婚の形式として提示されるオープンマリッジとは、一般的に、夫婦間以外の性的な関係に対して、相互の合意の下に開かれている結婚の形であり、性の革命の時代である一九七〇年代に多く試みられた。一九七二年、アメリカ合衆国の社会学者ジョンとニーナのオニール夫妻によって、夫婦が所有欲、独占欲、嫉妬心に妨げられず、自由に愛人を作れる、社会的、性的に独立した個人を認め合う結婚のスタイルを提唱した『オープンマリッジ』が書かれ、出版された。人間の自然的性向は複婚的であるとして、これを抑圧する一夫一婦制を批判した。しかし彼らは、モノガミイを解体せずに、ポリガマスな性向との両立を図ろうとした。彼らが提言したのは、婚外性関係を容認しあう開放的結婚(オープン・マリッジ)である。この本は一五〇万部以上売れ、文化に大きな影響を与えた。十年後、賞賛されたジャーナリストのゲイ・テリーズが「汝の隣人の妻」を著した。それは、性革命とエイズ渦の間の、アメリカの性的道德規範を実験的に捉えたものだった。二〇〇六年オックスフォード英語大辞典に新たに加わった「ポリアモリー」とは、夫婦やカップルがそれぞれの了承で特定のパートナーを一人に限定しない関係のことを指す。決してフリーセックスや浮気が目的ではなく、複数の相手を同時に親密な恋愛関係を築く形態をいう。

「あなたがた」は「けっして結婚しないことを誓い合った共犯者」や「一種の共犯関係としての愛」など、「共犯」という言葉が繰り返し使われる。さらに「あなたがた」は「結婚して子どもを生み家庭をつくる意志をもたないことにかんしては、完全な一致に達して」（四七頁）おり、また「自由に他の男や女をあいすること、ただし完全な了解のうえで、嫉妬なしに……この条件を守るとはあなたがたにとってなによりも必要なことだった」（五一頁）と描かれる。他の異性ととの関係を認めるのは、二人のあいだにある愛こそ真の愛であると信じ、他の異性と関係を持つことを「セクスの遊戯」とするからである。そして「かれとあなたが婚約したところからだった、あなたがたのあいだにひとつの合言葉が生まれたのは。それは『サルトルとボーヴォワール』という合言葉だった、恥ずかしいのであなたがたはそれを人まえで口にするにはなかったけれども……」と述べられたところを考慮すると、「あなたがた」の関係はボーヴォワールとサルトルの関係をモデルにして出来上がった関係だと考えられる。

ボーヴォワールは一九二九年にサルトルと出会い、互いに愛し合いながらも、他の関係も認め合う自由恋愛というサルトルの提案を受け入れた。その契約には「ぼくたちの恋は必然的なものだ。だが、偶然の恋も知る必要があるよ」という付帯事項に、「お互いに嘘をつかないという以外に、互いに隠してはしない」という「誠実事項」も付けられた。情事を告げ合う危険な関係であるにもかかわらず、二人は事実上の夫婦として公私にわたり影響を与え合った。当初は正式な結婚も同居もしない二年の契約だったが、かれらの結婚形式にこだわらぬ恋が半世紀以上も続いた。しかし、ボーヴォワールとサルトルとは違い、「あなたがた」は「婚約という関係にくるま」り、周りにそのうち結婚するという錯覚を与え、「犯罪者風の微笑」を浮かべる「共犯者」同士と設定されている。

世間ではどんな女でも皮膚の一部として結婚の観念を着ており、結婚して子どもを生み家庭をつくるという道が当たり前のように思われるが、倉橋はエッセイにおいて、結婚を拒否することを繰り返し語っている。たとえば、終戦後、倉橋は戦争を振り返ったとき、結婚について以下のように書いている。

あの神話的な子供の日々を戦争の時代にすごしてきたわたしは、楽しいかくれんぼに似た疎開や防空壕での遊びが終わり、世の中と大人たちの生活とが次第に堅固さをとりもどしていくにつれて、自分が女であることを知り、とまどいをおぼえはじめたものでした。結婚して子供を生み、家庭をつくるという生活をやがて自分もするかしらと思うと、私はほとんど気が遠くなりそうでした。そんな生活は、わたしの未来ではなくて、ひとのもの

であるかのように思われたのです。²³

結婚は女を家庭に入れることによって男のこの所有、捕獲した女の自由を社会的なタガで固定するものとなる。だから、家庭、この一種の反世界あるいは男の社会にある穴は、男にとつては休息の場所であり一家団欒の場であるが、女にとつては檻であり巢であることにすぎないのだ。結婚して家庭にはいった女には、世界にむかつて投企する自由はすでない。(中略) 社会的存在としては夫の妻として、もっぱら夫の地位に結び付けられその装飾的役割をはたす。²⁴

「パルタイ」で結婚をきっぱり断る「わたし」とは違い、「婚約」と「暗い旅」では結婚関係に必死で縋りつこうとする女主人公の姿が見られる。しかし結婚が最大の恐怖であるにも関わらず婚約を通して世間の入場券を手に入れようするKにしろ、婚約関係に包まっ世間の目を盗んで独身を歩みとおす、新しい愛の形として提示された「契約結婚」にしろ、一見結婚への認識が変わって結婚を認めるようになったと思えるが、実際には、「パルタイ」の「わたし」と同じようにその底流には非婚主義が依然として流れている。

第二節 「結婚」「妖女のように」「ヴァージニア」における見合い結婚

恋愛と結婚は別ものであるというモチーフは「結婚」にも反復される。結婚は恋愛の上になされるべきであると唱えられてきた恋愛結婚のイデオロギーに反し、「結婚」におけるLとSの結婚は愛を前提に成り立つ結婚ではない。結婚を愛から分離させ、恋愛とは別物であると見なし、Sの経済力のみを前提にして結婚が成り立っている。Sに養ってもらう代わりに、Lは家事および性行為を提供し、いわゆるハウスキーパーや知的なホステスとしての才能を発揮することが期待される。すなわち結婚は「give and take」というルールに基づいている。この点はLの発言にも裏打ちされる。

Sさんにとってこの結婚が、このLを利用してある目的を達成することであったように、LにとつてもSさんとの結婚は、Lの飼主をみつけて働かずに生きることが目的だったのです。つまり結婚ということが目的だったので、Sさんという男が目的だったわけではありません。(六四頁)

二卵性双生児のKに結婚を報告したとき、結婚相手のSを「広報局に勤めている三十歳の

男」「純度90パーセント以上のSよ」と述べる。LとKは男を「第一種、第二種の二つに分類して、それぞれをKおよびSとよんでい」た。そして、二人で議論を展開している間、「社会……制度……組織……政治……左翼……先生……正義……思想……信仰……」といった抽象的な表現によってイメージが固められたSの輪郭が徐々に浮かびあがってきた。倉橋は「パルタイ」をはじめとする初期作品において、「制度」「革命」「労働者」などの名詞を「自分では無条件には使えない特別の言葉」とし、使うたびに「《》に入れて剝製にした」⁷⁵のである。それとは反対に、Sはこういった専用名詞に武装されている人間、すなわちこういった専用名詞の塊ともなる。倉橋は「ヴァージニア」において、主人公ユミコの口を通して、小説の主人公をしばしばK、L、S、Mといった記号であらわすことの意味合いを以下のように述べている。

Kは小説をdevelopするための独立変数で、そのmentalityからいえばカフカの小説のKに照応しているタイプの男である。LはKと精神上的の双生児である女をあらわす。(中略) Sはなによりもsocial animalでsquareで、しかもノーマン・メイラーのようにself-advertisementの本能をもった男で、これらの意味をこめてSなのだ、とわたしは説明する。最後に、MはこのSにふさわしい女、Sを愛するような女。⁷⁶

Sとは「ユミコ」が定義しているように、「social animal」「square」「self-advertisement」という三つのSを特徴とする種類の人間であり、言い換えれば自己宣伝を得意とする旧式の社会性動物である。旧式とは時代遅れで、「男は外、女は内」といった古い考え方の持ち主、すなわち男尊女卑の古い思想に毒されている種類の人間と考えられる。Kに代表された、精神の「ユートピア」に憧れるK族と違い、こういった人間たちは実用的で、経済的に余裕を持っている。Lは結婚相手にS型人間を選んだ理由は、まさにS族の経済的な余裕を狙っていると思われる。この点は、「ユミコ」が結婚についてヴァージニアに説明する場面からも窺い知ることができる。

愛しあったので結婚するということも最近の日本では大いにいわれています。でもそれはそういう考えかたが流行しているだけで、とくに女性の場合、ほんとうの目的は別のところにあることは彼女たちもよく心得ています。結婚は、だから日本の女性にとって《永
久就職》(getting a lifelong job)なのです。(二二二頁)

結婚とは「give and take」であるという考え方は他の作品にも繰り返して登場している。「妖女のように」では、主人公の「わたし」は「女の身で小説を書いて金に換えている人間である。結婚してすでに数年になるが、子どもは作らず、まずい小説をつくり、月のなかばを仕事のためと称してT O K Y Oですごし、あとのなかばをK Y O T Oの夫の家ですごし、半分だけの妻と半分だけの小説書きとを演じてまもなく三十歳を迎えようとしていた」(一二二頁)。小説を書く女、語り手の言葉を借りれば、「化物」即ち「妖女」である「わたし」は、家庭を刑務所と例えるほど、結婚を嫌がっていたが、なぜ見合い結婚を通じて、自ら家庭という牢獄に入ったのだろうか。「わたし」を小説書きという道に招き入れたとも言える。「おじさま」との会話の中からその理由を求めることができる。

「女が小説を書く。これは化物の仕事だ。女の化物。これを妖女という」

「でも化物が化物のままですべて書けなくなったらどうしますか？」

「死んでしまうんだな。さっさとくたばってぼくのところへおいで。お湯をわかしてまってるよ。あのときとおなじように足を洗ってあげよう」

「あたしがくたばるのがこわさに、結婚や食事や洗濯の毎日のなかに逃げこむ算段をしてたんです。じつはそのために、手まわしよく結婚しておいたんです」

「引退した化物か。しかしきみはいまや妖女に化けてしまって、妖のとれたただの女にはかえれないとしたら、行き場がないじゃないか」

「だから世界のなかの糞虫になっているんです。ひとめをたぶらかして。でも、おじさま、あたし、苦しい。どうしていいかわからない。どうにかして。われを忘れさせて」

「もうひとつの糞をさがしてもぐりこむ。だがこんな冒険はちゃんちゃらおかしいな。妖女はやっぱり化物のみちを行くか」

「出口はおじさましかありません」(二四八頁)

適齢期を超えた女が結婚せずに、働くことに存在意義を求めるとは、現代でも負け犬と蔑まれるが、女が結婚して、子供を育て、夫を立てることが当たり前のように思われた時代では、どれほどバッシングを受けていたかは想像に難くない。「わたし」に対して「イツ式ヲ？」と尋ねたり、「オクサン、オメダタダソウデ」と言ったりなどした嫌がらせは日常茶飯事のように繰り返され、母には「イヤラシイセックスノコトバカリ」書いていると非難される。

「子どもを生んで育てて家庭を築く。家庭の幸福。日々の平安。あつまらない。あくびがでちゃう」と家庭生活を嫌がっていたが、家庭生活より、小説が書けなくなり、くたばる

のが怖さに、「結婚や食事や洗濯の毎日のなかに逃げ込む算段」をして、「手まわしよく結婚しておいたんです」(二四八頁)と告白する。「おじさまだけを愛しました。そして、それで、あたしの愛は終わりです。もう男のひとを愛することができない女になりました。女ではなくなりました。そのときから、あたしのそのかけおちた女の部分に第三の眼がひらいて、第三の腕が生えて、書きはじめたようにおもいます」(二四八頁)と小説書きになるまでの経緯が述べられる。「おじさま」への愛が死滅してから、誰もを愛することができなくなる人間に変わった時点で、第三の眼と第三の腕が生え、小説を書き始める。語り手の言葉を借りれば、小説を書く女は女の化物即ち「妖女」となったわけである。しかし、小説を書くことで食べていくことはきわめて困難である。限界を感じ始めた「わたし」は冒険し、人目をたぶらかして結婚という藪を探し出し潜り込んだ。

この冒険話は「きみが結婚という制度に潜り込んだのは通行手形を手に入れることだけが狙いだった。しかし本心ではこの制度を屁ともおもつちやいない。食うためにみずから留置所に入ってきたようなものだね。ぼくがその看守か。きみにメシを食わせた上にきみの安穩を保証している看守に過ぎない」(二一六頁)という夫の文句からも裏打ちされる。そして、夫に無許可で帰省した際、かかってきた電話で「ちようど夏休み、よろしかったらあなたもいらつしやったら？」と夫を誘うが、「ぼくの計数工学じゃ、まるで役にたたないし、まあ、遠慮させてもらおう」(二二三頁)と断られる。「夏休み」や「計数工学」を考慮すると、夫はおそらく学校の先生と考えても差し支えないだろう。経済的に恵まれているから、あるいは最低限不自由をしていないからこそ、「夫がわたしが小説を書いていることを大目に見」ていられるだろう。即ちその夫も結婚にむいているS型人間に違いない。

こうして、倉橋が婚約や結婚をテーマに掲げる作品では、「give and take」というルールに基づいて成り立った結婚はパターン化されていることが分かる。そして、結婚の相手がきまって典型的なS型人間であり、そのなかで妻を養えるだけの経済力が一番重要視される。その代わりに妻が家事全般をやりくりする。言い換えれば、家事全般をやりくりする報酬として夫が働いた金で食べていく。倉橋の女主人公たちが進んで選んだのは結婚であって、結婚生活において自分を養ってくれるS型人間であって、夫自身ではないということが分かる。

倉橋は「愛と結婚に関する六つの手紙」において、結婚と愛と性の関係を以下のように纏めている。

さて、わたしの貧弱な実感は、結婚と性と愛と、これら三つが性を底辺とする美しい二等

辺三角形をつくることを理想状態と考える常識とは、ややちがっています。性と愛とはひとつのものです。それは結婚という器にははiriきらないものだというのがわたしの考えなのです。結婚とは、人間の社会生活の細胞をつくる方法でありしきたりではないでしょうか？性もまた、この結婚によってごちんまりした家庭生活の一部となります。結婚の問題は、なによりも「生活」の問題です。それはかならずしも「愛」を条件とはしません。あるいは、愛がありさえすればその果実として出てくるというものでもありません。結婚は愛の死滅のあとにはじまる共同生活であり、ここで必要なものはや愛ではなく、人間としての聡明さや妥協の技術なのです。結婚しようと考えていらっしやるかたは、その目的にふさわしい手段をもとめるべきですし、それには男性が自分の職業を選ぶのとおなじように、計算も慎重さも必要となってくるでしょう。¹⁾

倉橋は結婚と性と愛と、これら三つが性を底辺とする美しい二等辺三角形をつくることを理想状態と考える常識や「恋愛結婚」に異議を申し立て、結婚にとって必要なのは愛ではなく、「人間としての聡明さや妥協の技術」なのだと言っている。一般的に男女が愛しあい、最後にたどり着く唯一のものとして結婚が提示されるが、倉橋の女主人公たちは、その既成観念を否定し、結婚と愛とを厳密に区別させ、混同せずにそれぞれ別個のものとして扱うべきと提唱している。

倉橋の女主人公たちは食べていくためにみずから結婚生活という留置所に入るが、新婚生活ではことあるごとに不協和音を発する。一番顕著な矛盾として性行為ができないことが挙げられる。「妖女のように」では、「わたし」が夫に抱かれると、笑がもれたり、痙攣を起こしたりして、性交渉がうまくいかない。そして、夫に文句を言われると、「セックスが結婚生活の重要な部分だとあたし、おもわない。それは結婚生活とは別のことだわ」、「ヘルニアみたいにはみでたもの。結婚生活というごちんまりした檻のなかにセックスの怪物を飼うことはできないわ。世間のひとがうまく飼いならしたとおもっているセックスはにせもので、そんなもの、昼ハ貞淑ナル妻ニシテ夜ハ娼婦タルベシといったぐいの通俗的な演技にすぎないわ。その演技のこっけいさときたら……おかしくってあたしにはできそうもない」(二二六頁)と反撃し、「婚約」などにあるように、性的相手を務めることを結婚する義務として自ら課する女主人公のイメージを一転させ、性交渉を結婚の一部分であるという考え方を覆して、性を結婚から分離させた存在であると主張する。そして、結婚と愛の関係について、「わたし」が「おじさま」に、「おじさま」への愛が死滅してから、自分が男の人を愛する能力を失い、「その虧けおちた女の部分に第三の眼がひらいて、第三の腕が生え

て、書きはじめ」(二四八頁)たと告白した所から見れば、「わたし」の結婚も愛をベースにして成り立ったものでないことが読み取れる。「結婚は愛の死滅のあとにはじまる共同生活」であるという倉橋の言葉とも合致している。

「結婚」では、Sは「Lの女の部分に属する才能、ハウスキーパーの才能、広報局幹部Sの夫人としての、ホステスとしての才能」に一目を置くものの、Lの養つてくれるという希望をかなえる代価として、「Lの男の部分に属する小説書きの才能」を蔑視し、作家という「賤業」をやめさせる。こうして、二人にとって結婚は各自の目的を達成させるための条件交換でしかならず、自分に有利な条件を並べ、互いに得する契約のように見えるが、果たして公平なのだろうか。LはSの結婚条件を呑んで、作家の仕事を辞め、家事などに専念する専業主婦になった。即ち、Sは結婚を通して、Lの中の男の部分の小説執筆(社会性)を抹殺し、その女の部分のハウスキーパー(家庭性)だけを求めている。換言すれば、家庭という枠組を作ることによって、女を社会から家庭という小さな枠内に収めようとしている。そして、不倫関係にあったMに「おとなというものは、いろんな理由から結婚するものさ、愛なんかなくても」(二三八頁)と言い聞かせ、自分の結婚に愛が関与していないと明言した。しかし、Sが失職し、Lを養える経済力を失ったとたんに、Lが愛とは関係ないという主張に見聞きもせず、Lにもつばら愛を求めるようになる。その一転した行為からS即ちSが代表している男たちのエゴイズムが浮き彫りにされる。

第三節 精神的な恋愛観と現実的な恋愛観の狭間

上野千鶴子は『女という快樂』において、「近代家庭制度を支える恋愛結婚イデオロギーは恋愛Ⅱ性Ⅱ結婚の三位一体をとなえた」と述べている。近代的恋愛観とそれに基づく家庭という概念は大正期になってから広く普及したが、大正期の恋愛観と言えば、『青鞥』(一九一一年九月から一九一六年二月まで五二冊発行された、女性による月刊誌である。「文学史的にはさほどの役割は果たさなかったが、婦人問題を世に印象づけた意義は大きい」²⁶の「母性保護論争」と厨川白村の恋愛論を避けては通れない。『青鞥』の主要な論争は「貞操論争」「墮胎論争」「娼娼論争」であるが、各論争の中に恋愛結婚への志向と提唱が見られる。また『青鞥』後に起こった「母性保護論争」は女性の経済的な独立と母性についての論争であるが、一九一八年から一九一九年にわたって論じられた。主要な論者として、与謝野晶子、平塚らいてう、山田わか、山川菊英らがいた。晶子は「母性保護論争」の発端となる「女子の徹底した独立」のなかで、「男女相互の経済的の独立を考慮しない恋愛結婚は不備な結婚であって今後の結婚の理想とすることが出来ません」²⁷と述べて、理想的な結婚は「経

済的に独立」した「恋愛結婚」であることを示している。山田わかは、「私が、家庭を最も進歩した婦人運動の出立点とした理由は、性欲の奴隷より解放され、教育された本能を基礎とした神聖なる恋愛の上になりたった夫婦を作り、生活の権利を徹底的に自覚した家庭を作るにあるのです」²⁸と述べている。

厨川の恋愛論は、最初の大阪朝日新聞誌上に「近代の恋愛観」として、大正十年（一九二一年）九月三十日から十月二十九日まで二十回にわたって掲載され、翌十一年十月に『近代の恋愛観』として改造社から刊行された。後にベストセラーとなり、厨川が主張する恋愛至上主義は当時の知識層の青年たちに大きな影響を与えた。厨川が『近代の恋愛観』で説く恋愛の歴史は、「両性関係は古来二つの階段を経て今日に及んだ。古代の肉的本能時代と中世の霊的宗教的女人崇拜時代とに次いで来たれるものは、霊肉合一の一元的恋愛観の時代であらねばならぬ。それは即ち近代だ。そして近代の「新しい恋愛観」は「婦人を一個の「人」として認め、個人の人格を確保すると共に、また完全な霊肉合一の恋愛観」である」²⁹と要約される。厨川は恋愛至上主義の結婚観を提唱するだけでなく、エレン・ケイの『婦人の道徳』から「恋愛なしには結婚は不道徳である」という言葉を引用し、恋愛の道徳性を説いている。昭和特に三十年代になると、戦後の民主主義教育を受けた最初の世代である若者たちの中で、男女同権の考え方がさらに普及すると共に、「恋愛至上主義」の風潮も一気に広がった。

また、一九五九年は「皇太子ご成婚」の年であり、この出来事は「軽井沢の恋」というエピソードが象徴するような、「幸福な恋愛結婚」という神話的なイメージを一举に拡散することに貢献したのだった。翌一九六〇年二月「皇孫」即ち浩宮徳仁親王（現皇太子）が誕生し、「ミッチーブーム」が「ナルちゃんブーム」に継承され、「あやかり出産ブーム」にさえ発展した。そのため、国民あげての恋愛結婚と「望む妊娠」が大きな話題を呼び、一九二五年から増加傾向をたどっていた非婚率が、減少に転じるのが一九六〇年である。そうした時代背景のもとで、見合結婚を時代錯誤と捉えて、必要以上に蔑視する考え方が流行しているが、当時の若者の実情は、「恋愛に限りなく憧れる」といったところで、誰もが自由に恋愛を謳歌できたわけではない。倉橋は当時流行だった恋愛至上主義を批判し、見合結婚を主張していた。そして霊肉合一の一元的恋愛観、または「恋愛なしには結婚は不道徳である」という道徳観を批判し、恋愛と性、恋愛と結婚とはそれぞれ分離させるべき、別物であると繰り返し語っていた。同時期の倉橋のエッセイには、見合い結婚を勧める文章が数多くある。

だが結婚という公的な形式を受け入れるかぎり、女はむしろ強力に保護されている。だが

ら女の方でも、結婚を一種の完全就職とみなし、できるだけ有利な条件のものを選び、家庭という穴のなかにしつかりと男をくわえこんでその経済力をぎりぎりまで享受しようとする《強さ》を身につけてきたようにおもわれる。これは外見上あの鶉飼に似ている。男は妻子のためにあくせく働きつづける働き蜂というわけだ。女の唯一の生き方を、結婚して家庭をつくるという軌道のうえで考えるかぎりでは、わたしはこういうかたちで女の立場が堅固になることは望ましいと思う。⁸³

そこで結婚という本邸にとっていちばん合理的な方法は、といえば、それがあのふるめかしくて評判のわるいお見合いなのです。(中略) そんなわけで、結婚とはなによりも生活の設計なので、あなたはいい相手を選ぶために、綿密に計算し、あらゆる努力をなさるべきです。そしてみつけた相手が好感のもてる男性であれば——これは恋愛ではありませんが——あなたはいい相手です。恋愛はあなたが結婚なさったあとでもすることができるとは——その相手はあなたの夫でなくてもいいのですから。⁸⁴

倉橋は、「結婚は女を家庭にいれることによって男の子の所有、捕獲した女の自由を社会的なタガで固定するものとなる。だから、家庭、この一種の反世界あるいは男の社会にある穴は、男にとつては休息の場所であり一家団欒の場であるが、女にとつては檻であり巢であることにすぎないのだ」と結婚を批判すると同時に、結婚とは「人間の社会生活の細胞をつくる方法でありしきたり」であるということを確認しており、結婚を考えている女性読者に見合結婚を進めている。恋愛結婚を批判し、結婚を強く拒否する倉橋が、古めかしい見合結婚を進めているのはなぜだろうか。

倉橋の女主人公は結婚しても、結婚を拒否する女主人公たちと同じく、依然として結婚へ反感を抱いている。たとえば、「夏の終わり」では、「わたし」は「妊娠や出産、そして結婚といった考え」を「喜劇じみてみすばらしいものだ」としている。「妖女のように」では、「子供を生んで育てて家庭を築く、日々の平安。あつまらぬ。あくびがでちゃう」(二三五頁)と人並みの家庭の幸福への不信感を赤裸々に描写している。そして、「わたし」が結婚を町の人々に秘密にして、披露宴をやらなかった理由を、「毎日おしかけてくる患者たちとおなじ種類のひとびとを招いて披露の宴だの酒食のふるまいだのをおこなうことにはえられないから」と説明し、それに続き、「かれらはかれらで、そのぶ厚い手足に似た厚意と好奇心とではわたしの結婚を堪能するまで撫でまわすことをもって公認の嫁入り」(二一九頁)と認める考え方に嫌悪の意を隠さなかった。「結婚」では、「ベッドのうえにみえない

祭壇が築かれ、みえない神の代理人が立ち、きこえない声で祝福のことばをのべると、KはLの指にみえない指輪をはめた……あまりの醜悪さに二人は嘔きだした」（六九頁）と述べられており、結婚という儀式がインセストよりも醜悪なものと表現されている。それと似たように、田舎の婚礼への違和感を示す言葉が倉橋のエッセイに見られる。

小さい子ども時代のわたしにとって、結婚とはまず「お嫁入り」でした。人形のように顔を塗り着飾った花嫁が、花婿の家にもらわれていくあの「婚礼」という儀式、どこか残酷な晴れがましさ、こっけいさ。人々はこの「人身御供」を無遠慮に眺めながら、口々にその美しさをたたえます。にこりともしないで。これが田舎町での婚礼でした。（中略）残念なことに、わたしは自分が父と母との結婚の産物であることを知り、このわたしをふくめた「家庭」というものがかれらの結婚の目的出会ったことを知り、「ああ結婚なんてよそう」と思ったのでした。学校を出ると、わたしは結婚しなくても生きていける方法をさがしました。そのうちに愛する人を見つけました。しかし、かれと結婚するつもりはありませんでした。⁸⁵

以上のように、倉橋の女主人公は結婚しても、結婚の虚偽、偽善を見抜くことにおいて、鋭い目を持っていることが読み取れる。そういう観念的な彼女の恋愛観はボーヴォワールの恋愛論からの影響が大きいと考えられる（ここでは取り上げずに、第四章で詳しく考察することにする）。ここで、倉橋の恋愛観のもう一つの特徴、それは倉橋における恋愛に対する現実的捉え方、略して現実的恋愛観とでも称すべきものであるが、それについても述べておく必要があるだろう。

先に述べたように、戦後の若者が受けた戦後の民主主義教育の最大の成果として男女同権の考え方が挙げられるが、一九四六年憲法に明記された「男女平等」の理念では、法律上では女性が男性と同等の権利を持つことが承認されるが、現実的に社会的にも経済的にも戦前のシステムが温存されていた。建前の平等と現実の不平等という矛盾のもとで、当時の女性たちが獲得したと思われる自我解放は一種低い次元での解放に止まっていた。なぜなら一つには、男が携わる職業などの社会的役割つまり生産労働は、女の担う家庭内役割つまり再生産労働に対して、明らかに経済的に優越しているからである。したがって、この厳然たる社会的事実が存在する限り、両者は対等の分業とは言えず、現実には、家庭内では女は男に経済的に依存するため、二次的存在とならざるを得ない。男女は平等というのは抽象的で、理念的なものでしかない。内実においては女は男に比べて劣った地位に置かれていた。

そして、亡霊としての男女平等以外に、倉橋が見合結婚を推したのは「世間的常識」から来るものであったと言ってもいいだろう。「世間的常識」とは、倉橋が子どもの頃から成長しているうちに知らぬ間に周りに影響され、内面化したものであると考えられる。

女は小説家であるということにより、様々な不利益を被る。たとえば、「妖女のように」では、Lの弟が家出した原因として、Lに唆されたのではないかと母に非難されたとき、Lは家出の置き手紙のそばに置かれていたOK氏の『*の冒険』を出して弁解しようとする。しかし、頑固な母は「OKサンハアナタナンカトチガツテリツパナ作家デス、親ヲ棄テテ家出スルヨウナオソロシイコトヲ教エルワケハナイ、ダイタイアナタガ女ノクセニ小説ヲ書クトイウコトガマチガイノハジマリデス」(二三九頁)と言いつのり、聞き入れない。また、「あたしが小説を書くことも母はけっして許していない。日に一度は、アナタトイウヒトハ鬼ノ眼デ母サンヲミテイルとさもおそろしげにいうわ。アナタハオナカノナカニ鬼ヲ飼ッテイルと……」(二二六頁)。世間から「女の化物」と侮辱を受けることとなり、議論紛糾し、女が小説を書くことだけでさえ非難の的となるのに、ましてや「いい年」をしている独身女性である。町ではまだ独身であることはいい年をして「かたづかない」女とされており、時々「にせの笑顔をすりよせてくるほどのふてぶてしいばあさん」たちに「オクサン、オメデタダソウデ」と呼ばれるなどして嫌がらせを受ける。

倉橋は初期作品において、「良妻賢母」思想に支配される、鬼婆同然の母親を数多く作りだしている。「妖女のように」の母親もその顕著な一例である。そうした母親は「良妻賢母」思想を身をもって実践しているだけでなく、娘にも懸命に注ぎ込もうとする。

「毎日こうやってお逢いしているおじさまの正体はなにか？ママにおじさまのことを話したら、血相かえてあたしの中からだじゅうに死神よけの呪文を書きこむわ」

「その呪文は、純潔の二字」

「あら、あたっちゃった。女ハ結婚スルマデソレヲシテイケマセン」(「妖女のように」二三二頁)

あたしは、母の頑固な夢にしたがって、良妻賢母になるべき良家の娘という観念にふさわしいあらゆるお稽古ごとに通っていたんですが、ピアノもその一つだったの。(「迷宮」七四頁)

「男ができました」とあたしはほとんど挑発的にいいました。母はあたしの顔をみないで、

「知っていました」

「そうですか。それならいいんです」

浴衣を着ながら母は自分の胸にいいきかす調子でつぶやきました。

「けだもののすることをして」

「え？」

「結婚まえの若い娘が……」

そして母は野合ということばを使ってごく一般的な道徳上の非難で話をとじてしまいました。
た。（聖少女」一三〇頁）

「大学だって、べつに行かなきゃいけないってことはないわ。それにママはあたしが大学に行くのがいやなんでしょ？」

「そんなことはありませんよ。でも大学をでてからお華、お茶、お料理のお稽古じゃ、遅くなるわね」母は端然と正座したままにこりともせずにいいました。（「聖少女」一二〇頁）

結婚するまで貞操を堅く守るべきであるという点や、母親に従い、良妻賢母になるべき良家の娘らしくあらゆる稽古に通うこと、独身であることによって受ける差別、男女は結婚してはじめて一人前になるという考え方が関与している「世間的常識」として挙げられた項目は様々なものがあつたが、共通していたのは、「良妻賢母」となるのに必要と考えられる事柄であつた。倉橋は、「良妻賢母」に代表される古い思想を軽蔑しながらも、気付かないうちにそういった思想に依拠した行動を取つたのである。だから、その結果として倉橋はそうした厳しい現実と直面する。

当時のあるべき女性の姿が貞淑な家庭の主婦であつたために、その役割から逸脱する性欲を持つ女性が、人間ではない妖魔として世間の目に映る。語り手は作品の中でセックスを数多く描写している。それは母にも「町の連中」たちにも好ましく思われていない。小説にさりそこねてはじめられている原稿の束を火中に投じるのを見ると、母は「ホラゴランナサイ、イヤラシイセックスノコトバカリカイテアルカラコンナニクサイジャアリマセンカ」（二四四頁）と顔をしかめて言う。また町の人々から独身女性に対する最大の侮辱のつもりで「ミセス」と陰で呼ばれる。同い年のいとこにその事実を教えられ、事実上ミセスであると認めると、いそこから「事実上ねえ。ま、そうでしょう、あなたの年でヴァージンだなんて、醜悪でしかないからな」（二二〇頁）と言われる。母や「町の連中」たちに代表される旧道徳、そしていとこに代表される新しい思想。女性はそういう二重基準のギャップに板挟みにされ、厳しい状況に置かれていることが顕著に表れる。

今まで述べてきたように、当時恋愛結婚の風潮が広がっていたにもかかわらず、倉橋が恋愛結婚に反対し、結婚を愛から分離させ、結婚を嫌悪するのはボーヴォワールに影響されたからと考えられる。戦後の新しい教育を受け、読書などを通して西欧の新しい女性解放思想と接触した倉橋はボーヴォワールのように新しい女性の生き方に徹底する可能性もあった。しかし、そういう新しい思想を受ける一方、倉橋は小さい頃から家庭内でも家庭外（世間）でも良妻賢母思想を叩きこまれてきた。良妻賢母思想を嫌悪し、批判しているにも関わらず、不本意にも良妻賢母思想を少しづつ内面化している現実があった。ボーヴォワールに代表される新しい思想や良妻賢母主義に代表される古い思想の狭間に苦しみながら、すべての要素を倉橋が内面化していたとするならば、結婚を拒否しながらも見合結婚を推したのも不思議ではない。倉橋の女主人公たちが闘士生活を諦め、見合結婚を通じて家庭生活に入ったのも、こういった精神的な恋愛観と現実的な恋愛観という二つの恋愛観に相互作用されたからではないかと考えられる。

第四節 男性化願望の挫折と結婚

倉橋の女主人公たちは結婚を拒否することから見合結婚して家庭に入るようになるという道筋を辿っている。また「give and take」というルールに従い、夫が働いた金で食べていく代わりに家事全般をやりくりするというパターンは「男は外、女は内」という男女役割分担の典型的な形をなしている。一見、現実的な恋愛観が精神的な恋愛観に取って代わり、完全に勝利したように見えるが、果たしてそうであろうか。「妖女のように」において、LがKに対してなぜいまままで結婚しなかったのかについて告白している場面がある。

アタシガイママデ結婚シナカッタコトトアタシガ作家デアルコトトハナンノ関係モナイワ。作家ノコトハアタシノナカノ男ニマカセテオケバイイ。結婚ハアタシノナカノ女ニトツテ生キル目的デ、アタシトシテハコチラノホウモ考エテヤラナイワケニハイカナイ。イマニナルマデアタシガ結婚デキナカッタホントウノ理由ハ、といいかけてLはあやうく舌をとめた。これはKのまえでいふべきことではなかった。要スルニコレマデアタシハ男ニナロウトシテイタノダワ。アタシハKにナリタカッタ。Kトノ完全ナ合体。(二五頁)

ユングの仮説によれば、人間の本質は男性性と女性性を備える両性具有であるが、発達上のある時期に、ホルモンといった肉体的要因やジェンダーといった社会的な要因によって、人は男か、女か、どちらかの性を強制される。そして、理想的な両性具有像は、ユング派心

理学者J・シンガーの言うように、「個人の内面の男性性と女性性が調和しあった人格」である。倉橋はエッセイにおいても、作家であるのは自分の中の男の部分であるということを繰り返し述べている。女にして作家であるとは単に被抑圧者として支配的な男性社会に挑戦することではなく、むしろ自分を男とみなし、みずからの生きる道を「選択」する確固たる意志を持ち、男性たちと共存することを選び、「男性化」することであった。男性化した女性たちの多くが因習的な女性性からの脱却を果たした根幹に男性・男性への同化意識があるように、今までLが結婚を考えなかったのはKとの完全な合体という男性化願望があったからである。倉橋が結婚に足を踏み入れたのは、男性化願望が破れ、男性になる事が所詮不可能であるということに悟ったからである。自分の中の男性の部分に任せた作家業ではいずれ食べていけない日が来る。自分の中の男の部分に頼り、女部分を極力抑圧して作家を続けてきたが、男性化願望が破れたとたんに、内面化していた現実的な結婚観が蘇って、日常生活の繭を破って逃げだしていく。男性化願望の代わりにもう一つの繭が必要となつて来たとき、倉橋が選んだのは、結婚して家庭に入るといふ選択肢である。

また、倉橋は「誰でもいい結婚したいとき」（一九六四）というエッセイにおいて、次のような発言をしている。

女は男を愛するか、軽蔑するか、しかできません。ほんとうは愛せないのに「愛と信頼にみちた結婚」という欺瞞のなかで生きていくよりは、最初から軽蔑すべき男とみきわめて結婚するほうがましです。つまり妻という仮面をつけてやっつけていけばいいのです。ただしこの仮面はいつでもとりはずせるようにしておかなくてはいけません。⁸⁸

倉橋にとって、結婚するのは自分の中の女の方であり、結婚とは妻という仮面にくるまって生活することである。前にも述べたが、「結婚」におけるSとLの結婚は、SがLを魅了したのではなく、LがS型人間と結婚しようと思う時に、Sがたまたまそこに存在したのはLのほうの存在ではなく、「由里子、美佐子、由美子といった俗名のなかからどれをLのために選んでいいかとつきにわからなかった」（七一頁）。すなわち、Lの本質の部分は小説書きを任される男の部分であり、結婚するのは「由里子、美佐子、由美子といった俗名」に代表される女の部分である。Lの本当の名前が「由里子」「美佐子」「由美子」のいずれにせよ、KとLの存在する反世界では現実世界で符号として普遍的に使われている名前が何の意味づけも持たない。それは現実世界での一切の意味合いに反対する倉橋の文学観とも

一致している。倉橋は「わたしの「第二の性」」（一九六〇）において、女性の理想的な生き方を以下のように思い描いている。

女は男によって女として客体化されたことをひきうけたうえでしかもみずから別のものにつくること。だから、これは、女が第二の性という立場を拒否して第一の性と抗争することではなく、むしろ第二の性としての立場を利用しながら第三の立場に移行していくことを意味する。すくなくともこれは世界からおしつけられた性の符号を―剥ぎとるのではないが―価値の正負の符号でなくするための遠く長いみちに通じるものである。たとえば女は文学を通じてみずから世界に投企する。⁸⁷

「婚約」においては、「あなたがた」はボーヴォワールとサルトルとの関係を理想とするが、彼らと違い、「婚約という関係にくるま」り、周りにそのうち結婚するという錯覚を与え、「犯罪者風の微笑」を浮かべる「共犯者」同士と設定される。そして、「結婚」「ヴァージニア」「妖女のように」の女主人公たちは皆結婚を進んで選んだ。なぜ「世間を詐欺にかけるための擬制」である「この公認された契約関係」即ち婚約関係が必要となってくるだろうか。なぜ「結婚」をはじめとする作品の女主人公たちは見合結婚を通じて家庭に入ったのだろうか。そこにありうるのは、結婚関係にせよ、婚約関係にせよ、仮面をかぶってまで世間を欺かねばならない厳しい現実があったからである。結婚を嫌悪していた女主人公たちが結婚に足を踏み入れたのは、女性たちに要求する厳しい現実のほか、倉橋自身が考えた第三の性という女性のあるべき生き方とも関わり合っていると考えられる。

倉橋は「第二の性としての立場を利用しながら第三の立場に移行していく」ことを女性の理想的な生き方とする。結婚するだけで、独身女性が受けるはずの様々な不利益から解放され、作家の仕事に集中することができる。これは女性という立場を引き受けた上で、第三の立場をつくる道の一つと考えられる。そして、「パルタイ」の女主人公が繰り返し述べたように、「わたしはパルタイを選び、パルタイによってわたしの自由を縛ろうと決意した。《革命》が必然的だからパルタイに入るのではなく、わたしは《革命》を選びたいから入るのだ。そしてわたしは自分自身の自由を拘束することによって、いつそう自由になることを選ぶのだ」。自由を拘束することによってよりいっそう自由を獲得するという観点は倉橋の女主人公がなぜ結婚を選んだかを解釈する時にも当てはまるのではないか。即ち結婚生活に入ることによって、自由が家庭に奪われたかのように思われがちであるが、契約という形を利用して自由を充分に確保することができたら、独身女性が受ける差別から解放されるだけ

でなく、結婚という仮面に隠れて、作家の仕事に集中することができる。男性化願望の破綻とともに、女性として生きていくほかないという現実の前に晒された倉橋にとって、妻の仮面をかぶって家庭生活に入ることが一番望ましい生き方だったのかも知れない。即ち、倉橋の女主人公たちの結婚は現実的な恋愛観の完全勝利というより、精神的な恋愛観と現実的な恋愛観が折衷したものであると考えられる。

- ⁵³倉橋由美子「ある破壊的な夢想―性と私―」（初出「ある破壊的な夢想」『婦人公論』四八卷三号、婦人公論社、一九六三年二月）『わたしのなかのかれへ』一〇二頁
⁵⁴倉橋由美子「作品ノート」『倉橋由美子全作品5 聖少女・結婚』新潮社、一九七五年一月二五日、二四八頁
⁵⁵倉橋由美子「作品ノート」『倉橋由美子全作品1 パルタイ・雑人撲滅週間』新潮社、一九七五年一〇月、二六八頁
⁵⁶ポリアモリーとはギリシヤ語の *Polys*（複数）、*amor*（愛）から、一九九〇年初頭にアメリカで作られた造語である。
⁵⁷ボーヴォワール『女ざかり―ある女の回想―』（上）朝吹登水子、二宮フサ訳、紀伊国屋書店、一九六三年五月、一八頁
⁵⁸ボーヴォワール『女ざかり―ある女の回想―』（上）二〇頁
⁵⁹倉橋由美子「わたしの文学と政治」（初出「わたしの文学と政治 反旗をかざして」『毎日新聞』一九六一年一月九日、七頁）『わたしのなかのかれへ』四二頁
⁶⁰倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』二八頁
⁶¹倉橋由美子「作品ノート」『倉橋由美子全作品1 パルタイ・雑人撲滅週間』新潮社、一九七五年一〇月、二六四頁
⁶²倉橋由美子「ヴァージニア」『倉橋由美子全作品6 ヴァージニア・長い夢道』新潮社、一九七六年三月、二二六頁
⁶³倉橋由美子「愛と結婚に関する六つの手紙」（初出は丹羽文雄編『結婚論―愛と性と契―』婦人公論社、一九六二年七月）『わたしのなかのかれへ』七六〜七七頁
⁶⁴前掲書、上野千鶴子『女という快楽』二五二頁
⁶⁵らいう研究会編『『青鞥』人物事典 一一〇人の群像』（大修館書店、二〇〇一年五月）との論もある。
⁶⁶香内信子編集・解説「女子の徹底した独（紫影録（抄））」『論争シリーズ1 資料 母性保護論争』ドメス出版、一九八四年一〇月、八五頁
⁶⁷前掲書、香内信子編集・解説『論争シリーズ1 資料 母性保護論争』一七五頁
⁶⁸野本泰子「佐多稲子の恋愛観」『COMPARATIO』四号、二〇〇〇年三月、LXXXVI頁
⁶⁹倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』二九頁
⁷⁰倉橋由美子「女性講座」（『わたしのなかのかれへ』収録時に初出は「ヤングレディース 36・11・15〜37・12・15」と記されているが、未見）『わたしのなかのかれへ』六二頁

⊗倉橋由美子「愛と結婚に関する六つの手紙」『わたしのなかのかれへ』七六頁

⊗倉橋由美子「誰でもいい結婚したいとき」(初出「誰でもいい結婚したい時」「愛のための結婚」という幻想を捨て去ったときこそ、女が徹底的に男をえらぶチャンスだ」『婦人公論』

四九卷一二号、中央公論社、一九六四年十二月)『わたしのなかのかれへ』一七〇頁

⊗倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』三〇頁

第四章 倉橋文学に見るボーヴォワール受容

倉橋由美子の思想的な受容を論じる際、実存主義者であるカフカ、カミュ、サルトルからの影響を論じるのが一般的である。しかし、実際には倉橋は彼ら以外にボーヴォワールからも強い影響を受けている。特に、倉橋の女性論を論じるには、ボーヴォワールからの思想的な受容が重要な位置を占めていると考えられる。

「倉橋の女性論の基本」とも言われる「私の第三の性」⁸²は一九六〇年八月に『中央公論』（七五巻八号）に発表された後、単行本収録時に「私の『第三の性』」に改題された。瀬沼茂樹は「戦後現れた女流作家のうちで、倉橋由美子の登場は、いわゆる才女とはちがった、極めて異色のある才能だという気がする。この考えは、すこし前に出た「モラリスト坂口安吾」（新潮六月）という小論に胚胎し、「わたしの第三の性」（中央公論八月）によって、決定づけられたように思う」⁸³と「私の第三の性」を高く評価している。また、中山和子は「アメリカ第二波フェミニズムの動きに大きな影響力をもった、ベティ・フリーダン『女性の神秘』（邦訳「新しい女性の創造」）の抄訳が、「第二の女性革命のすすめ」（桜井真）として、『婦人公論』に独占掲載されたのは一九六四年八月である。「わたしの『第三の性』」はそれに先駆けて、明晰な論理展開を示していたのである」⁸⁴と倉橋の女性論が時代に先行していることを明らかにしている。

第一節 ボーヴォワール『第二の性』の受容―「私の第三の性」を中心に―

一、倉橋由美子とボーヴォワールの『第二の性』

「私の第三の性」において、倉橋は繰り返しボーヴォワールに言及している⁸⁵。また、翌年の一九六一年一〇月に東都書房によって刊行された書き下ろし長編小説「暗い旅」において、「かれとあなたが婚約したころからだ、あなたがたのあいだにひとつの合言葉が生まれたのは。それは『サルトルとボーヴォワールのように』という合言葉だった、恥ずかしいのであなたがたはそれを人まえで口にすることはなかったけれども…ボーヴォワールの自伝を読むまで、あなたがたは二人の関係を想像したり推測したりするだけだった」⁸⁶とあるように、「あなたがた」はサルトルとボーヴォワールの関係を理想的な愛の形とし、ボーヴォワールの自伝を読んだと述べられている。こういった言及からも、倉橋がボーヴォワールに対して非常に興味を持っていたことは明らかである。

そして、倉橋がボーヴォワールを読んだと推測される時代の状況を確認すれば、「実存主義全盛の五〇年代にサルトルの〈アシスタント〉、実存主義の〈代弁者〉という枕言葉が定

着し、彼女の書くものは実存主義文学の一端、思想の表現として読まれていた」(池上玲子)⁸⁸といったようなものだった。実存主義の全盛期に大学生活を送り、サルトルの『存在と無』を取り上げ卒業論文にまとめた倉橋が、サルトル研究の二次的な資料として、ボーヴォワールの『第二の性』を読んだ可能性は高い。

また、倉橋由美子は戦争時代の経験を「わたしの文学と政治」の中で次のように回想している。

あの神話的な子供の日々を戦争の時代にすごしてきたわたしは、楽しいかくれんぼに似た疎開や防空壕での遊びが終わり、世の中とおとなたちの生活とが次第に堅固さをとりもどしていくにつれて、自分が女であることを知り、とまどいをおぼえはじめたものでした。結婚して子供を生み、家庭をつくるという生活をやがて自分もするかしらと思うと、わたしはほとんど気が遠くなりそうでした。そんな生活は、わたしの未来ではなくて、ひとのものであるかのように思われたのです。⁹⁴

疎開のため、戦争から心的障害をほとんど受けなかった倉橋は、戦後の平穏な生活に戻るとつれて、性差などの社会通念に接触せざるをえなかった。倉橋の言葉を借りれば、不本意ながら「自分が女であること」を思い知らされた。一九三五年生まれの倉橋は、終戦の一九四五年時点では、丁度十代に入ろうとしていた。十代から「女とは何か」という疑問を持ち続けてきた倉橋が、ボーヴォワールの『第二の性』に興味を持ったのは無理もないと考えられる。

二、『第二の性』(生島訳)との関連性

井上たか子によれば、「一九四九年秋に出版され、一週間で二万二千部という爆発的な売れ行きを見せた『第二の性』は、早くも一九五一年にはドイツ語訳が出版され、現在では三〇近い言語に翻訳され、フェミニズムの古典的テキストとして世界中で読まれている」⁹⁵という。日本では、出版の僅か四年後の一九五三年に、仏文学者の生島遼一によって翻訳され、さらに一九五九年新潮社によって文庫化され、再版を重ねるベストセラーになった。ただし、生島訳は構成に原書からの大幅な変更があり、「翻訳の順にしたがって読むと、つじつまが合わなくなる」、また「訳語についてもいくつかの解釈の違いがある」⁹⁶などと批判されている。後に一九九七年に「『第二の性』を原文で読み直す会」による改訳版・所謂「決定版」⁹⁶が出版された。原文通りの構成に従い、女性の立場から表現にも注意しているため、研究資料として使われることが多い。「『第二の性』を原文で読み直す会」訳を新訳という

のに対して、生島訳は旧訳と呼ばれるようになる。

井上たか子は前掲論において、「『第二の性』を原文で読み直す会」に参加するきっかけを以下のように述べている。

一九八八年六月に日仏女性センターに「『第二の性』を原文で読み直す会」が誕生したとき、私は二つの理由で参加した。第一にボーヴォワールは本当に母性を拒否したかどうかを検証しなかったこと、第二にこうした解釈に翻訳の問題がどうかかわっているのかを検討しなかったためである。⁸⁵

また、佐藤浩子はその点について以下のように述べている。

訳語についてもいくつかの解釈の違いがある。例えば旧訳では、所々で「女になること」あるいは「女らしさ」と訳している語は、新訳では、「母になること」、「母性 [la maternité]」である。さらに「雌の屈辱」あるいは「母親のみじめさ」と訳している語は、新訳では、月経、妊娠、出産、授乳など女の生物学的な機能からくる「諸約束 [les servitudes]」であり、これらの「諸約束」は必ずしも屈辱的なことでも惨めなことでもない。「女は母になるのが当然」という当時の風潮のなかで、ボーヴォワールが母になることや女の産む機能を嫌悪していると解釈してしまったと考えられる。これではボーヴォワールの理論を正確に理解することはできない。つまり、結果として、当時の男性の視点のみによる翻訳で、女を母親の役割に閉じこめようとしていると受け取られかねない。⁸⁶

訳語に対する理解の違いにより、旧訳はいかにもボーヴォワールが〈母性〉を否定しているように読み取れるが、それに対して新訳は、ボーヴォワールが否定しているのは、〈母性〉というより、むしろ「母親になることは自然的な義務である」「女には自然的に母性愛がそなわっている」⁸⁷という二つの偏見であると異議を唱えている。

一方、倉橋は初期作品の中で、妊娠を拒否するあるいは妊娠しても中絶するという女主人公を何人も造形している。たとえば、「バルタイ」（初出『週刊明治大学新聞』明治大学新聞学会、一九六〇年一月）の「わたし」は「《労働者》」と関係を持ち、妊娠した後、強い現実嫌悪と自我疎外を感じ、中絶することを決める。また、「蛇」（初出『文学界』一四巻六号、文藝春秋新社、一九六〇年六月）において、女性が妊娠するという原理を覆し、男性が妊娠するという発想を大胆に取り入れている。中絶を決めるにせよ、妊娠を拒否するにせ

よ、賞賛されてきた母性への反感や嫌悪が読み取れる。反母性論という観点から見れば、生島訳の観点と一致していることが分かる。また、「私の『第三の性』」が一九六〇年に発表されたことを考慮すると、倉橋が生島訳を読んだと推定するのはそれほど不自然なことではないだろう。先に引用した佐藤浩子の議論にあるように、生島訳ではボーヴォワールの議論が、原文においてよりも、母性 (maternité) を敵視しているかのように読める場合がある。倉橋がそうした生島訳を読んでボーヴォワールの議論に共感したとしたなら、生島訳によつて潤色された議論をそのまま受け継いってしまったということも十分考えられるのである。

池上玲子が前掲論において、「暗い旅」(一九六一)と同時代テキストであるボーヴォワールの自伝『女ざかり』(一九六〇年)とを比較して読むことによつて、倉橋における双子表象がどのようにボーヴォワールから受容され、変換されていったのかを論じているほかは、これまで倉橋のボーヴォワール受容が論じられることはほとんどなかった。そこで、本稿では、「私の『第三の性』」とその成立に大きな影響をもたらしたと思われるボーヴォワールの『第二の性』(生島訳)とを比較することから出発して、一九六〇年代において倉橋がどのような女性論を提起したかを明らかにしたい。

三、「私の『第三の性』」と『第二の性』(生島訳)との比較

本稿では、「私の『第三の性』」に焦点をあて、他者性、結婚観や母性観といった点から、ボーヴォワールの『第二の性』(生島訳)と比較することによつて、倉橋の女性に関する認識、そして女性に関する諸問題への姿勢を明らかにすることを目的とする。

①他者性

ボーヴォワールは生物学的条件と他者性の関係について次のように論を展開している。

だからこそわれわれはこんなに長く生物学的条件を研究したのである。それは女性を理解することを可能にする鍵の一つなのだ。しかしわれわれが拒否するのは、生物学的条件が女性にとつて動かすことのできない宿命をなしているという考え方である。これだけでは男女の階級性を決定するのにつけて十分ではない。また、女が《他者》である理由も説明できない。それだけでは女にこの従属的な役割を永久に保持するように運命づけるものではない。(『第二の性』第四卷『女の歴史と運命』六八頁)^{三〇}

ボーヴォワールは生物学的条件を「女性の歴史において最重要な役割を演じ、女性の情況の本質的要素である」と肯定しながら、女性とは何かを理解するには不可欠であるが、それ

を定義するには不十分であると述べている。また、ボーヴォワールの考えでは、生物学的条件をもって女性の他者性を説明することはできない。すなわち社会全体が築き上げた、社会学上、道徳上、職業上の、女性に対するあらゆる差別は、本質的には生物学的条件とは無関係とさえ言える。詰るところ、生物学的条件は動かしえない宿命ではなく、単に一つの場合であり、人間は自由に選択しながら自己を作り上げてゆく存在なのである。

一方、倉橋は「私の『第三の性』」において、ボーヴォワールの言及する「他者」という概念を援用し、他者性と生物学的条件についての考察を以下のように述べている。

この関係はしかし男の集団と女の集団とが対立して相互に客体化しあう関係ではない。

男は主体であるが女はこの主体を《他者》として客体化しうるもうひとつの主体という存在論的構造を持たない。（「私の『第三の性』」二六六頁）

けつきよくのところ、生物学的条件は偶然的な事実であってそれはそのままとめざるをえないが、そのことから《女であること》を因果的に説明しつくすわけにはいかない。

女の宿命は歴史の結果である。（「私の『第三の性』」二六七頁）

倉橋は女性の他者性を指摘したうえで、それを生物学的条件による宿命的なものとして説明することはできないと述べ、女性を歴史によって作り上げられたものであるとしており、この点でボーヴォワールと一致した見解を示している。

②女性の解放への道

さて《女》は、そういった「第二の性」の中に押し込められている自分の存在をどう解放していけばよいのか。ボーヴォワールは次のように述べている。

男女が平等であるような世界はたやすく想像することはできる。ソヴィエト革命が約束したのもまさしくそういう世界なのだから。（『第二の性』第三卷『自由な女』一九

一〜一九二頁）¹⁰³

たしかに、女が形をかえるためには経済的条件だけを修正すれば十分だ、と考えてはならない。この要素は女の進化の第一要因であったし、いまでもやはりそうである。しかしこの要因がその予告し要求している精神的・社会的・文化的等々の結果をはっきりともなわないかぎり、新しい女はあらわれることができないだろう。（『第二の性』第三

ボーヴォワールの考えでは、女性が「第二の性」から脱出するには、経済的自立が第一要因であるが、精神的・社会的・文化的等々の自立を伴わない限り、新しい女とは言いがたい。というのは、仕事と家事の両立は女性を過重労働に追い込むだけだからである。真の女性の自立の達成はソヴェト革命が約束したもの、すなわち社会主義社会においてしか実現しないと、ボーヴォワールは考えている。具体的には平等教育・性的自由・婚姻自由・社会の共同育児等が挙げられる。一方、それに対して、倉橋は以下のように述べている。

性関係のうちに不条理にも女の妊娠という生殖の畏が待ち受けている。そして子どもを生むことは結局家庭を作るといふ形式にすべりこむことを意味する。これをあくまで阻止するためには二つの方面で夢想を実現しなければならぬだろう。第一に完全な避妊の方法、さらには《人口胎盤》による母胎外の発生といった医学上の革命の実現、第二には子どもを社会の共同責任で養育しうる社会制度の実現である。(中略)

だが現代医学の進歩も生殖の完全なコントロールを実現しえないだろうし、男のものである政治も家庭という巢を否定するような制度を容易に実現しうるとは思えない。わたしは一つのユートピアを語ったにすぎないことになる。(「私の『第三の性』」二六九頁)

倉橋は「家庭という粘液質の卵細胞のなかに自由をとじこめないこと」を「女が世界にむかって投企するための基本的な条件」とし、「結婚をしないか、あるいはしてもそれを子どもを産み家庭をつくることから切断」すべきだと、妊娠、出産、育児という女の「第二の性」から脱出する手段を提起している。しかし、生殖ということに関しては、「第一に完全な避妊の方法、さらには《人口胎盤》による母胎外の発生といった医学上の革命の実現、第二には子どもを社会の共同責任で養育しうる社会制度の実現」という「二つの夢想」を挙げているが、男女問題には深刻な社会的、歴史的根源があるため、医学的なコントロールや新しい社会制度などは容易に実現できるものではなく、倉橋自身はそれらの提案が「ユートピア」であると認識している。

『第二の性』が発表された一九四九年時点では、フランスでは、中絶は法律で禁止され、出産は女性の権利とは考えられておらず、そのような時代を背景に、ボーヴォワールは出産

が女性の権利であることに重点を置いて論を進めている。社会背景が違うため、倉橋は中絶の権利を主張することなく、ボーヴォワールと同じ、社会共同育児などを夢見るが、その社会制度が現実性に乏しい「ユートピア」に過ぎないと認識しており、この点において倉橋論はボーヴォワール論より現実性を帯びた論となっている。

③ 「第三の性」とは

ボーヴォワールは「第三の性」について次のように述べている。

女がいよいよ種の勢力からのがれ出るためにもやはり苦しい危機を通過せねばならない。四十五歳から五十歳の間、適齢期の逆現象である月経閉止の現象がある。(中略) ある女性はその時期に脂肪がのり、またある女性は男性化する。多くの女性は内分泌の平衡が回復する。こういうときにいたって女はやつと雌の屈辱から解放される。(中略) ときどき、年とった女は《第三の性》などといわれる。また事実、彼女らは、雄ではないがもはや雌でもないのだ。そして、この生理的自律性は、彼女たちが以前に所有しなかった健康や平衡や活気となって現れることも多い。(『第二の性』第四卷『女の歴史と運命』六六頁)¹⁰⁴

四五歳から五〇歳の間、適齢期の逆現象である月経閉止の現象に伴い、女性は雌の屈辱から解放され、雄でもなく雌でもなくなり、すなわち「第三の性」になるとボーヴォワールは述べている。この年代の女性の無性化が強調される一方、「ある女性はその時期に脂肪がのり」、「ある女性は男性化する」とも述べている。

一方、倉橋が述べる「第三の性」は以下のようなものである。

わたしがかつて「第二の性」とのべたのは、男性が女性化したり、女性が擬似的に男性化したりするという意味で今日みられる一連の中性化現象をさしたのではなく、女性が妻であり母であるしかないという第二の性から脱出して、人間つまり自由そのものとしてのその可能性を創造的な仕事に解放することを主張したものでした。¹⁰⁵

また、「私の『第三の性』」が一九六〇年に『中央公論』に発表された当時、目次に記載された題目の横に「女は結婚によって第二の性を選択する。だが私は主体的に生きる『第三の性』」を選択する」という一節が小さな文字で書かれていた。「女性が妻であり母であるしかないという第二の性」「女は結婚によって第二の性を選択する」とあるように、倉橋

が結婚と「第二の性」とが緊密な関係にあるとしていることは明らかである。また、倉橋はボーヴォワールの「第二の性」を引受けたうえで、新しい「第三の性」を以下のように提起している。

女が第二の性という立場を拒否して第一の性と抗争することではなく、むしろ第二の性としての立場を利用しながら第三の立場に移行していくことを意味する。すくなくともこれは世界から押し付けられた性の符号を——剥ぎとるのではないが——価値の正負の符号でなくするための遠く長いみちに通じるものである。たとえば女は文学を通じてみずからを世界に投企する。このことは女にとっては特別な意味をもつ。女が女であることをひきうけ、そして女として書くことは、完全な対他存在^{II}ものとして石化させられた泥棒のジュネが、《ぼくは泥棒になるのだ》（サルトル『殉教と反抗』）という選択と文学を創造することによってその自由の復権をはたそうとしたのと酷似した意味をもつように思われる。（「私の『第三の性』」二七〇頁）

歴史的原因も生物学的原因もあるため、倉橋は社会現実を考慮に入れ、「第二の性」という立場を拒否して「第一の性」と正面からぶつかるのを避け、むしろ「第二の性」という立場を利用しながら第三の立場を作ると提唱し、「世界から押し付けられた性の符号を——剥ぎとるのではないが——価値の正負の符号でなくする」のを目標として掲げている。その具体的な方法として積極的な「社会投企」という概念を提出した。女性が言葉を使徒することが、男性の世界と自分との関係を究明することにより、自己救済を得るとともに、男性の世界を対象化することにもたどり着くと具体例を取り上げている。しかし、それはあくまで女性作家に留まっており、女性一般に対して、どのような「社会投企」をすれば良いのかについては明言していない。

倉橋の「暗い旅」には「あなたがたは、婚約という関係にくるまって犯罪者風の微笑をかべているけっして結婚しないことを誓いあった共犯者であるから。あなたもかれも、結婚して子どもを生み家庭をつくる意志をもたないことにかんしては、完全な一致に達していた」⁹⁰という一節がある。婚約することはいずれ結婚するという意思表示であるが、倉橋作品の主人公たちは婚約者として振舞うものの、それは世間の目を欺くための、「第二の性」への贗の服従であり、演技にすぎない一種のカモフラージュであると考えられる。それは第二の性の立場を利用して第三の性に転換しようとする一つの手段ではないのか。

④結婚

ボーヴォワールは結婚について以下のように述べている。

男が家庭のことなどにあまり興味をもたぬのは、彼は全体的な世界に接触しているからであり、企画の中に自己を確かめることができるからである。一方、女はその結婚生活の中に閉じこめられている。彼女の大切な仕事はこの牢獄を一つの王国に変えることだ。彼女の家庭に対する態度は女の身分をわかりやすく定義するこの同一弁証法によってさだまっているわけだ——（女はみずから餌食になることによって取る。）権利を捨てることによって自分を解放する。世界を断念することによって、一つの世界を征服しようと思う。（『第二の性』第二巻『女はどう生きるか』四八頁）⁵⁵

ボーヴォワールは結婚を、女性を世界と切断し、家庭内に閉じ込める一つの牢獄であると指摘している。男は外、女は内という男女の役割分担は一見合理的に見えるが、家庭の管理を受け持たされる女性は、男性と同様に自己を超越することから切断され、家庭の四壁の間に閉じ込められているだけである。

ボーヴォワールは「『女らしい女』」の伝統的な結婚だけでなく、家庭と仕事を両立しようとする自活できる女性の結婚をも否定している。それは男性に「女が家庭を管理し、ひとりで子供の世話や教育を確保する」ことが当たり前のように思われるし、「女の方でも、結婚すればその個人の生活につきまとういろいろな雑用を責任をもって果たすべきだ」という気になり、「妻というものが伝統的にそうであるように、彼女は優美でありたい、よき主婦でありたい、献身的な母でありたいとおもう」（『第二の性』第三巻『自由な女』一四八頁）からである。

そのため、ボーヴォワールは自分自身の独立の保証を見出すには、一緒に暮らさないことが正式な結婚を否定するよりずっと重要であるという結論を下している。しかも、サルトルとの半世紀以上にもわたる事実婚生活においても、それを実践しようとしている。その点はアリス・シュバルツァーによるインタビュー集『第二の性その後 ボーヴォワール対談集一九七二〜八二』においても確認することができる。

「一緒に暮らさないことは結婚しないことよりも大切だと思いませんか？」という質問を受けて、ボーヴォワールは「絶対にそうです。自由な関係といっても家庭をもって三度の食事を一緒にすれば、女性は結局、伝統的な役割を演じる羽目に陥り、普通の結婚と大してちがわなくなります。（中略）私たちがもちつづけた日常生活でのこの種の自由はひじょうに大切でした。おかげで日常生活の不毛な習慣が私たちに介入したことはありませんでした。

それは正式な結婚を否定するよりもずっと重要であったと思います」¹⁵⁰と答えている。

一方、倉橋はボーヴォワールの観点を受けて、結婚について以下のように述べている。

こうして男は女を所有する。元来《もつ》ということは、男女の性的関係——一般に男が女を肉化し女は対象化されながら男に同化し、男は愛され女は愛するという関係——をつらぬく存在関係であり、他者の自由を捕獲することである。結婚は女を家庭に入れることによって男のこの所有、捕獲した女の自由を社会的なタガで固定するものとなる。（「私の『第三の性』」二二六八頁）

倉橋はボーヴォワールと同じく、結婚を「女を家庭に入れることによって男のこの所有、捕獲した女の自由を社会的なタガで固定するもの」とする。前にも述べたが、倉橋は「家庭という粘液質の卵細胞のなかに自由をとじこめないこと」を「女が世界にむかつて投企するための基本的な条件」とし、「結婚をしないか、あるいはしてもそれを子どもを産み家庭をつくることから切断」すべきだと提案している。

当時の倉橋は結婚しない、あるいは結婚しても子どもを産まないという考え方を示しているが、「女の唯一の生き方を、結婚して家庭をつくるという軌道のうえで考える限り」では、「結婚を一種の完全就職とみなし、できるだけ有利な条件のものを選び、家庭という穴のなかにしっかりと男をくわえこんでその経済力をぎりぎりまで享受しようとする《強さ》を身につけてきたように思われる。」とも述べている。また「女性講座」において、「結婚という目的にとつていちばん合理的な方法は、といえば、それがあの古めかしくて評判のわるいお見合い」¹⁵⁰であると、結婚を希望する女性に見合い結婚が合理的だと言っている。

ボーヴォワールは結婚しない、子を生まない生活を自ら選び、生涯をかけて第二の性としての女性の性と戦い、男性と同じく独立する存在としての性を求めている。それとは違って、倉橋は六〇年時点では、結婚しない、あるいは結婚しても子を生まないと宣言していたが、後に見合い結婚を通じて結婚生活に入った。それは「女は男を愛するか、軽蔑するか、しかできません。ほんとうは愛せないのに「愛と信頼にみちた結婚」という欺瞞のなかで生きていくよりは、最初から軽蔑すべき男と見きわめて結婚する方がましです。つまり妻という仮面をつけてやっつけていけばいいのです」「結婚というフィクションを利用して仮面をかぶって生きていこう」¹⁵⁰という考え方と深く関係していると思われるが、第二の性を利用して、第三の性へ移行するという道からは外れているとは考えにくい。

⑤母性

『第二の性』が発表された当時、フランス固有の問題、宗教上の戒律に縛られた墮胎罪があったため、ボーヴォワールは避妊と中絶の自由を獲得することに重点を置いて論じている。母性については、母性本能は存在しないと主張している。

すべてこうした例は母性《本能》などというものがそれほどはつきり存在しないことを示すに足る。そういう言葉はどうしても人類に適用できない。母の態度というものは、彼女の状況全体によって、彼女がその状況を生きるやり方によって定まる。このやり方はいま見てきたようにじつに千種万態なのだ。（『第二の性』第二巻『女はどう生きるか』一六二頁）^三

ボーヴォワールにとって母になることは、「〈母性〉を引き受けるや、たちまち〈家庭〉という巨大な歯車に巻き込まれつつ、客体に転落していく」ことを意味している。また母子関係に関して、「子供を持たなかった事を後悔していないか？」という質問を受けて、ボーヴォワールは「全然！子どもを産まなかったことを後悔したことは一度もありません。サルトルとの関係にかぎらず、他の友情でも、とてもしあわせでしたから。私の知っている女性たちの親子関係、ことに母娘関係ときたら、それはそれはすさまじいですよ。私はその逆で、そんな関係をもたずにすんで、ほんとうにありがたいわ」^三と答えており、結婚や子供に束縛されない自由な生き方を強調している。現代人が家庭や子供をそれほど重んじるのは、友だちも愛もなくさびしい生活をしていて、子供や家庭が其の寂しさを解消する一時の方便であるからとボーヴォワールは認識し、女性の母性を強く拒否している。

一方、倉橋は「子どもを家庭という巢のなかで生み、育てることは女に母性という名のもとに決定的な重荷を負わすものである。といっても出産と育児を人間社会にたいする崇高な義務だとする通念に女はしたがう。それは女が自分の子どものなかに自分をみいだすからでもある。母親は、自分が預金したまま一生引きだせそうにないその可能性、その自由を子どもの名義にかきかえる。そしてそれが大きくなるのをたのしみながら老いていく」とあるように、「女とは要するに子宮だ」「出産と育児を人間社会にたいする崇高な義務だ」（『私の第三の性』一六八頁）という母性に関する社会通念を否定していることが読み取れる。また、前にも述べたが、主人公たちは妊娠した後、決まって強い現実嫌悪と自我疎外を感じるという造形のパターンから、母性への反感や嫌悪が人一倍際立っていることが分かる。それは、ボーヴォワールの反母性論を強く意識しているからであると考えられる。

いままで述べてきたように、倉橋由美子の女性論思想はボーヴォワールと通じるところ

が多い。第一に、自我と他者において、生物学的条件は女性の境遇を理解するには重要であるが、それをもって女性の他者性を因果的に説明しつくすことができず、女性は歴史によって作り上げられたものであると、両者は一致した見解を示している。第二に、二人は結婚観において、結婚を、女性を世界から切断し、家庭内（牢獄）に閉じ込める「罫」と認識している。第三に、母性観において、両者とも母性を強く否定していることが読み取れる。第四に、フェミニズム運動の究極の目標は男性を打倒するのではなく、男女が助け合う健全な人間関係を築くことであり、男性を敵に取らず、その力を借りるべきであると二人は指摘している。こういった点から、倉橋の女性論はボーヴォワール思想を受けて発展させたものと考えられる。

女がどうであるべきかについて、ボーヴォワールは女性解放が他者性を覆すべきであると認識しているが、その具体的な方法は示さず、ただ経済的な独立を獲得しなければならぬと呼びかけている。倉橋はそれを引き受け、積極的な社会投企の具体的な方法として「第三の性」を作るべきであると明確な態度を示している。女性がことばを駆使することは、男性の世界との関係を究明することにより、自己を救済するだけでなく、男性の世界を対象化することにもたどり着くと、女性作家という具体例を取り上げている。

女性の解放への道について、ボーヴォワールは経済的自立が第一要因であると指摘したうえで、真の女性の自立は社会主義社会においてしか実現できないと考えている。それに対して、倉橋はボーヴォワールと同じく、社会共同育児などを夢見るが、社会制度の改革は現実に乏しく、単なる「ユートピア」に過ぎないと認識しているため、この点において倉橋論はボーヴォワール論より現実性を帯びた論と言える。

第二節 「暗い旅」におけるボーヴォワールの受容——『女ざかり』と比較して——

「暗い旅」は一九六一年一〇月に東都書房から出版された、倉橋のはじめての書き下ろし長編小説である。粗筋を辿ると、「あなた」と二人称で呼ばれる女主人公が、突然失踪してしまつた婚約者の「かれ」を探し、居場所を失う不安や苦痛などを味わいながら、少女から大人へと成長していく経緯が描かれる。二人称形式の採用や列車に乗り、過去の思い出を通して自己を再認識するといった点において、フランスのアンチ・ロマンの旗手ミシェル・ビュトールの『心変わり』と似通っているため、発表後まもなく、江藤淳にビュトールの「速製模造品」²³と批判されたことをきっかけに、「暗い旅」論争が起こり、注目された。しかし従来の研究は形式的な側面を論じたものが多く、物語内容そのものについて触れたものは少ない。

斉藤金司は倉橋自身が言う「幻の城をつくって世界の意味に形をあたえるもの」、へわたし自身のなかに深い井戸を掘るもの¹¹⁵という二種類の小説の中で、「暗い旅」を後者に属するものとし、倉橋とその文学を理解するにあたって「鍵をあたえてくれ」、「彼女の言う第一のK—L型小説への糸口」を「示唆してくれる」¹¹⁶とその重要性を指摘している。また倉橋自身は「作品ノート」において、「若くて生活のない男女が出てきて「純粹」に愛したり愛されたり、「愛」について考察したりする小説、要するにこういうことすべてを愛する人間について書いた小説」¹¹⁷であると「暗い旅」を少女小説として位置づけているため、倉橋の性と愛に関する認識を知るには、「暗い旅」は欠かせない存在であると考えられる。

「暗い旅」¹¹⁸において、ボーヴォワールとサルトルとの関係は繰り返され言及されている。たとえば、「かれとあなたが婚約したところからだった、あなたがたのあいだにひとつの合言葉が生まれたのは。それは『サルトルとボーヴォワール』という合言葉だった、恥ずかしいのであなたがたはそれを人まえで口にすることはなかったけれども……ボーヴォワールの自伝を読むまで、あなたがたは二人の関係を想像したり推測したりするだけだった」（一五八頁）という箇所に見られるように、「あなたがた」がボーヴォワールの自伝を読んだことになっている。

日本で出版されたボーヴォワールの自伝『ある女の回想』は『娘時代』『女ざかり』『或る戦後』『決算のとき』の四部からなっている。『娘時代』は一九六一年六月（原著一九五八年）に出版され、二十歳までの青春時代が回想される。続編『女ざかり』は一九六三年五月（原著一九六〇年）に出版され、サルトルと出会った一九二九年から始まり、スペイン内戦、ナチス台頭、大戦といった試練と闘いながら、サルトルとの間で育まれる愛情と仕事への情熱が描かれる。『或る戦後』は一九六五年（原著一九六四年）に出版され、朝鮮戦争、アルジェリア独立運動、ド・ゴール政権などについて触れられており、戦後史の証言としても貴重である。完結編『決算のとき』は一九七三〜七四年（原著一九七二年）に出版され、一九六三年以後の著作活動や、日本、中東、東欧などへの旅行、女性解放運動への対応とともに、現代政治・文化の問題にも言及している。

池上玲子は「サルトルら実存主義陣営の生活、文学製作過程を探る二次的資料として参照され」たとボーヴォワールの同時代の受容を確認した上で、「実存主義全盛の時代に大学生活を送り、サルトルの『存在と無』で卒論を書いた倉橋が、翻訳刊行前にボーヴォワールの自伝を原文で読んだことを想像するのはそれほど無理ではないだろう」¹¹⁹と「暗い旅」は同時代のボーヴォワールの自伝『女ざかり』を参照していると指摘している。しかし池上は倉橋文学における双子表象がボーヴォワールの自伝から影響を受けていると論じるほかは、

具体的にどこを参照しているかについては言及していない。

「暗い旅」における「あなたがた」の関係はボーヴォワールとサルトルの関係と類似している。そしてその背後にボーヴォワールとサルトルの関係と同様な恋愛関係や理論的關係が働いているように思われる。本稿では、池上論を踏まえながら、サルトルとボーヴォワールの関係が主に描かれている自伝『女ざかり』に焦点をあて、ボーヴォワールとサルトルの「契約結婚」との関連性を指摘し、また倉橋が性と結婚に関して、どのような観点を提示しているかを読み解いていく。

一、共犯関係で結ばれたカップル

「共犯関係」はボーヴォワールの自伝において繰り返し言及されている。たとえば、「しかしオルガには、彼女と私の関係が、サルトルと私の関係と同じ比重をもっていないことがわかっていった。サルトルと私は彼女の若さを私たちの経験よりも高く評価していた。いつでもやはり彼女の役割は、緊密な共犯関係で結ばれたひと組のおとなに立ち向かう子供でしかなかった」(『女ざかり』上、二四〇頁)¹¹⁶といった箇所などがある。

共犯関係とは、ボーヴォワールとサルトルが正式な結婚も同居もしていない点や、お互いの自由な恋愛を認め合い、しかも正直に報告し合うという風変わりな関係を指すと考えられる。ボーヴォワールは「私たちは共同の習慣でお互いを束縛しようということすら考えていなかった。だから、結婚しようなどとは考えてもみなかったのである。私たちの主義からいってそれは意に反していた。(中略)独身は、だから私たちにとって自然だった」(『女ざかり』上、六八頁)¹¹⁷と述べている。サルトルが提案した「契約結婚」は主に「ぼくたちの恋は必然的なものだ。だが、偶然的の恋も知る必要があるよ」(『女ざかり』上、一八頁)という事項、および「お互いに嘘をつかないという以外に、互いに隠しだてはしない」(『女ざかり』上、二〇頁)という事項から成り立っていた。

それに対して、「暗い旅」では「けっして結婚しないことを誓い合った共犯者」や「一種の共犯関係としての愛」など、「共犯」という言葉が繰り返し使われる。さらに「あなたがた」は「結婚して子どもを生み家庭をつくる意志をもたないことにかんしては、完全な一致に達して」(四七頁)おり、また「自由に他の男や女をあいすること、ただし完全な了解のうえで、嫉妬なしに……この条件を守ることはあなたがたにとってなによりも必要なことだった」(五一頁)と描かれている。他の異性との関係を認めるのは、二人のあいだにある愛こそ真の愛であると信じ、他の異性と関係を持つことを「セクスの遊戯」とするからである。こういった点において、「あなたがた」の関係とボーヴォワールとサルトルの関係との類似性を見出すことができる。

しかし、「あなたがた」はボーヴォワールとサルトルとは違い、「婚約という関係にくるま」り、周りにそのうち結婚するという錯覚を与え、「犯罪者風の微笑」を浮かべる「共犯者」同士と設定されている。ここで婚約という関係に注目したい。なぜ「世間を詐欺にけるための擬制」である「この公認された契約関係」即ち婚約関係が必要となってくるのだろうか。

当時の社会状況を確認しておけば、一九五九年は皇太子ご成婚の年であり、この出来事は「軽井沢の恋」というエピソードに裏打ちされて、「幸福な恋愛結婚」という神話的なイメージを一举に拡散することに貢献したのだった。翌一九六〇年二月に皇孫、すなわち浩宮徳仁親王（現皇太子）が誕生し、「ミッチーブーム」が「ナルちゃんブーム」に継承され、「あやかり出産ブーム」にさえ発展した。そのため、国民あげての恋愛結婚と「望む妊娠」が大きな話題を呼んだ中、一九二五年から増加傾向をたどっていた非婚率が、減少に転じるのが一九六〇年である。

また一九六〇年では、「女性の平均初婚年齢二四、四歳」¹²とある。「暗い旅」の「あなたがた」が出会ったのは「七年前、十七歳の四月、（中略）高校三年にすすむとき」（三四頁）である。計算すれば、物語が語られる現時点（一九六一年）で「あなたがた」が二四歳になる。「婚約して四年以上になるのに結婚しないでいる」という記述から、「あなたがた」が婚約したのは「あなたがた」が一九歳（一九五六年）の時であると推測される。一九五五年「あなたがた」がQ大学の入学試験で失敗したことを受け、翌年もう一度Q大学を受験するため予備校に通おうとしたとき、母親は「あなたがこれ以上Q大学入学のために時間をかけると婚期を逸する」（八三頁）とあって反対の姿勢を示す。

一八歳を過ぎると、婚期を逸するのではないかと心配された「あなた」は、「かれといっしょに生きていくために結婚や家庭を必要としな」（五八頁）いのを最初から分かっている。母の発言によって代表される社会慣習から逃れるために、婚約という関係にくるまる必要があったのかもしれない。また「かれの母に会うと、かれとの結婚のことで愚痴っぽい話をきかされるだろう、彼女に悪気があるわけではないにしても……早く孫の顔がみたいなどというだろう」（五四頁）といった記述も、当時の結婚事情を窺わせている。そういった社会状況を盛り込むことよって、読者に対して語りかけるような書き方にも見える二人称という語りの形式とともに、当時の読者に一種の親近感を与えているのかもしれない。

二、運命的な出会い

ボーヴォワールは「一九二九年は、私にとって、学生生活の終わり、経済的な解放、親もとからの一本立ち、古い友情の清算とサルトルとの邂逅の年であり、明らかに新時代を開い

たのである」(『女ざかり』上、三三四頁)¹²³と一九二九年を自分の生涯を区切る重要な年の一つに数えている。ボーヴォワールが男友達に紹介されてサルトルに会ったのは七月のある日曜日のことである。ボーヴォワールは『娘時代』の終末部でその当時の印象を以下のように語っている。

それに大きな幸運がやって来たのである。(中略)サルトルは、私の十五歳の時の願望にぴったりあてはまっていた。彼はもうひとりの私であり、私のあらゆる熱中を極端にもっていた。(中略)彼とはいっても何でも分け合えた。八月の初め、夏休みに彼と別れた時、私は彼が自分の人生から絶対に去らないということを知っていた。(『娘時代』三二五頁)¹²³

ここでボーヴォワールが述べている一五歳の時の願望は以下のようなものである。

私は自分の未来の夫のイメージにはつきりとした輪郭を描いていなかったが、未来の夫との精神的な関係には、はつきりとした考えを持っていた。私は彼に情熱的な尊敬をもつだろう。この点は他のすべての点と同様、私にとってどうしても必要な事項だったのである。この選ばれた男性は、ザザが私に對したと同様に、一種の明白な事実として私に尊敬の念を起こさせてくれなければならないのである。(中略)いつか、ひとりの男性が、その聡明さにおいて、その教養において、その威信において私を屈服する時、私は愛するだろう。(『娘時代』一三一頁)¹²⁴

この箇所を「暗い旅」と比較すれば、その類似性は明らかである。「暗い旅」において、「このあなたとおなじくらい若い少年こそあなたの愛の共演者にふさわしい」(三五頁)、「するとあなたと共演者はかれ以外になかったのだ、最初の出会いの最初の一瞥であなたが感知してしまったように」(一〇四頁)と、二人の共生関係があたかも最初から決められていたかのように語られる。最初の出会いの場面においては、当時高校生だった二人が砂浜ではじめて出会い、並んでいる足が「双子みたいに似てい」(三八頁)る。そして外見に留まらず、精神力・想像力や恋愛観という思想次元においても二人は類似している。「かれ」はあなたを嫉妬させるほど、優れた精神能力と想像力の持ち主である。双子のように酷似する二人はまるで「競争を競わないうために、お互いに似せあってきた」(一三〇頁)ようである。「あなた」は「かれ」の存在を「完璧な恋人」「完璧な理解者」そのものと解釈してい

る。完璧な理解者がいるからこそ、「あなた」は安心感と共生感が与えられ、安心できる居場所にたどり着くことができたのである。

ボーヴォワールはサルトルをもう一人の自分と強調しているが、トリル・モイは「確かにボーヴォワールとサルトルはひとつかもしれない。しかしそれは、サルトルが二人を代表している限りにおいてなのであり、「完全な一体化の中身とは、彼が主張すれば彼女は譲歩するということなのだ」¹⁵⁵と言うように、ボーヴォワールが主張するサルトルとの一体性神話について、二人の関係を統御しているのはサルトルであるとしている。「暗い旅」において、「あなた」は「かれ」の失踪により、居場所を失い、精神的抛り所とする「かれ」を探し求めて旅に出るが、結局見つからず、精神的支柱を「かれ」から「小説を書く」ことへと移行させ、小説執筆を決意するところで物語が閉じられる。「あなた」は思い出の描写において、至る所、「かれ」を自分より精神性、知性において優れている人物として位置づけるため、一見、「暗い旅」においても同様な一体化関係が働いているように見えるが、「かれ」は文中に一回も登場せず、「あなた」の叙述の中にしか登場しない。即ち、「完璧な理解者」と描かれる「かれ」は「あなた」によって作り出された存在に過ぎない。サルトルとボーヴォワールの関係を、サルトルが統御しているように、「あなたがた」の関係では、「かれ」が指導権を握っているように見えるが、実際には「かれ」が糸で操られる人形に過ぎず、「あなた」こそ、二人の関係を引っ張っているボスである。

二、セックスなしの愛

サルトルの《偶然的な恋》が延々と続く中、嫉妬に身を焦がし、疲れ果てたボーヴォワールはサルトルにセックスの封印を切り出した。それに対して、「暗い旅」の「あなた」は、「愛と快樂のこの形態を長く保つことは困難だった。とすれば、あなたがたは快樂のほうを放棄する以外になかっただろう」（一二二頁）、「かれとあいしあうことはすでに苦痛となっていた、愛していかないからではない、愛していたからだ……」（一一一頁）と悟り、かれと相談した結果、二人の間でセックスは停止するという奇妙な関係にたどり着く。それについて、倉橋は「愛と結婚に関する六つの手紙」において、「わたしたち、あの猥褻で神望な性の儀式に熱中してエロスを使い果たしてしまったわたしたちにとって、セックスなしの愛が、ありうるただひとつの愛の形なのです。わたし自身、性による交わりに愛の完成を求めるといふ錯誤を繰り返したくありません。あれは愛の完成ではなくてそのむなし崩壊の祭式なのです」¹⁵⁶と述べており、セックスはある意味で究極の愛ではあるが、それと同時に単なる道具と化してしまうこともあると指摘している。

ボーヴォワールは『ボーヴォワール対談集1972〜82』において、過去を振り返る形

で性と愛との関係について、一二歳の頃、「意味はわからないままに、私は激しい性欲に苛まれて」いたと告白したうえで、「そのころは私の人生でセックスが愛の対象を持たなかった唯一の時期」¹²⁵だったと語っている。その頃以外、ボーヴォワールは常にセックスを恋愛に結びつけて行動していたことが分かる。またその点は『女ざかり』におけるカミーユに対する評価にも見ることが出来る。たやすく肉体を扱うカミーユに対して、ボーヴォワールは「感情と肉体はごく自然に彼女に罪があると認め」(六三頁)る、と嫌悪感を隠さなかった。

ボーヴォワールは晩年になって、「日曜日にトゥールに行っても、私たちは真昼間からホテルの部屋に入り込む勇気はなかった」(『女ざかり』上、五五頁)¹²⁶、「トゥール・パリ間の汽車の中で見知らぬ男の手が私の足のび、私を昂奮させ、私はくやしさに転倒した」(『女ざかり』上、五六頁)¹²⁷、「ふり返ると、ひとりの浮浪者が藪の中に寝そべり、じつと私を見据えながら自瀆していた。私はびっくりして仰天して逃げ出した」(『女ざかり』上、五七頁)¹²⁸と肉欲とピュリタニズムとの狭間に苦しむ当時の自分を赤裸々に告白している。肉欲とピュリタニズムとに引き裂かれながらも、「自分の愛していない男とベッドに入る…こういう経験を私はしていなかった」(『女ざかり』上、六三頁)¹²⁹と愛とセックスを一つとする考え方が際立っている。

一方、倉橋は「女性講座」において、男性は精神と肉体とを切り離すことができるのに対して、「女性とは精神を肉体からひきはがすことのできない、あるいはそれを苦手とする」¹³⁰「性」であるようです。女の精神はその肉体とおしていそぎんちやくのように生活の場に密着しています¹³¹と論じている。また「わたしの第三の性」において、「性については、これをいわば現金でもって自由奔放に処分し享樂するということがあたらしいモラルであるかのような考え方が流行したりするが、ばかげたことである。女の性を、性交をエンジョイすることに還元するのは客体として男に利用される役割をひきうけることにすぎない。あの屈辱な《過失の処理》をおしつけられるのはつねに女であって男ではない」¹³²とフリーセックスを批判している。

一見倉橋がボーヴォワールと同じく、愛と性の一致を捉えているように思われるが、しかし、倉橋は初期作品において、愛と性を分離させている女主人公を多く造形している。たとえば、「パルタイ」において、「わたし」が《労働者》と関係を持ったのは、愛情からではなくて、「いつか《労働者》と理解できるかもしれないという希望」に駆られたからと考えられる。そして、「暗い旅」において、倉橋は「あなた」に相手と一度限りのフリーセックスを享受させている。同じ一九六〇年代なのに、エッセイで述べていることと小説の中で造形していることとの間に、相違が生じるが、それは当時の社会風潮と関わり合っていると考え

られる。『日本女性の歴史 性・愛・家庭』では、戦後社会における性について以下のように述べられている。

石坂洋次郎の青春小説『青い山脈』は当時の若い男女の解放的な明るさを伝えている。奔放な若者たちの生態を描く芥川賞受賞作『太陽の季節』が映画化され、“太陽族ブーム”が起きたのと、ロックンロールの歌手、エルビス・プレスリーが日本でも圧倒的な人気を博したのは五六年である。両者とも、性的^{セクシー}であることが後ろめたさをもたわなないという点で、高度経済成長開始期における若者の意識の変化を示していた。六〇年、『性生活の知恵』（謝国権著）がベストセラーになり、避妊の普及ともあいまって生殖の性と快楽の性の分離がはじまる。以後、愛と性の技術書が続出し、女性雑誌には性情報^{セクシー}が氾濫する。¹³⁴

「軍国主義の解体、「家」制度の廃止」を「それまで最も抑圧されてきたもの―性と恋愛の解放をもたらす」ものとし、一九四七年の『青い山脈』（石坂洋次郎）、一九五六年映画化され、“太陽族ブーム”を引き起こした『太陽の季節』（石原慎太郎）、一九六〇年ベストセラーとなった『性生活の知恵』（謝国権）を取り上げることによって、戦後社会における若者の意識の変化を示すと同時に、性の自由化と性的自由が進んでいる状況を明らかにしている。また、倉橋が何度もエッセイを載せた『婦人公論』では、一九六〇年九月号に「新しい男女関係」という特集¹³⁵が組まれており、そのうちの「終着駅のない三十娘」という手記において、次のような記述が見られる。

初めて会ったときに、あるムードが生まれれば、私は率直にそのムードに酔う。人を知り、お互いに惹かれあうくらい人生に愉しいことはないと思う。美しいといわれれば、それをお世辞だなどと考えるのは不必要なこと。お互いが相手の言葉に酔えるかどうかで、その恋が楽しくもなりつまらなくもなるのだ。かといって、私はいわゆる男漁りではないつもりだ。訪れる恋のチャンスに率直にしたがうだけだ。

いつも新しい情事に囲まれている私の人生には、退屈するときというものはない。次々に楽しい遊びを考え、お互いの中の一番美しいもの優しいものをつめあいながら、そのときそのときを楽しめばいいのだ。¹³⁶

いつも新しい情事を楽しむという新しい恋愛のあり方が提示されている。奔放な性の扱いは当時の社会風潮を窺わせる部分もあると思われる。倉橋が「暗い旅」において、「あなた」に一度限りのフリーセックスを享受させているのは当時の社会状況や流行要素などを取り入れ、セックスを享受するという流行要素を意図的に持たせることによって、ベストセラー¹⁵³を狙おうとしていたからであると考えられる。

四、愛と結婚と家庭

一九三一年二月、サルトルとボーヴォワールはそれぞれル・アーヴル、マルセイユ赴任が決まる。そのとき、失望を感じ、精神が不安定な状態に陥ったボーヴォワールに、サルトルは結婚を持ち出した。これが最初で最後の求婚でもある。それに対して、「暗い旅」において、二人の《危険な関係》に限界を感じた彼は、ある日「あなた」に「ぼくは飽きてしまった、もつとほかの関係を考えてもいいころだ……」（七三頁）と結婚を申し込んだ。しかし、ボーヴォワールも「あなた」もその提案を受け入れなかった。

「必然の愛」に目覚めたサルトルとボーヴォワールは、主体的に互いに愛しあい、時間の経過と共に互いの愛を深め合いながら、揺るぎない愛の関係を築こうとした。しかし互いにもう一人の自分を見出す「理想的なカップル」はその永遠の愛を結婚から切り離し、結婚しないことを堅持してもいた。この点において、倉橋はボーヴォワールと同じ考え方を示している。倉橋はエッセイにおいて、「結婚の問題は、なによりも「生活」の問題です。それはかならずしも「愛」を条件としません。あるいは、愛がありさえすればその果実として出てくるといってもありません。この場合、結婚は愛の死滅のあとにはじまる共同生活であり、ここで必要なものはや愛ではなく、人間としての聡明さと妥協の技術なのです」¹⁵⁴と愛と結婚の関係に対する認識を端的に示している。

ボーヴォワールは、結婚の申し出を拒否した理由について、愛を結婚から切り離すという考え方が働いたことに加えて、「私たちがいわゆる正当な男女関係に入る重要なひとつの動機があるとすれば、それは子供を欲しいという場合だったが、私たちは子供を欲していないかった」（『女ざかり』上、六八頁）¹⁵⁵と述べたうえで、子供を生まない理由の一つとして、「私は子供たちから無関心、あるいは敵意を予期していた。なぜなら私は家庭生活にたいして激しい嫌悪を抱いたことがあるからである。そんなわけでどんな愛情の幻想も私を母性に誘うことはできなかった」（『女ざかり』上、六九頁）¹⁵⁶ことを挙げている。

ボーヴォワールはまた、「私は両親と仲よくはしていたが、両親は私にたいする支配力をすっかり失っていた。またサルトルは全然父親というものを知らず、母親も彼の祖父も、彼を束縛する掟ではなかった。ある意味において私たちはふたりとも家なしであり、このシ

チュエーションを自分たちの原則とした」(『女ざかり』上、一三三頁)¹¹⁾とも述べている。それに対して、「あなた」は失踪する「かれ」を探し、最初に出会った鎌倉の海岸で彷徨った時、子どもが犬に怖がり、泣き出す場面を目撃する。「あなた」は「家畜の性器よりも醜悪」に見える顔と表現し嫌悪を示した後、「ああ、あんな子どもなんかたくさんだ、だから……あなたは子どもを生んで育てる結婚というものに近づく気にはなれない……」とボーヴォワールと同じ観点を示す。そして、電車や映画館で泣き出す赤ん坊に遭遇したときの、「そんなこと(そういう場所にけっして赤ん坊を運び込まないこと―引用者注)よりも生みはしないだろうに」(四〇頁)という感慨からも「あなた」の子どもを生まない決心を再確認することができる。

また、「イエ」を訪問するかどうかで迷うとき、「あなたにとってもかれにとっても、家は帰還すべき巣ではなくつねに脱出すべき檻だったから」という一節がある。「あなた」が常に家からの脱出を謀っているのは、「まるでミイラになった」ように瘠せている母の存在が大きいと考えられる。「彼女のあらゆる動作、眉の動き、右端をちよつとひきあげて、やさしいがかすれた声をだす唇、それらのなかにあなたは目だたない非難と自虐の針をみいだす」(五八頁)と描かれる母は、父に対して劣等感を持つと同時に、良家の子女らしく行動しない「あなた」と「妹」に裏切りを感じる怨恨の塊である。「あなた」が「浮世絵風の厚化粧」に身を包まれた、「江ノ島の弁天像をおもわせる」悠里子の母の顔に、「老化した悠里子をみた」(四〇頁)のと同じように、「あなた」も良妻賢母思想で武装された母の悲惨な姿に自分の未来を見出したのかもしれない。「あなた」が家庭生活に理想型を見出さなかったため、家庭を築く意味に悩まされ、家庭を築く自信が持てなかったのも何らの不思議もない。母親の轍を踏まないように、あえて結婚に踏み出さなかったのかもしれない。

五、書くことの意味

ボーヴォワールはオルガとサルトルとの《トリオ》関係に苦しんだあげく、『招かれた女』の創作に取りかかった。『女ざかり』において、「まず第一にオルガを紙の上で殺すことによって、私は彼女にたいして感じたかもしれない焦燥や悪意を水に流し、私たちのよい思い出に混じっている嫌な思い出を拭い去った。とくに、ピエールにたいする愛によって従属の状態に閉じこめられていたフランソワーズを、犯罪によって解放したことは、私自身の主体性を取り戻させたのである」¹²⁾(『女ざかり』上、三二七頁)とその心情を語っている。それに対して、『暗い旅』において、「あなた」は「かれ」を探し求めて、京都でさまよったあげく、「本格的に小説を書きはじめること」を考え始める。

たとえば、あなたは、これまでいつもあなたの精神を構成に似た関係で縛っていたかれの精神から解放されることによって、本格的に小説を書き始めることもできるのだ……（一六二頁）

「あなた」は、「かれの精神から解放」され、つまり「かれ」の失踪による裏切りから自立を果たし、小説を書くようになる。「あなた」が小説を書き始めることは偶然ではない。倉橋はエッセイのなかで、女が自我を実現する上での小説を書くことの重要性について、何度も繰り返して述べている。たとえば、倉橋は「青春の始まりと終わり」において、「あの異常に輝かしくらやみのなかの太陽」と青春を表現したうえで、「わたしにとって、「青春」の終わりとは小説を書き始めること」¹⁴³だったと述べている。「暗い旅」は「あなたが「共犯者」から離脱し青春を終え、少女から女へと成長する成熟物語と言えよう。」

今まで述べてきたように、非婚主義、他の異性との関係、運命的な出会い、一度きりの結婚話、セックスなしの愛、書くことによって解放されるといった要素を辿っていくと、倉橋の「暗い旅」に於ける「あなたがた」の関係はボーヴォワールとサルトルとの「契約結婚」を下敷きにしていることが分かる。しかし、それは表層的な「模倣」に留まらず、性と愛と結婚に対する認識においても、多少の差異はあるものの、「暗い旅」は『女ざかり』から強く影響されていると考えられる。二人ともセックスは愛の一つの道具にすぎず、セックスなしの愛こそ究極の愛であると愛のあり方を提示している。また、愛を提唱するが、それは結婚という器に入りきらないものであり、愛を結婚の条件とし、結婚は愛の結果とする考え方に異議を唱えている。そういった点において、「暗い旅」における性と愛と結婚に関する認識は『女ざかり』から受け継がれていることが分かる。

サルトルが提案した「契約結婚」は、サルトルが亡くなる一九八〇年まで五十年間も続いた。ボーヴォワールが、女好きのサルトルの度重なる偶然的な恋に自我を押し殺し、嫉妬や焦燥を耐え忍んだ末に、自由で対等な新しい男女関係を唱える「契約結婚」によってはたして新しい男女関係を作り上げたかどうか、大きな疑問として残される。二人の関係が五十年間も続いたのは、ボーヴォワールの妥協と犠牲が大きな要因の一つに数えられると考えられる。自由と自立を叫ぶボーヴォワールは結局欺瞞に富んだ「契約結婚」に束縛され、サルトルに振り回されるだけだった。倉橋の「暗い旅」においては、「かれ」の失踪により、ボーヴォワールとサルトルの関係を下敷きにした「あなたがた」の関係は終止符を打たれる。二人の関係を終わらせたことは、倉橋がボーヴォワールに送る最大の心遣いであったとも考えられる。倉橋は「契約結婚」という新しい男女関係に憧れながらも、その限界を感じた

の
か
も
し
れ
な
い
。

⁸⁸本稿における「私の『第三の性』」の引用は初出『中央公論』（七五巻八号、中央公論社、一九六〇年八月）のものによる。そして『第二の性』の引用は『第二の性』全五巻（生島遼一訳、新潮社、一九五三年～一九五五年）によるものである。

⁸⁹瀬沼茂樹「文芸時評（中）稀有な倉橋の才能 女流作家の諸作品」『図書新聞』一九六〇年七月二三日、三頁

⁹⁰中山和子「批評の荒野 1960—「バルタイ」から「囚人」まで—」『昭和文学研究』三九号、昭和文学会、一九九九年九月、六一頁

⁹¹たとえば、「こうして女とはボーヴォワールのいうように《第二の性》である」（二六六頁）、「ボーヴォワールは《人は女に生まれない。女になるのだ》と知っている」（二六七頁）などがある。

⁹²倉橋由美子『倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽』新潮社、一九七五年一二月、一五六～一五七頁

⁹³池上玲子「「わたし」と「わたし」、鏡像関係への欲望—倉橋由美子一九六〇年代—」『語文』一二八号、日本大学国文学会、二〇〇七年六月、三九頁

⁹⁴倉橋由美子「わたしの文学と政治」（初出「わたしの文学と政治 反旗をかざして」『毎日新聞』一九六一年一月九日）『わたしのなかのかれへ』四一頁

⁹⁵井上たか子「『第二の性』の翻訳と受容について—発表要旨、および関連報告—」『女性空間』一七号、日仏女性資料センター、二〇〇〇年六月、九〇頁。例えば、ローラン・ガニュバンは、『第二の性』の当時の成功の要因について、次のように述べている。「同書の力と決め手になっているのは、正確な記述と内容の豊かさである。同書は一部の人が言うような、激越な反良俗の書物であろうか。今日の目から見て、そのことを判断するのは難しいが、読者にとってシモーヌ・ド・ボーヴォワールをかくも魅力的で身近な存在にしているのは、先に述べてきたように著書の声、つまり、時には少々乱暴なほどに率直であるにもかかわらず、卓越した誠実さが要求する様々な要素と結合した正真正銘の感受性、非常なまでに繊細な感性を読者が感じ取ってしまう声なのである」。原文は次の通り。Sa précision, sa richesse sont une force et un atout; est-il si violent et choquant que certains l'ont prétendu? C'est difficile à dire aujourd'hui, mais ce qui nous rend Simone de Beauvoir si attachante et proche, c'est cette voix dont nous avons déjà parlé, où nous percevons, malgré une franchise un peu brutale parfois, des accents d'une réelle sensibilité, d'une grande délicatesse de sentiments, associés à des exigences d'honnêteté

et de véracité peu communes. (Laurent Gagnebin, *L'athéisme nous interroge: Beauvoir, Camus, Gide, Sartre*, Paris:Van Dieren Editeur, 2009, p.82.)

⁹⁶井上たか子は前掲論において、「第一に、旧訳では原書の構成を無視し、原書第Ⅱ巻がⅠ〜Ⅲ巻に、原書Ⅰ巻がⅣ〜Ⅴ巻になっているため、「結論」の後に「序文」がくるという奇妙な構成になっている。さらに、意味が全く正反対に訳されている場所があり、著者の論理の流れがつかみにくい。第二に、翻訳の文体が不統一で(複数の訳が寄せ集められている)、ボーヴォワールの簡潔な文体を反映していないばかりか、当時の男性の視点を反映してか、不適切な訳語が多く、結果として原文を曲解している。」(八九頁)とする。

⁹⁷フランス思想・文学研究者を中心とする延べ二〇人からなる女性グループの実に一〇年を要した翻訳の共同作業の成果である。二〇〇一年に新潮社によって文庫化。

⁹⁸前掲論 井上たか子「『第二の性』の翻訳と受容について―発表要旨― および関連報告―」八九頁

⁹⁹佐藤浩子「ボーヴォワール―『第二の性』と母性―」『川村学園女子大学女性学年報』三号、二〇〇五年一〇月、四四頁

¹⁰⁰前掲論 佐藤浩子「ボーヴォワール―『第二の性』と母性―」四四頁

¹⁰¹原文は次の通り。C'est pourquoi nous les avons si longuement étudiées: elles sont une des clefs qui permettent de comprendre la femme. Mais ce que nous refusons, c'est l'idée qu'elles constituent pour elle un destin figé. Elles ne suffisent pas à définir une hiérarchie des sexes; elles n'expliquent pas pourquoi la femme est l'Autre; elles ne la condamnent pas à conserver à jamais ce rôle subordonné. (Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe I*, Paris:Gallimard, 1949, p.70.)

¹⁰²原文は次の通り。Un monde où les hommes et les femmes seraient égaux est facile à imaginer car c'est exactement celui qu'avait promis la révolution soviétique: (Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe II*, Paris:Gallimard, 1949, p.569.)

¹⁰³原文は次の通り。Certainement, il ne faut pas croire qu'il suffise de modifier sa condition économique pour que la femme soit transformée: ce facteur a été et demeure le facteur primordial de son évolution; mais tant qu'il n'a pas entraîné les conséquences morales, sociales, culturelles, etc. qu'il annonce et qu'il exige, la femme nouvelle ne saurait apparaître; (Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe II*, Paris:Gallimard, 1949, p.570.)

¹⁰⁴原文は次の通り。C'est encore par une crise difficile que la femme échappe à l'emprise

de l'espèce; entre quarante-cinq et cinquante ans se déroulent les phénomènes de la ménopause, inverses de ceux de la puberté. (...) Certaines femmes fixent alors de la graisse dans leurs tissus; d'autres se virilisent. Chez beaucoup un équilibre endocrinien se rétablit. Alors la femme se trouve délivrée des servitudes de la femelle; (...) On a dit parfois que les femmes âgées constituaient «un troisième sexe»; et en effet elles ne sont pas des mâles mais ne sont plus des femelles; et souvent cette autonomie physiologique se traduit par une santé, un équilibre, une vigueur qu'elles ne possédaient pas auparavant. (Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe I*, Paris:Gallimard, 1949,p.68)

¹⁰⁵ 倉橋由美子「「家庭論」と私の「第二の性」 「男性の女性化による」 平和、それは人類の静かな衰滅の別名」 『法政大学新聞』一九六三年一〇月二五日、七頁

¹⁰⁶ 前掲書、倉橋由美子『倉橋由美子全作品』 暗い旅・真夜中の太陽』四七頁

¹⁰⁷ 原文は以下の通り。L'homme ne s'intéresse que médiocrement à son intérieur parce qu'il accède à l'univers tout entier et parce qu'il peut s'affirmer dans des projets. Au lieu que la femme est enfermée dans la communauté conjugale : il s'agit pour elle de changer cette prison en un royaume. Son attitude à l'égard de son foyer est commandée par cette même dialectique qui définit généralement sa condition: elle prend en se faisant proie, elle se libère en abdiquant; en renonçant au monde elle veut conquérir un monde.

(Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe II*, Paris:Gallimard, 1949,p.230.)

¹⁰⁸ アリス・シュヴァルツァー『ボーヴォワール対談集一九七二〜八二 第二の性 その後』 福井美津子訳、青山館、一九八五年六月、六六頁

¹⁰⁹ 倉橋由美子「女性講座」『わたしのなかのかれ〜』六二頁

¹¹⁰ 倉橋由美子「誰でもいい結婚したいとき」(初出「誰でもいい結婚したいとき」『愛のための結婚』という幻想を捨て去ったとき)と、女が徹底的に男をえぢるチャンスだ』 『婦人公論』四九卷一二号、中央公論社、一九六四年(二月)『わたしのなかのかれ〜』講談社、一九七〇年三月、一七〇頁

¹¹¹ 原文は以下の通り。Tous ces exemples suffisent à montrer qu'il n'existe pas d'«instinct» maternel : le mot ne s'applique en aucun cas à l'espèce humaine. L'attitude de la mère est définie par l'ensemble de sa situation et par la manière dont elle l'assume. Elle est, comme on vient de le voir, extrêmement variable. (Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe II*, Paris:Gallimard, 1949, pp.323~324.)

¹¹² 前掲書、アリス・シュヴァルツァー『ボーヴォワール対談集一九七二〜八二 第二の性

その後』七一頁

三三 江藤淳「海外文学とその模造品―ビュートルと倉橋由美子の関係」『東京新聞』一九六一年一月九日、八頁

三四 倉橋由美子「わたしの小説作法」(初出「私の小説作法」「ことば」という音 即興演奏家のように)『毎日新聞』一九六五年四月一八日)において、「わたしがこれまでに書いた、また書こうとしてきた小説は大きくわけて二つのタイプになるようです。ひとつは幻の城をつくって世界の意味に形をあたえるもの、いまひとつは「わたし」のなかをほりぬいていくもの。第一のタイプでは、しばしばKやLという記号であらわされる人物を登場させます(それでわたしはこれをK―L型の小説と名づけています)。かれらは独立変数であって、わたしの定めた仮説的状況のなかで動きまわり、わたしはかれらの行動を観察し記述します」とある。(『倉橋由美子全エッセイ集 わたしのなかのかれへ』一九三三頁)

三五 齊藤金司「倉橋由美子論―『暗い旅』を中心として―」『主潮』一巻、一九七三年一月、三〇頁

三六 倉橋由美子「作品ノート5」『倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽』新潮社一九七五年一月 二二九頁。また「そのうちに、「暗い旅」を評するときには、ビュートルのLA MONDIFICATIONに似ているが、と断ってからその少女小説ぶりに文句を付けるのが定石となった。それでもこれが少女小説だと断じた批評はついに現れなかったようである」(同書二二二頁)といった言及もある。

三七 本稿における「暗い旅」『娘時代』『女ざかり』の引用はそれぞれ『倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽』(新潮社、一九七五年一月)、『娘時代 ある女の回想』(ポークウォール、朝吹登水子訳、紀伊国屋書店、一九六一年六月)、『女ざかり ―ある女の回想―』(上・下巻)(ポークウォール、朝吹登水子・二宮フサ訳、紀伊国屋書店、一九六三年五月)によるものである。

三八 池上は「傍証として、白井浩司「最近のフランス出版界」(『朝日新聞』一九六一年二月二二日)において、「ポークウォール女史の回想録『働きざかり』(『女ざかり』は邦訳が出版される前までは『働きざかり』と訳されていた)がフランス本国において「最近数ヶ月連続してベストテンにはい」っているとの紹介があること、(中略)『婦人公論』(一九六一・六)掲載の手記において翻訳を仕事とする主婦が「働きざかり」を読んだとの記述があることなどから、倉橋が自伝を読んでいた可能性は少なくない」(池上玲子「わたし」と「わたし」、鏡像関係への欲望―倉橋由美子一九六〇年代―)『語文』一一八輯、

二〇〇七年六月（四七頁）と述べている。

¹¹⁹ 原文は次の通り。 (...) mais elle savait que mes rapports avec elle et avec Sartre n'étaient pas symétrique. Nous placions sa jeunesse plus haut que notre expérience: son rôle était tout de même celui d'une enfant, aux prises avec un couple d'adulte qu'unissait une complicité sans faille. (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.294.)

¹²⁰ 原文は次の通り。 (...) nous n'avions pas même envisagé de nous enchaîner à des habitudes communes : l'idée de nous marier ne nous avait donc pas effleurés. (...) Le célibat pour nous allait de soi. (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, pp.91-92.)

¹²¹ 「女と男の時空」編集会『年表・女と男の日本史』藤原書店、一九九八年一〇月、三二―三三頁

¹²² 原文は次の通り。 (...) l'année 1929, d'où datent à la fois la fin de mes études, mon émancipation économique, mon départ de la maison paternelle, la liquidation de mes anciennes amitiés et ma rencontre avec Sartre, a ouvert évidemment pour moi une ère nouvelle. (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.409.)

¹²³ 原文は次の通り。 Et puis, une grande chance venait de m'être donnée (...) Sartre répondait exactement au vœu de mes quinze ans : il était le double en qui je retrouvais, portées à l'incandescence, toutes mes manies. (...) Avec lui, je pourrais toujours tout partager. Quand je le quittai au début d'août, je savais que plus jamais il ne sortirait de ma vie. (Simone de Beauvoir, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Paris: Gallimard, 1964, p.490.)

¹²⁴ 原文は次の通り。 Je ne prétais à mon futur mari aucun trait défini. En revanche, je me faisais de nos rapports une idée précise : j'éprouverais pour lui une admiration passionnée. En ce domaine, comme dans tous les autres, j'avais soif de nécessité. Il faudrait que l'élu s'imposât à moi, comme s'était imposée Zaza, par une sorte d'évidence; (...) J'aimerais, le jour où un homme me subjuguerait par son intelligence, sa culture, son autorité. (Simone de Beauvoir, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Paris: Gallimard, 1964, p.203.)

¹²⁵ トリル・モイ『ボーヴォワール 女性知識人の誕生』大橋洋一、片山亜紀、近藤弘幸、坂本美枝、坂野由紀子、森岡実穂、和田唯訳、平凡社、二〇〇三年八月

¹²⁶ 倉橋由美子「愛と結婚に関する六つの手紙」（第四の手紙―Kに、一九六一年二月二日）

『わたしのなかのかれへ』八七頁

¹²⁷前掲書、アリス・シュヴァルツァー『ボーヴォワール対談集一九七二〜八二 第二の性その後』一一二〜一二三頁

¹²⁸原文は次の通り。(…) à Tours, le dimanche, nous étions trop timides pour monter, en plein jour, dans une chambre d'hôtel; (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.75.)

¹²⁹原文は次の通り。(…) dans le train Tours-Paris, une main anonyme pouvait éveiller au long de ma jambe un trouble qui me bouleversait de dépit. (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.76.)

¹³⁰原文は次の通り。(…) je me retournerai : un homme, un vagabond, couché dans les buissons, les yeux fixés sur moi, se contenterait. (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.77.)

¹³¹原文は次の通り。Se mettre au lit avec un homme qu'on n'aime pas, c'est une expérience sur laquelle je manquais de lumière; (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.85.)

¹³²倉橋由美子「女性講座」『わたしのなかのかれへ』六一頁

¹³³倉橋由美子「わたしの「第三の性」」『わたしのなかのかれへ』二九頁

¹³⁴総合女性史研究会編『日本女性の歴史 性・愛・家族』角川選書、一九九二年三月、二四二頁

¹³⁵結婚した夫婦が別れ住んで初めて満ち足りた夫と妻になったという「別居生活の愛憎」、もはや結婚などという「安息」は不必要だと叫ぶ「終着駅のない三十娘」、愛する女を所有物として“妻”と呼ぶことはできない「入籍拒否の夫婦関係」などが紹介されている。

¹³⁶『婦人公論』五二六号、一九六〇年九月、一二四頁

¹³⁷倉橋は「作品ノート」において、「第二の『挽歌』」(東都書房で出した原田康子のバストセラ―引用者注)を書く能力がないことにかけては私などその筆頭であることは自分が一番よく知っていたが、このT氏(東都書房の編集者―引用者注)の余りの熱心さに感染して、こちらも山師か「呼び屋」のような気分になり、バストセラ―を狙って長篇少女小説を書くことにした」(二二九頁)とバストセラ―を狙っている心情を語っている。

¹³⁸前掲書、倉橋由美子「愛と結婚に関する六つの手紙」『わたしのなかのかれへ』七六〜七七頁

¹³⁹原文は次の通り。Un seul motif eût pesé assez lourd pour nous convaincre de nous

infliger ces liens qu'on dit légitime : le désir d'avoir des enfants; (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.91.)

¹⁴⁰ 原文は次の通り。 (...) j'escomptais de leur part ou de l'indifférence, ou de l'hostilité tant j'avais eu d'aversion pour la vie de famille. Aucun fantasme affectif ne m'incitait donc à la maternité. (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.92.)

¹⁴¹ 原文は次の通り。 Je conservais de bonnes relations avec mes parents, mais ils avaient perdu sur moi toute emprise ; Sartre n'avait jamais connu son père ; ni sa mère ni ses grands-parents n'avaient à ses yeux incarné la loi ; (Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.23.)

¹⁴² 原文は次の通り。 D'abord, en tuant Olga sur le papier, je liquidai les irritations, les rancunes que j'avais pu éprouver à son égard; je purifiai notre amitié de tous les mauvais souvenirs qui se mélangeaient aux bons. Surtout, en déliant Françoise, par un crime, de la dépendance où la tenait son amour pour Pierre, je retrouvai ma propre autonomie.

(Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960, p.387.)

¹⁴³ 倉橋由美子「青春の始まりと終わり」『わたしのなかのかれく』一六〇頁

第五章 解体した母性神話

本論文の第四章までに取り上げた倉橋の作品群に現れる登場人物像は、これまで見てきたように、生島訳に起因する誤解も含む可能性があるとはいえ、おおむねボーヴォワールの考え方に影響を受けた部分が大きく、その分析や解釈にはボーヴォワールの著作が参考になった。本章で取り上げる作品群の登場人物たちは、ボーヴォワールの著作の影響下にあるとは言い切れない人物たちであり、ボーヴォワールの考え方とは別の観点から分析を試みたいと思う。結局、倉橋が描いた登場人物たちは、すべてがボーヴォワールの影響下にあるわけではないことになるのであるが、全体から見た比率上は、ボーヴォワールの影響は大きかったことには変わりはないのである。

第一節『アマノン国往還記』「どこにもない場所」「蠍たち」における肥満した母親像『アマノン国往還記』（一九八六）は「暗い旅」（一九六一）、「聖少女」（一九六五）、「スミヤキストQの冒険」（一九六九）に続く、倉橋由美子の第四作目の書き下ろし作品である。一九八六年八月に新潮社によって刊行され、後の一九八九年一月に同社によって文庫化された。一九八七年第一五回泉鏡花文学賞の受賞作品でもある。『アマノン国往還記』に登場する母親エイオスは肥満した体つき、旺盛な食欲、不気味な眼などの持ち主として表象されている。

倉橋の作品、特に「どこにもない場所」（一九六一）、「蠍たち」（一九六三）をはじめとする初期作品において、女主人公の母親は過食、肥満体に表象されることが多い。すなわち三作の母親像はその表現に多少の差は認められるものの、肥満体、過食などの要素が共通している。そして倉橋文学における女性像を検討するにあたっては、そのような肥満した母親像が重要な位置を占めていると考えられる。しかし、山崎真紀子が「戦後日本における〈肥満文学〉」において、「院長夫人も同様に肥満した巨体を持ち、去勢された院長と対照的に感化院の職員たちと性関係を結ぶことによって、夫人の暗黒とも闇とも言われている肉体に他者を取り込む。だが、このような過剰なる力を持つ院長と院長夫人は、院児たちの暴動によってあつけなく殺害され、姿や痕跡は一切消去されてしまう。思想性を持つ肥満者、暗黒や闇を持つ肥満者は、意外にも虚弱な存在として舞台から降りてしまうのだ」¹⁵¹と「スミヤキストQの冒険」に登場する院長と院長夫人に言及する以外に、これまでに肥満した人物についての研究はほとんどなかった。

本節では、『アマノン国往還記』において母親がどのように表現されているかに焦点を当て、「どこにもない場所」「蠍たち」の母親像と比較することによって、共通点と相違点を明らかにし、さらに、肥満した母親像はどのようなプロセスを経て生み出されたか、そしてそ

れが何を映し出すものなのかを検討したいと思う。

一、肥満した母親と瘠せた娘で完結された世界

『アマノン国往還記』において、外人の「Pも圧倒されるほどの重量をもつ巨漢」「目は肉に鋭く切れ込んだ傷跡のように細く、瞳も小さく、薄気味悪い光を放つ白眼」「Pを圧倒しようという勢い」（二二八頁）の「食欲の旺盛さ」（四二六頁）といった描写から、肥満した体つき、旺盛な食欲、不気味な眼などに表象されている母親エイオスの姿はありありと浮かび上がってくる。しかし、それはエイオスに限らず、「どこにもない場所」「蠍たち」をはじめとする初期作品にも多く見られる母親の姿である。

「蠍たち」では、母親は「悪霊でもたらふく喰ってふとつちやったとしかおもえないほどふとった」（二〇〇頁）ポンドはあったろうな肉の塊」（九頁）に加え、「家畜の鳴き声のような唸り声」、「蛇のような怖い眼」といった細かな描写、そして鶏の頭、「豚とも犬ともつかぬ奇妙な頭骨」、野菜を調理したスープを長生きする栄養食とし、「ぐわつと口をあけて鶏の頭に噛みつくのですが、それはみるみる痛ましいような音をたてて噛みくだかれて、原形を失った骨だけが皿に吐きもどされるのでした」（一七頁）と語られ、もはや鬼や鬼婆のような奇異な存在として異物化されていると言える。

「どこにもない場所」では、「白い半透明の豊富な肉づきをもつ」体、「食物を食べつくすと自分の排泄物でも食べべ」てしまう「豚みたいな食欲」、「顔のまんなかで、たがいに喰いあおうとしてにらみあっている」（二四頁）二つの眼、そして「妙な鼻唄をうたいながらからっぽの鍋をガス台にかけて何時間でも強火で煮て」いて、「鍋は憎悪にあぶられてまっかになる」（二五頁）といった表現から、肥満した体つきをもつ、恐ろしい母親像を窺うことができる。こうして三作における母親は共に過食、肥満を示している。その表現に多少の差は認められるものの、肥満体、過食などが共通していることが明らかである。三作ともに、母＝肥満した身体という等式のもとで物語が展開される。

そして、『アマノン国往還記』において、首相ユミコスは権力の座から引き下ろされることを恐れて、Pとエイオス暗殺も含めて対策を密謀する。「一にマネ、二にセックスだ。マネで事が解決すれば、それが一番で、駄目な場合は、私がエイオスにセックスのサービスを献呈することで妥協の道を探してみる」（四〇三頁）というPの提案も、結局うまく行かず、エイオスはセックスの最中に脳梗塞が誘発され、死ぬ。しかし、政界と財界の両方の力を持ち、神話的な太母^ミ、大地母神を思わせる「偉大にして巨大な母親」エイオスがセックスの最中で死ぬのは諷刺のきいた最後ともいえるだろう。

「蠍たち」は「おくさん」が首を吊られ、死ぬという悲惨な場面で終わる。「死刑囚は宙

に吊られて手と足を別々に振り動かす奇態な痙攣をはじめ、舌を出しました。まるで悪い霊が操人形に化けてコミカルなダンスを踊っているみたいで、わたしたちはおもわず手を握りあいましたが、ばばあは眼をむきだして踊りつつけているのです」(二七頁)というグロテスクなシーンで物語が閉じられる。

「どこにもない場所」では、生きたまま腐敗しつつある母親は「S病院では便宜上、死亡したものとみな」(九八頁)され焼却される。その焼却の場面は直接描写されないが、Lの元夫である男を焼き殺す場面はそれを思わせる。それは、第一に、「豚みたいな体臭」「旺盛な食欲」「雑食」「まるでからだ全体が食物のつまった胃袋のよう」(九七頁)といった元夫の描写は母親を想起させるからである。第二に、両者ともに意識があるにもかかわらず焼き殺されることが仄めかされるからである。第三に、「ああやつて母が食べるところをみてみると、殺意をかんじるほどですわ」(八六頁)というLの発言から、Lが母の死を願っていることが分かるからである。そのため、その場にいたLは病院の判断を批判せず、元夫を焼き殺すのに協力的な姿勢を示したように、母を焼き殺す作業にも積極的に協力したか、あるいはそうでなくても何らかの形で加担しているのかもしれない。『アマノン国往還記』は「どこにもない場所」と同じく、母親殺しに参加する場面は直接に描写されないが、女主人公が母親を殺す作業に何らかの形で加担していることが仄めかされている。

また、三作における家庭はすべて母子密着、精神的に父親不在の家庭即ち母と娘だけで完結された世界である。母と娘のみの場合、娘のモデルは只一人、母親しかいない。つまり娘にとつては母といるときの関係のパターンがすべてであり、それ以外のものすべてがなくなってしまうやすい。そして母親の方も娘との関係が行き詰まってしまいがちになる。倉橋は『アマノン国往還記』において、存在が認められる精子供給者以外に、男性をほとんど登場させていない。父親の存在が戸籍上だけのものとなり、必要な精子だけを残して男を事実上抹殺してしまう。すなわち、倉橋は『アマノン国往還記』において、母親が消されるまえに、父親も殺していると言っても差し支えないだろう。「どこにもない場所」において、父親は「婚姻の解消を家庭裁判に申したて」た、あるいは「若くて、外国人みたいなかんじの美人」(二三頁)と再婚すると噂されるが、作中に一度も登場しない。言い換えれば、父親はどこかで生きてはいるものの、物語には殆ど関わらず、存在していないに等しい。「蠍たち」には母親は一人親として登場する。家父長制を代表する父親が不在であることによって、たもつてきた父親の権威と太母の要素の均一性が壊され、父親の権威が失われ、家庭内に底流する太母の要素が強くなる。その結果、家庭内は完全なる母権世界となるわけである。子供は太母の渦に巻きこまれながら、同一視すべき強い父親像を欠くため、いつまでも母親に

つなぎとめられている。

二、〈肥満〉の象徴性とむさぼり喰うグレート・マザー

倉橋文学における母親像には、痩せ型と肥満型の全く違った二種類のものがある。しかし、むさぼり喰う肥満型の母親が圧倒的に多いなか、「暗い旅」における「まるでミイラになった」「痩せた」（五八頁）「あなた」の母親や、「瘠せた小柄な中年の婦人で、眼を吊りあがったようにみせる眼鏡のために、その顔は冷徹な魔女めいたものになっていた」（『ヴァージニア』二二八頁）『ヴァージニア』の母親を除けば、痩せ型の母親像はほとんど見られない。

山崎真紀子は前掲論において、「〈肥満〉のイメージは、（中略）お人好し、愚鈍、くいしんぼ、甘ったれ、意志の弱い成り行き任せの性格、恥さらしの肉体というステレオタイプ化された言葉が羅列している。また、脂肪から構成される乳房や妊娠時に陥りやすい肥満などからだろうか、〈肥満〉には母のイメージが多分含まれる」¹⁴⁶と〈肥満〉と母親像の関連性を指摘している。

母親の元型の特性は「母性」である。すなわち、まさに女性的なものの不思議な権威。理性とはちがう知恵と精神の高さ。慈悲深いもの、保護するもの、支えるもの、成長と豊饒と食物を与えるもの。不思議な変容―再生―の場。助けてくれる本能または衝動。秘密の、隠されたもの、暗闇、深淵、死者の世界、呑みこみ、誘惑し、毒を盛るもの、恐れをかきたて、逃れられないもの。―こうした母親元型に固有な性質を私は『変容の象徴』という著書の中で詳しく描き、それぞれにうまく当てはまる例を示しておいた。これらの両面的な特性を私はそこで、やさしく、かつ恐ろしい母として定式化した。¹⁴⁷

ここでユングは「母性」が両義的で、「慈悲深いもの、保護するもの、支えるもの、成長と豊饒と食物を与えるもの」という肯定的な性格と、「秘密の、隠されたもの、暗闇、深淵、死者の世界、呑み込み、誘惑し、毒を盛るもの、恐れをかきたて、逃れられないもの」という否定的な性格とを同時に持っていると指摘している。倉橋文学における肥満した母親像は、豊饒さから一見母性の肯定的な面を代表しているように見えるが、顔の表情、特に眼の表情やむさぼり喰う様子には疑いなく悪魔的なものがあり、否定的な性格を示していると考えられる。

① 眼と口

口は貪り喰い、裂き、のみ込む攻撃性を象徴するので、女性のもつ危険な（否定的な基

本性格』の特徴である。(中略) 豊饒さという性格は、栄養を与えてくれる容器としての女性に人間がかかわる肯定的な原体験である。そのため乳房が強調され、他方、又ミナスな性格は威圧するような眼に表現されることになる。眼は、眉毛と鼻とともに、これらの像に鳥のような顔貌を与える。¹⁴⁸

エリツヒ・ノイマンは〈原始の女神〉の重要な象徴的特色として、「口」「乳房」「眼」「眉毛」「鼻」などの部位を列挙している。「口」は「貪り喰い、裂き、のみ込む攻撃性」、「乳房」は「豊饒さ」「栄養を与えてくれる容器」、威圧するような「眼」は「又ミナスな性格」を象徴していると述べられている。三作の母親像において、顔立ちの中で眼だけが描写されているため、顔の全体像を構築するには眼の表現が重要であると考えられる。『アマノン国往還記』では、「肉に鋭く切れこんだ傷跡のように細く、瞳も小さく、薄気味悪い光を放つ白眼」、「爬虫類を思わせる冷酷無残な表情を湛えている目」(一一八頁)、「蠍たち」では「蛇よりも怖い眼」(一五頁)、「どこにもない場所」では、「顔のまんなかで、たがいに喰いあおうとしてにらみあっている」目(二四頁)として描写されている。また、口については具体的には描写されないが、むさぼり喰う様子を考えると、容易に想像できる。ノイマンの〈原始の女神〉像と照らし合わせると、口と眼の表現が合致している。すなわち倉橋の母親像はネガティブなグレート・マザーの要素を含んでいることが分かる。

② 食べ物の嗜好

「蠍たち」において、母親の「常食はラグビーのボールみたいな形のキュンメル・ブrootと、鳥と獣の頭を材料にしたポ・ト・フなんです。ちようど、特別大きな平鍋にはスープが煮たついで、金色の脂の表面に、ひどく恨みがましい顔をした鶏の頭が十数個、豚とも犬ともつかぬ奇怪な頭骨が熱湯のなかでころげまわっている」(一七頁)と描かれている。また「どこにもない場所」では、母親は「特異な匂いをもった羊の生肉とか軟体動物、そしてなによりも海鼠のような棘皮動物の穴にラードを詰め」(二五頁) たものを好んで食べる。さらに『アマノン国往還記』では、母親は「複雑な皺の多い、肉鍾乳石とも言うべき奇怪な姿をした豚の一種らし」い、「アマノン特産のメイサントンの丸焼き」(四二〇頁)を「わずかに動揺の色を見せたが、しかしそれを一掃しようとするかのように猛然と食べ」ている、食欲の旺盛さでPを圧倒しようという勢いだった」(四二六頁)と述べられている。ここで、「豚」「羊」「鶏の頭」「豚とも犬ともつかぬ奇怪な頭骨」に注目したい。

エリツヒ・ノイマンは前掲書において、インドで崇拜されてきたテリブル・マザー¹⁴⁹に言及し、それを「歴史的にみると、同種の女神の最初のタイプの一つである」と述べ、「地上

の生きとし生けるすべてを産み出すこの女性は、同時にそれらの命を自らの中に連れ戻し、犠牲を求め、罨や網でそれらを捕えるものでもある」¹¹⁸と否定的なグレート・マザーとして位置づけている。一八七一年春の大祭に加わったイギリス人の報告によれば、「毎日二〇頭の水牛、二五〇頭の山羊、二五〇頭の豚が寺院で犠牲に供された」らしい。また「毎日血の犠牲が供せられる」「カルカッタのカリグハートにあるカリの寺院」¹¹⁹では、動物を犠牲に供した後、犠牲の頭部だけを残すこの儀式がまだ続けられている。

この儀式は身の毛のよだつ汚物のただ中で行われる。血と土のまじった泥の中に、動物の頭が積みあげられ、女神の像の前におかれたトロフィーのように見える。そして犠牲を終わった者は家に帰り、犠牲の身体で宴会を行う。大女神は供え物の血だけを望むが、血は断頭された動物からすぐに流れ出すので、断頭が犠牲の形式となっている。それゆえ、「ヒトパデシヤ」や「カタサリトサガラ」に登場する歴史上の人物たちも頭を切り取るのである。もちろん、頭が全体を意味し、完全な犠牲を意味する。¹²⁰

テリブル・マザーは生命と血を求めて、貪り嘗め尽くす女神として表現される。テリブル・マザーにとつて、「命の液体である血は、すべての栄養を人間に贈って、年老いた大地の女神に新しい収穫の年に向けて新たな力と豊饒性を与える物である」¹²¹と解釈される。山羊や豚などを断頭して犠牲として捧げることを求めるテリブル・マザーのように、倉橋文学の肥満した母親たちは山羊、豚やそれらの頭骨を好んで食べている。特に「蠍たち」において、鶏の頭、「豚とも犬ともつかぬ奇妙な頭骨」、野菜を調理したスープを長生きする栄養食とし、「ぐわっと口をあけて鶏の頭に噛みつくのですが、それはみるみる痛ましいような音をたてて噛みくだかれて、原形を失った骨だけが皿に吐きもどされるのでした」と語られる母親像は、まさに断頭から血をむさぼり食うテリブル・マザーの化身のようである。

倉橋文学における肥満した母親像は、眼や口の表現や食べ物の嗜好といった特徴がテリブル・マザーのイメージと合致しているため、倉橋は肥満した母親の人物設定に意図的に貪り喰うグレート・マザーのイメージを取り入れた可能性が考えられる。

いままで述べてきたように、『アマノン国往還記』『蠍たち』『どこにもない場所』の三作における肥満した母親像には共通しているところが多い。第一に、三作の母親は共に過食や肥満を示している。第二に、母親殺しというプロットが共通している。第三に、父親が介入しない、母と娘だけで完結された世界が描かれる。倉橋文学における肥満した母親像を死の女神であるテリブル・マザーと照らし合わせてみると、眼や口の表現や食べ物の嗜好といっ

た点が合致していることが分かる。倉橋は人物設定を考えると、むさぼり喰う「テリブル・マザー」のイメージを持たせようとして、意図的に肥満の要素を取り入れたのではないかと考えられる。

第二節 「蠍たち」における母親殺し

本節では、母親殺しが最も主観的に実施された「蠍たち」を中心に、母娘関係に焦点を当て、母親像を明らかにし、また母親殺しはどのようなプロセスを経て産み出されたものであるかを読み解いていく。前にも述べたが、ユングは「母性」が両義的で、「慈悲深いもの、保護するもの、支えるもの、成長と豊饒と食物を与えるもの」という肯定的な性格と、「秘密の、隠されたもの、暗闇、深淵、死者の世界、呑み込み、誘惑し、毒を盛るもの、恐れをかきたて、逃れられないもの」という否定的な性格とを同時に持っている指摘している。聖母マリア的な母性像は母性の本来あるべき姿として唱えられてきたが、しかし、ユングが述べたように、母性の基本的性格は、単に肯定的な側面だけをふくむわけではない。「蠍たち」の母親である「おくさん」が、「著名な財界人の婦人、あるカソリック系女学院の名誉理事」から「豚のようなもの」「ばばあ」へと変身したように、「慈悲深いもの、保護するもの、支えるもの、成長と豊饒と食物を与えるもの」といった献身的母性像に取って代わり、変容的性格が優位に立つネガティブな母親像となる。斉藤環は萩尾望都との対談で、母娘関係の難しさを語っている。

親子関係には父と息子関係もあれば父と娘関係もあるし、母と息子関係と言ったようにいろいろあるわけですけど、私の臨床医としての経験からすると、どうも母と娘関係というのはそのなかにあってもかなり特殊なものではないかと思うんですね。もちろんどんな親子関係もそれなりに複雑なものですけど、母と娘の関係がいちばん割り切れないものを含んでいるという印象を受けました。いろいろな資料を調べてみても、やはりいちばん書かれているのは、母娘の難しさについてのものですね、こうしたのは日本でも結構読まれていますし、ヨーロッパでもベストセラーになっています。¹⁵⁴

そして、このような母―娘という関係の特殊性を考慮すると、母親殺しの背景にはそういった複雑な関係ゆえにしかありえない葛藤もあると考えられる。というのは娘は母親と同じ身体性を共有しているからである。

明白な理由によって、女はとくにすぐれて容器として体験される。女とは、そのへちで子供を妊娠、性行為において男がそのへちへ入るものであるから、女が身体―容器と表現することはまことに自然である。

子供をかくまい、包みこむ身体―容器に女の人格を同一視することは、女性の存在の基礎である。それゆえ女は、ただ単にその中に何ものかを包みこむ容器であるばかりではない。女にとつても男にとつても、その中で生命を形作り、生きとし生けるものを妊娠、産み出し、やがて世界に送り出すへ生命―容器そのものなのである。¹⁵⁵

このように、エリツヒ・ノイマンは容器象徴として経験されることを女性性の基本的性格としている。従つて、女性Ⅱ身体Ⅱ容器という等式は女性性についての根本的な象徴等式と見なされる。このような視点から見た場合、倉橋文学における母親と同じ肉体を持つ娘にとつて、母親の身体はどのように映るのだろうか。

じつさい無益な労働で、目の前にうずくまっている奇怪な肉をみると、あらゆる希望も消えていくおもいでした、いつそその肉の割れめからはいこんで、光のない胎内で、生まれるまえの生活にかえりたいとおもったほどでした。（「蠍たち」一八頁）

ひとはだれでも、自分の存在をこの世界に排泄した存在に復讐を加えることを願うものではありませんかしら？殺意ですか？ああ、それなら生まれたときから殺意でいっぱい、わたしは他人への殺意だけで生きてきましたわ。（「蠍たち」三七頁）

あたしはいままであたしがいた場所、紐つきの胎盤、この世界から逃げだしたいのです。ここにあるのは別の世界をつくりたいのだから。なにもない、どこにもない場所にいつて、世界の贖物をつくること、ある形を生みだすこと……（「どこにもない場所」四二頁）

生命を生み出す子宮をイメージさせる「穴」、子宮の醜さが赤裸々に表現される衝撃的な場面である。母とおなじ身体をもつゆえ、「光のない胎内」「奇怪な肉」「暗い穴」といったネガティブな視覚表現は母親の身体にというより、むしろ女としてセクシュアルな存在であることに対する根深い嫌悪感（女性嫌悪）である。「どこにもない場所」において、しは常に吐き気を感じるのも、食べ物を取り入れるのを拒絶するのも、身体の方を殺したいからだと発言している。なぜ身体なのか、それは自分の女性性への嫌悪を、身体を殺すことによつて表明するためである。言い換えれば、母親と自分が同じ肉体を持ち、母親が自分の首から下の肉体と、肉体すべての表面に侵食してくることに、嫌悪感を抱いているのである。

『アマノン国往還記』において、首相ユミコスは権力の座から引き下ろされることを恐れて、Pと対策を講じる。集団育児であるため、アマノン国においては、母娘関係は希薄化しつつあり、娘は母に対して慕う気持ちも嫌悪する気持ちもない。それに対して、「蠍たち」「どこにもない場所」においては、倉橋の女主人公の心には、普通の子供が反抗期に感じる以上の、強い嫌悪と憎しみが母親に対してあるということになる。さてその憎しみの内実とは何だろうか。

娘は母を女性性、つまり因習的に女性に割り当てられて来た属性の権化とみなす。子どもを産む以外に何の能力もないという性格付けこそ女性性であり、そういう刻印を押されて産まれてきたことを娘は呪わしく思っているのである。娘たちが望むのは、男性的なもの考え方、男性的な知識の体系、そして男性にだけ認められている機会である。このような男性性を拒まれて、娘たちは母親を軽蔑と憎悪の念を込めて見つめる。それは母親が女性であり、女性のあるべき姿とされているものを受け入れてしまったためである。別の言い方をすれば、母が男性的になれなかったため、そしてそれゆえに男性性を娘に与えられなかったためである。¹⁵⁶

「蠍たち」において「ある畜地」で、「母親のほうも子どもを生む能力を失ったとき、子どもは母親の穴に融けた鉛を注ぎこんで殺す」という母親殺しの習慣が紹介される。そういう習慣が成り立っているのは、榊が言う「子どもを産む以外に」母親には「何の能力もない」という社会一般における女性への性格付けによると考えられる。以上述べてきたことをまとめると、三作に登場する娘は、自分が女性であること、自分の身体を受け入れられないことから、自分が産まれたことに対して感じるやり場のない嫌悪や憤りをいだし、やがて自分とおなじ身体をもつ母親、自分をこの「絶望」的な世界に産んだ母親へと向けることになる。と考えられる。自意識の強い倉橋由美子であるが、作品のなかで母親殺しを頻繁に登場させるのは、個々の母親の具体像というより、むしろそういった「女性性、つまり因習的に女性に割り当てられて来た属性の権化」と見なされる母親全体に対して公然と抗議しているからであると考えられる。

深層的原因

フロイトはギリシャ悲劇オイディプスの物語から人間が超えるべき普遍的なエディプス・コンプレックス¹⁵⁷を読み取り、父殺しや近親相姦の願望を人類に共通する心理であると考えた。フロイトは『エロス論集』において、「少女のエディプス・コンプレックスは、ペニ

スをもつ少年のコンプレックスよりも、はるかに単純である。自分を母親の位置におき、父親に対して女性的な姿勢を示すという範囲を越える場合はほとんどないようである¹⁵⁸⁾とし、少女のエディプス・コンプレックスの転換過程を以下のように述べている。

しかしこの頃から少女のリビドーは、ペニス⇨赤子という象徴方程式に従って、新しい位置に進んでゆく。少女はペニスへの願望を放棄して、これを赤子への願望に転換する。そしてその目的で父親を愛の対象とするのである。こうして母親は嫉妬の対象となり、少女から小さな一人の女性が誕生する。ある分析結果を信じていることができるとすれば、このような新しい状況において、ある身体的な感覚が生じてくるのであるが、これは女性の性の装置がいちはやく目覚めたものと判断することができる。この父親への愛着が失敗して、後に放棄しなければならなくなると、父親との同一化が生まれる可能性がある。この父との同一化が起こると、少女は男性コンプレックスに逆戻りし、場合によっては父親に固着することになりかねない。¹⁵⁹⁾

少女はペニスをあきらめる代償として、父との間に生まれる赤子を求めるようになると同時に、その邪魔者である母を嫉妬する。すなわち近親相姦の願望が生じることになる。しかしその後父への愛が挫折するにもかかわらず、父との同一化が生まれる可能性があるというフロイトが指摘している。この論理をもって、父への禁断の愛、近親相姦のモチーフを多く取り入れた作品の女主人公の心理を説明することもできるが、母親殺しの心理に関しては解釈しきれない部分が多く残る。

フロイトのエディプス・コンプレックス理論に対してユングは女性の場合、男性とは対照的なものであり、女性のエディプス・コンプレックスとして「エレクトラ・コンプレックス」¹⁶⁰⁾を提起した。そのもととなった物語は『エレクトラ』（エレクトラは、愛人と企んで父を殺した母に復讐する物語）である。ユングは娘のもつ父親への愛と母親への憎しみという、男性の場合と正反対の、女性のコンプレックスを「エレクトラ・コンプレックス」と呼んだ。またユング心理学を日本に紹介した河合隼雄は、ユングが言う人類共通の集合的無意識のうち存在する母親の元型である「グレート・マザー」がなぜ殺されなければならないのか、その太母刺殺の主題について次のように指摘している。

無意識の状態から意識が成立し、そして自我が世界中の多くの創世神話にあるように、最初の混沌とした状態、そしてそれに続く英雄の出現による怪物（多くの場合龍）退治の話

として表される。この自我形成の過程を心像の世界において追及したものとしては、ノイマンの著作があるが、それについては他の機会に述べることとして、ともかく、ノイマンも指摘するように、ここに太母の刺殺の主題が認められることに注目したい。すなわち、自我が主体性をもって確立してゆく過程において、それをあくまでも自分の胎内にとどめ、呑み込んでおこうとする太母との戦いが経験されなければならないのである。この心像の世界においては太母の像の殺害という強烈な表現で表されることは、実際生活においては、家を離れ、母のもとを去って異性と結婚し独立してゆくことに示される。

161

この英雄の誕生は、無意識から分離された意識が、その自立性を獲得し、人格化されることの顕現であると考えられる。次に生じる怪物退治をフロイトが、エディプス・コンプレックスへと還元して解釈したことは周知のことである。これに対して、ユングはこの神話は個人的な父と子の対立という肉親関係に還元することに反対し、この怪物を人類に普遍的な母なるもの、父なるものの原型的な象徴として理解した。つまり、怪物殺しは母親殺し、父親殺しの両面をもち、母親殺しは、自我を呑みこもうとする太母との戦いであり、無意識の力に抗して、自我が自立性を獲得するための戦いであると解釈したのである。それに、父親殺しは、父なるものとして表される文化的社会的規範との戦いであり、自我が真の自立を得るためには、無意識からだけではなく、文化的な一般概念や規範からも自由になるべきであり、そのような危機的な戦いを経験してこそ、自立が達成し得ると考えたのである。¹⁶²

河合隼雄は「自分の胎内にとどめ、呑み込んでおこうとする太母との戦い」¹⁶³を、自我が主体性をもって確立していく過程において欠かせない経験とする。また、その母親殺しを「童退治」という英雄神話と重ね、この鬼や竜というのが、自分を呑みこもう、食い殺そうとするネガティブ・グレート・マザーの象徴であると指摘する。そして、母親殺しが太母からの自我の自立を象徴する一方、父親殺しは古い文化を否定して新しい文化を創造する心の働きを象徴するものであるとし、「母親殺し」や「父親殺し」は愛の挫折や愛の倒錯から生まれるのではなく、つまり、個人的な感情云々から生ずるエピソードではなく、「より元型的な心のメカニズム」、誰もが通る道として捉えている。

菅聡子は「女流作家・Lの微笑——倉橋由美子初期作品をめぐって——」において、なぜ母親を殺害せねばならないのかについて、「母」の殺害。父の秩序によって統治されている「世界」で存在するための認定証を得るために「母」なるものの抹殺を企てている¹⁶⁴のだ

という結論を下している。しかし、Lたちが母殺しを実行したのは、はたして〈世界〉復帰するためだろうか。母親殺しはグレート・マザーからの自我の自立を図る行為であると先ほど説明したが、倉橋にとってその自立とは何であるか、それは倉橋の「反世界」という小説観と深いつながりを持っていると考えられる。

小鹿糸は「倉橋由美子論 反世界への降下」において、反世界の概念について、「〈反世界〉とは、倉橋の現実嫌悪と「世界内存在」としての違和とにイマジネールなものがはたらいて創りだしたロマネスクな観念である。それは「無の、想像的な王国」あるいは「凹型の世界」と呼ぶこともできる。世界即ち現実此岸に所属する存在を正の存在とすれば、〈反世界〉に所属する存在は負の存在である。負の存在とは世界に自分を関係させるのではなく、自身に関係させる存在であり、その意味でこれは「純粹実存」の世界である」¹⁵⁵と指摘している。倉橋は現実社会に通用する道徳、倫理観などを拒絶し、近親相姦、母親殺しなどを通じて世界とのつながりを切断し、精神が自由に飛ぶ観念領域―反世界を構築しようとする。「蠍たち」を例にして説明すると、母親殺しを習慣とする蛮地であれ、完全犯罪を果たした旅先であれ、共通観念が通用せず、精神が自由に飛ぶ反世界であるといっても差し支えないだろう。反世界から世界に戻って、母親の醜態を目撃した瞬間、自分の見出す反世界が自分を取り囲む現実世界といかにか離れているかを確認し、二人は母殺し（現実社会との決別）を決意したのかもしれない。

また、「蠍たち」は母親が首を吊られ、死ぬという悲惨な場面で終わる。グロテスクなシーンであるが、その後のLとKの反応に注目したい。「胴を折り曲げて苦しみながら笑」い、「継続する笑いのなかで」「あいしあった」（三八頁）とある。LとKにとって生命の贈与者・保護者である母親を殺すことによつて、二人は完全なる近親相姦の世界（反世界）に浸るようになる。すなわち、現実世界との最後のつながりを打ち切ることによつて、二人は完全に二人だけの反世界を構築することに成功したのである。

フロイトのエディプス・コンプレックスによつて倉橋文学における近親相姦の願望を説明できるが、女主人公による母親殺しは説明しきれない部分が残る。そこで本節ではユングが言う母親の元型である「グレート・マザー」という概念を導入し、母親殺しの深層的な原因には「太母からの自我の自立」があると解釈した。しかし、この「太母からの自我の自立」を謀る行為は「〈世界〉で存在するための認定証を得るため」（菅聡子）ではなく、現実との最後のつながりを切断して、完全なる〈反世界〉を構築するためにあると考えられる。

第三節 「婚約」における我が子を食らう母親

倉橋由美子は初期作品の中で、妊娠を拒否する、あるいは妊娠しても中絶するという主人公を何人も登場させている。例えば、「パルタイ」(『明治大学新聞』一九六〇年一月)では、「労働者」と何度も交わり続けた結果として、女主人公「わたし」は妊娠することになる。「こどもが欲しい」という『労働者』に、「子どもを生むことができる」が、「わたしはそういうつもりはなく、処分しよう」とはっきりと妊娠中絶の意思を示す。また、「蛇」(『文学界』一九六〇年六月)において、倉橋は男が妊娠するという大胆な発想を駆使し、男女関係において弱い立場にある女性が体験するはずの出来事を男性に体験させ、女性の「第二の性」としての立場を強く訴えると同時に、母性への嫌悪を示す。妊娠を拒否するにせよ、男女関係が逆転し、男が妊娠する体質になるにせよ、いずれも倉橋初期の「性関係のうちには不条理にも女の妊娠という生殖の畏が待ちうけている。そして子どもを生むことは結局家庭をつくるという形式にすべりこむことを意味する」¹³⁵という認識と深く関わっていると考えられる。また、倉橋は「婚約」という作品において、母親がわが子を食べるといふグロテスクな話を登場させている。

「婚約」は一九六〇年『新潮』の八月号に発表された、カフカの伝記的事実をもとに書いた作品である。翌年の一九六一年二月に「驚になった少年」(『週刊朝日別冊』一九六一年二月号)「どこにもない場所」(『新潮』一九六一年一月号)という二作とともに、新潮社から刊行された『婚約』と題された単行本に収録された。粗筋は以下のとおりである。ある十一月の小雨の降る午後、役所勤めのKのところに、F・Bの代理人と自称する女がやってくる。KはF・Bと会った覚えがないにも関わらず、持ちかけられた婚約の件に同意する。それだけでなく、「F・Bさんをあいしついでい」¹³⁶ることを伝えてほしいと代理人に何度も頼む。後の出版記念会でF・Bと出会い、互いに婚約(契約)について条件を述べ、合意に達する。しかし、Kが失業することにより、婚約手続きを実行するに当たって、前提条件となる保証金の交換が大きな壁となる。婚約手続きがうまくいかず、妊娠したF・Bからの誤解を解くため、Kは彼女のあとを追い、別荘行きを決める。その途中自分の作品を翻訳すると申し入れるミレナに出会う。Kが別荘を訪れ、弁解するにも関わらず、F・Bの理解を得ることができない。そのうえ、Kは喀血が進行したため、ミレナに病院に入れられる。そして入院先に訪ねてくるF・Bに子供を「処分しました。食べましたわ」と真実を告げられ、死を迎える。

妊娠しても中絶するという選択肢もあるにも関わらず、倉橋は「婚約」において、なぜF・Bにわが子を食べさせたのか、母親がわが子を食べるモチーフをどこから取り入れたのか、またそのモチーフを通して倉橋は何を意図しているのか。こうした疑問を解きほぐすために、F・Bがわが子を食べる経緯を明らかにした上、わが子を食べる親のイメージの受容に

ついていくつかの可能性を検討しながら、その食べる行為の背後にある倉橋の真意を解読したい。

一、母親がわが子を食べる経緯

Kが保証金集めのために作家の仕事に没頭する間、F・BはKが婚約手続きを積極的に進めておらず、自分を裏切っていると見なし、別荘に向かう。自分の妊娠が分かった後、Kに手紙を出し、裏切り者と非難する。Kが別荘を訪ねると、F・Bは豚など家畜の飼育をKにおしつけ、自分は二階に閉じこもる。その後ある日、二人の間に以下のような会話が交わされる。

「だめよ、だめですわ、あがつてきては。いまでも恐ろしいかっこうをしているんですもの。こうして鉤をつかんでいる手をごらんになってもわかるでしょ？ほら」

「まったく。鬼の手みたいだ」とKは叫んだが、じっさいそんなふうだった。

「それにお産をしたところなのよ」

「おお、ぼくの子どもを……？」

「いいえ、猫ですわ。おそらくこれが最後のお産でしょうね。ずいぶん苦しそうですわ」

「だいじょうぶですか？」

「ええ。すっかり食べちゃったのよ。子どもも胎盤も」(「婚約」一七二頁)

当初F・BはKに事実を明かさず、子も胎盤もすっかり食べたのは猫とした。Kはそれを少しも疑わなかった。その真実が明かされるのはKが病院に入れられた後のことである。

「あなたにお産のこと、いわなかったかしら？」

「おお、おもいだしましたよ。猫のお産のことですね」といいながらKはベッドのうえで海老のようにからだを曲げて大きな痙攣をおこしていた。

「どうなさったの？」とF・Bはいったが部屋の中央に立ったままだった。「わたしも猫とおなじようにしたのよ」

「おお……」

「こわいのね？」

「こわいのはあなたの眼です」

「やむをえませんわ。とにかく、あなたとわたしとは関係のある人間同士なんです。それも、あなたがたえずわたしを裏切るといふ関係なのね。」(「婚約」一七九頁)

F・Bは婚約手続きが順調に進まないことをKが婚約に前向きでない証と見なし、自分への裏切りであると結論づける。また、「わたしと婚約してどうなさるおつもり？」というLの疑問に、Kは「いまいったようなこと（家庭をつくること―引用者注）を実現すれば、ぼくにも世間へはいつていくための入場券が与えられるかもしれない」（婚約「一五五頁」と答える。即ちKは結婚と引き換えに、世間復帰のきっかけを手に入れようとしているのである。そのため、F・BはKが自分を妊娠させたのは、婚約せずに世間復帰するために自分にしかけた罠だと思いつむ。

二、親が子を食べる行為の受容について

「婚約」に見られる子を食らう母親を論じる際には避けて通れない、「子どもを食べる」というモチーフについて考えてみたい。古来、東西の文学や絵画に同様のモチーフが見られる。

① わが子をくらうクロノス（サトゥルヌス）（ギリシヤ・ローマ神話）

大地母神ガイアはウーラノスが自分に反抗した息子キュクロプスたちをタルタロスへつきおとしたことを怒って、巨人たちをそのかして父ウーラノスを襲わせた。そこで末子クロノス⁵⁵が父を去勢し、その支配権を奪い支配者となったが、さきにタルタロスに投入された者たちを連れ戻しながら、ふたたびタルタロスに投じた。クロノスは姉のレアーを妻とした。クロノスは自分の息子の一人に主権を奪われるであろうというガイアとウーラノスの予言を恐れて、生まれた子を次々と呑み込んでしまった。レアーは怒って、ゼウスが生まれた時、石を襁褓でくるんで生まれた子のごとくに見せかけ、クロノスに呑むように与え、ゼウスをひそかに育てた。ゼウスが成長すると、レアーから貰ったからしと塩を蜂蜜いりの飲み物のなかに混ぜ、クロノスに飲ませ、呑み込んだ子供らを吐き出させた。⁵⁶

② 「我が子を食らうサトゥルヌス」（絵画作品）

絵画作品にも、わが子を食べる主題が扱われ、「わが子を食らうサトゥルヌス」（ルーベンス）と「わが子を食らうサトゥルヌス」（ゴヤ）と二つの名作が残されている。別荘の「饗者の家」の壁画として描いた一四枚の「黒い絵」の一点でもあるゴヤの作品が描かれたのが病により聴覚を失った後、七七歳のときであり、それに先行する一六世紀のルーベンスの絵画からの影響が大きいと思われる。

ゴヤにも影響したと思われるルーベンスの同じ主題の絵では、子供は食べられる直前で、顔をしかめて必死にもがいている。これに対しゴヤのサトゥルヌス⁵⁷では、子供はすでに頭や片腕が食べられてしまっており、そこからしたり落ちる生々しい血、振り乱した髪やか

つと見開いた錯乱状態の眼などは、鬼気迫るものがある。

この二作はいずれも、ローマ神話に登場するサトゥルヌスが将来、自分の子に地位を奪われるという予言に恐れを抱き、五人の子を次々に呑み込んでいったという伝承をモチーフにしている。それに対して、「婚約」においては、F・BはKに復讐するため、わが子を食べるといふ極端な行動にはしつたと考えるのが自然であろう。その復讐の原点となるのは、Kに子供を社会復帰への道具として利用されたくないという心理だと考えられる。何かに恐れを抱き、わが子を食べるといふ点においては、予言を恐れ、わが子を次々と食べてしまいうクロノス(サトゥルヌス)の話と類似性を見出すことができる。したがって「婚約」におけるわが子を食べる親というモチーフはギリシヤ・ローマ神話におけるわが子を食らうクロノス(サトゥルヌス)から影響をうけた可能性が大きいと考えられる。



図2 ピーテル・パウル・ルーベンス
「我が子を食らうサトゥルヌス」
1635年～38年 プラド美術館所蔵
図2は『図説ギリシヤ・ローマ神話人物記』(マルコム・デイ、山崎正浩訳、創元社、2011年4月、20頁)所取のものによる。

図1 フランシスコ・ゴヤ
「我が子を食らうサトゥルヌス」
1821年～23年 プラド美術館所蔵
図1は『名画で読み解く「ギリシヤ神話」』(吉田敦彦、世界文化社、2013年7月、23頁)所取のものによる。

③ テーレウスとプロクネーとピロメーラー(ギリシヤ・ローマ神話)

アテーナイ王バンディイオーンは、国境に関する紛争で、トラキア王テーレウスの調停によって有利を得たので、テーレウスにプロクネーを与えた。やがて二人のあいだにイチュスが生まれたが、テーレウスはバンディイオーンの末娘ピロメーラーに恋し、プロクネーが死んだと偽って、彼女を迎え、犯した。事情を知ったプロクネーが告げることができないように、その舌を切り取った。しかし彼女はピロメーラーのために用意された花嫁衣装の模様

に秘密の言いづてを織りこんで自分の不幸を告げた。ピローメーラはプロクネーを救い出し、「ああ、あなたが死んだなどといつわって私を辱しめたあの男テーレウスに、なんとして仕返しをしてくれよう！」と悲嘆にくれて言った。心中怒り狂っていたプロクネーはテーレウスとよく似ていた息子イチュスを目のあたりにして、復讐の方法を思いつく。「イチュスを殺してそのはらわたを抜き、銅の大斧のなかで死体を煮て、帰ってきたテーレウスの食膳にそなえた」¹²⁰のである。

④ 『タイタス・アンドロニカス』（シェイクスピア）

わが子を食べるモチーフはシェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』にも語られている。『タイタス・アンドロニカス』は、ローマでかつて絶大なる権力を誇った武将タイタスの復讐悲劇である。その復讐の場面は以下のように描かれている。

タイタス ようく聞け、悪党め、きさまらをどう料理してやる。

おれはこの残っている片手できさまらの喉笛を

かき切つてやる、ラヴィニアは切り株の両手で

盥をささえ、きさまらの罪の血をそれに受ける。

知つてのとおりきさまらのおふくろは食事にくる、

復讐の女神を気どり、おれを気ちがいだと思つてな。

よく聞け、悪党め、おれはきさまらの骨を粉にひき、

それをきさまらの血でこね合わせて練り粉にし、

その練り粉でパイの皮をこさえ、その皮のなかに

きさまらの恥知らずな生首を入れて二つのパイを作り、

あの淫婦に、きさまらの汚らわしいおふくろに、

食わせてやる、自分が生んだものをのみこむ

大地のようにな。これがおれの招待した宴会だ、

これがあの女にたつぷり食わせてやるごちそうだ。¹²¹

『タイタス・アンドロニカス』において、タイタスはタモラに、彼女の息子の肉で作ったパイを食べさせるという陰惨な復讐行為を遂行する。その復讐行為は前述したギリシヤ・ローマ神話におけるプロクネーが自分の子供の肉を食べさせるという復讐方法の模倣とされる。また、その陰惨な復讐行為によって、タモラはわが子をむさぼり食う母親となる。

シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』はテーレウスとプロクネーとピローメーラ

ーの話の起源とする復讐物語とも言えよう。それに対して、前にも述べたが、「婚約」におけるF・Bがわが子を食べる行為はKへの復讐行為であると考えられるため、復讐を目的とする点や、わが子を食べるというモチーフが登場するという点においては、テーレウスとプロクネーとピロメラーの話を代表とする復讐物語と、「婚約」との類似性を見出すことができる。しかし、ギリシャ・ローマ神話における復讐物語にはわが子を食べる親が登場するが、いずれも騙された状態でわが子を食べている。そのため、自発的にわが子を食べるF・Bの行為を解釈するには、テーレウスとプロクネーとピロメラーの話だけでは、解釈しきれない部分が残る。

⑤ 子を食らう餓鬼

田村正彦は「子を食らう餓鬼―西行の和歌とどうし唱導―」によれば、日本の文学作品においても子を食らう餓鬼というモチーフが用いられていることが分かる。田村は前掲論において、西行の和歌と唱導家の言説を中心に考察し、餓鬼にも母親の心情があったことを積極的に見出そうとした。またそれに続き、「子を食らう餓鬼―凶像の流布とその背景―」において、経典類に限らず、絵画作品や記録史料なども考察の対象に入れ、「子を食らう餓鬼は、悪因悪果を体現する存在として経典に生まれ、日本では源信の『往生要集』を基幹として、文学作品や仏教書の中で独自の受容がなされていった」¹⁷²と指摘している。

また、子を食べるという行為は、子を食らう餓鬼に限ったものでなく、人間界の出来事としても、たとえば飢えに迫られわが子に手を掛ける「曠野子肉」をはじめとする経典類や、現実問題としての飢饉の食人記事などもかなり残っていると、飢饉との関係性を明言している。その上で、飢饉の時のような極限状態にある場合、非人間的な行為であるが、わが子を食べるというケースがありうることを肯定しながらも、それについての言説の背後に説法や絵解きの影響が働き、虚実入り交った記述に間違いのないであろうとその虚構性を示唆している。

以上、いくつかの文学作品において、子を食べる、というモチーフを見てきたが、先に述べたように、倉橋がギリシャ・ローマ神話に興味を抱いていたという事実を念頭に置いた上で、倉橋の「婚約」に表現されるモチーフとギリシャ・ローマ神話に出てくる同様のモチーフの共通点に注目するなら、その発生源としてギリシア・ローマ神話が有力であると考えられる。何かに恐れを抱き、わが子を食べるという点において、F・Bの行為は予言を恐れ、わが子を次々と呑み込んでしまうクロノス（サトゥルヌス）と類似している。また、わが子を貪り食うのが母親である点や、復讐心理が働いているという点において、シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』と似通っている。しかし、片方をもってF・Bの行為を解

釈するにはいずれも解釈しきれない部分が残るため、クロノス（サトウルヌス）の話と、テ
ーレウスとプロクネーとピロメラーの話がともに影響したと考えるのが妥当であろう。
三、なぜネコなのか？

ア、ネコというシンボルの象徴的意味

『イメージンシンボル事典』によれば、他のすべての重要な象徴と同じく、ネコも月の側面
と太陽の側面という両義性を合わせ持つものとされる。しかし主に太陽の側面を表すライ
オンと比較して、ネコは月の側面を表すことのほうが多いとされる。

「月の側面」 1、北西ヨーロッパでは、（月の）豊穡の太女神は、穀物の精としてネコの
中に宿ることがある。月とネコを結びつける特徴がいくつかあり、まず、その目は暗闇の
中で光ることがあげられる。そして月が欠けるにつれ細まって行く。ネコはネズミ（ペス
ト）を食べる。大つぴらに交尾することにより、月の女神は婚姻の擁護者になることもあ
り、またその敵対者となることもある。仔を多く孕むが、その仔を食ってしまうことがあ
る（雌ブタと同じく、月の女神の化身の一つ）。フクロウが夜中に音をたてずに飛ぶよう
に、足音をたてないで歩く。月の女神の色と同様、ネコは白、茶、黒の色をもつ。「狐物
語」に登場するネコは奇妙な去勢を受けた。死を俯瞰する月―ネコとして、月の女神の化
身となっている。2、処女である月の女神デアナーアルテミスは、テュポンを恐れてネ
コに姿を変え、他の神々とともにオリュンポスからエジプトへ避難した（オビディウス
『転身物語』5.330）。ヘカテ（乙女アルテミスの老婆としての姿）もネコに姿を変えたが、
彼女は魔力をもつ月の女神である。3、（太陽と結婚した）チュートン族の女神フレイア
は、二匹のネコに戦車を引かせた。彼女も魔力をもつ女神だった。4、ヘビ、クマ、ワニ
と同じく、ネコはコレとその母（ケレス）の両者が動物の姿をとって現れたもの（ユング）。

13

また、ジャンポール・クレベールは『動物シンボル事典』において、ネコと女性のイメ
ージとの関係性を以下のように説明している。

月の象徴である猫は、エジプトにおいて、さまざまな信仰の対象であった。（中略）エ
ジプト人と違って、ギリシャ人は猫を知らなかった。（中略）キリスト教徒たちはどうか
と言えば、彼らは猫を白眼視していた。猫はあらゆる魔力の元凶であるとされた。一六世
紀のグノーシス派において既に、猫は女性の持つあらゆる魔性に関係づけられていた。猫

は女であり、男は犬である、と彼らは言う。猫は女の本性、女の官能、女の優美、女の狡猾をすべて持っている。猫の毛が既に性の欲望を駆り立てるものだ。現代のフランス語はその伝統を引き継いで、女性性器を「牝猫」(chatte) という名で呼ぶ。

そればかりか、猫は民間信仰において早くから魔術と結び付けられていた。魔女が好んでよく猫(当然牝猫)に変身する。猫はまた悪魔の化身とされた。¹⁷⁴

『イメージ・シンボル事典』では、猫が月の女神の化身の一つ、また魔女に仕えるものとして、神話に登場すると指摘される。それに対して『動物シンボル事典』では、「猫は女であり、男は犬である」というグノーシス派の主張を紹介した上、猫を悪魔の化身と強調している。女性を動物にたとえる場合、女の本性、官能、優美、狡猾をすべて持っているとき、猫が最初に浮かび上がるであろう。また、民間信仰において猫は悪魔のイメージを帯びていることを考慮すると、女⇨猫⇨悪魔という図式は成り立っても差し支えないであろう。さらに、倉橋は仏文科を専攻していたことを考えると、女性性器を表す chatte が「牝猫」を語源にしていることからヒントを得る可能性は高いと考えられる。

イ、動物界における子動物を食べる親動物

動物行動学者であるテンプル・グランディンとキャサリン・ジョンソンは動物の攻撃性を「捕食性攻撃」と、「情動つまり感情による攻撃」と二種類に分けたうえ、「情動による攻撃」のさまざまな型を、さらに攻撃を誘発する刺激¹⁷⁵によって細分化し以下のように分けている。

- ① 積極的衝撃―支配性の衝撃、なわばり攻撃等
- ② 恐怖に駆られた衝撃―幼い子を守ろうとする母性による攻撃等
- ③ 痛みによる攻撃
- ④ オス間の攻撃―オス間の攻撃はテストステロン値の影響を受ける
- ⑤ いらだちによる、あるいはストレス性の攻撃―これにはとぼつちり攻撃がある。猫が、外にいる猫をみて興奮しても近づけないときに、かわりに家の中にいるべつの猫、あるいは人間を襲う場合。
- ⑥ 混合型の攻撃―たとえば、恐怖が積極的な攻撃と結びついた場合。
- ⑦ 病気による攻撃

グランディンとジョンソンは母性による攻撃を恐怖の部類にいれ、「母性による攻撃は、本質的には、恐怖に駆り立てられているのだ」「動物の母親は、赤ん坊の身が危険だと考えると恐怖を感じ、恐怖が攻撃につながる」¹⁷⁶と指摘している。また、ストレス性の攻撃を説

明する時、「ストレスの高い状態で暮らしている動物は、適度におだやかな状態で暮らしている動物と比べると攻撃的になりやすい」とし、その具体例として、「ボーダーコリーが自分の子犬を全部たべてしまった」³⁾という悲惨な話を取り上げている。

わが子を食べる親猫を考えるにあたって、その可能性として、恐怖による攻撃とストレス性の攻撃とを結びつけて考えることが可能であろう。親猫と子猫の関係を考慮すると、母性による攻撃に当たる。しかし、本来恐怖に駆り立てられ、攻撃につながる母性の攻撃が外に向かうものである。ここでの恐怖は母親が赤ん坊への分離不安に由来するものであると考えられる。そうだとすれば、わが子を食べる親猫はなぜその攻撃の矛先を外ではなく、うち（わが子）に向けるようになるのか。「ストレス性の攻撃」の例として紹介される「ボーダーコリーが自分の子犬を全部食べる」という話を見ると、攻撃をわが子に向けるケースもあることがわかる。

親猫がわが子を食べる行為は恐怖による攻撃とストレス性の攻撃とが結びついた混合型の攻撃と考えるのが妥当であろう。すなわち、分離不安による恐怖が攻撃に繋がり、またストレスのため、外に向けるはずの攻撃がわが子に向かうようになり、わが子を食べる行為が成り立つ。

四、食べる行為についての分析——他者との境界線と同一視

胎児との関係について、以下に述べるように、主体（母体）と他者（胎児）との関係という枠組みの中で、疎外・分離と同一化の過程を辿っていると考えられる。

ア、他者との境界線

「婚約」において、Kは妊娠したF・Bを追いかけて、別荘まで来たにもかかわらず、F・Bは二階に閉じこもったまま、終始降りてこなかった。

うす暗い階段の上の方から、喘ぐようなしわがれ声をした。「Kですよ」といい、かれは階段をかけあがろうとしたが、階段はなかほど折れて、上半分は骨折した脚みたいになぶらぶらして垂れさがっていた。そのとき、F・Bらしい顔がみえ、竹製の梯子がKのまえにおろされた。（「婚約」一六八頁）

「とにかく、あなたには下で家畜といっしょにくらしてもらおうほかありませんわ。この部屋には絶対にあがってこないでちょうだい。豚や山羊だつてあがってこないんですからね。」（「婚約」一七〇頁）

この時点から、F・B自身は外界から隔てられ、内的世界の内側で、ひたすら胎児と向き合うことになる。しかしそれはまた同時に、Kとのつながりを絶つということでもある。また、F・Bが妊娠した腹部をKに見せるシーンがあり、ここでは胎児を他者と見なし、他者に対する嫌悪感が赤裸々に描写されている。

F・Bはいきなりその服をめくりあげた。「あなたのためにわたしは妊娠してしまったのよ。これがどんなことか、眼から汗がでるまでよくごらんになるといいわ」

Kは、丸々と張りきった肉、しかも褐色の運河に似た条痕が縦横に走っている神聖とも猥雑とも言いようのない肉の塊を見た。それは呼吸のたびに、見苦しいほど露骨にせりあがってくるのだった。(「婚約」一六九頁)

「丸々と張りきった肉」「褐色の運河に似た条痕が縦横に走っている」「見苦しいほど露骨にせりあがってくる」など妊婦の身体がグロテスクに歪められている表現から、割り込んできた異物―他者(わが子)に対する嫌悪が顕著に読み取れる。しかし、なぜわが子に対してそれほど強い嫌悪感を抱いているのか。それはKに裏切られたという思いこみに由来するものと考えられる。

KとF・Bの婚約時に交わされた条件を見ると、F・Bと婚約を結ぶことによって、社会復帰を図るKの姿を見ることができるとある。Kが婚約を延々と延ばすことから、F・BはKに対して不信感を持ち、さらに偶発的に妊娠したことが分かった後、その不信感が募り、裏切られたという思い込みに繋がっていく。Kの行為を自分との婚約をしないまま、子が生まれてくることによって社会的自己実現を図っていると見なす。

しかし、他者嫌悪といっても、他者が身体の一部である母胎にあるため、主体と他者との境界線があいまいである。それが出産という行為を経て、母胎にあった子が完全なる他者となる。この過程が分離に当たる。主体と他者との境界線が体内から体外になることによつて、あいまいな境界線もあいまいでなくなる。しかし母親が子を食べるといふ行為によつて、子がまた体内に取り入れられ、境界線がなくなる。つまり子がその境界線を二度行き来していると考えられる。

イ、食べる行為と同一視

前にも述べたが、動物行動学の観点から言えば、親猫がわが子を食べるようになるのは、子猫が他人に奪われるという恐怖とストレスに由来するものとされる。ここで、F・Bがわが子を食べるのも同じ恐怖とストレスに由来していると解釈したい。F・Bが、Kが自分に

妊娠させたのは、結婚をしないまま、子どもの存在を通して自身の社会的価値を獲得するためであると思なしている以上、自分を裏切った復讐として、その子をどうしても渡せないという思惑があっただろう。食べるという行為は、子供（他者）を母親の体内に取り入れ、自身に同化させる行為と推測される。

フロイトによって提出された概念には同一視というものがあり、フロイトの解釈によると、次のようなものである。

われわれは、この三つの源泉から汲みあげて学んだことを、次のように要約することができる。第一に、同一視は対象にたいする感情結合の根源的な形式であり、第二に、退行の道をたどって、同一視は、いわば対象を自我へ取り入れることによって、リビドー的対象結合の代用物になること、第三に、同一視は性的衝動の対象ではない他人との、あらたにみつけた共通点のあるたびごとに、生じうることである。¹⁷⁸

この三つの特徴を踏まえると、F・Bが胎児を自身と同一視していることが容易に読み取れる。胎児が母体から出る瞬間に、完全なる他者となる。主体の自我が、胎児に、Kによって利用されようとしているという自身と同じ状態に置かれるという類似点を見出し、その点において典型的な同一視が形成される。また、松岡努は「自己愛的同一化と死のイメージについて―安部公房『無関係な死』を素材として―」において、同一化（同一視）の概念について、二つの段階に分かれることを述べている。

外側にあるものを自分の内側に持ちこむという心理的操作は自他の区別が不分明である発達初期からはじまり、自他の区別が確立された上で取り入れられるようになるまで、さまざまな形態が考えられる。そのため、前者を一次的同一化と呼び、それと対比する形で後者を二次的同一化と呼ぶことで両者の差異を明確にしようしたり、同一化以前の自我境界のあいまいな程度に依じて、のみこみ（体内化）、取り入れという用語を別立てにして、のみこみ・取り入れ・同一化の三つを包括している内在化という用語で取りまとめるなどといった概念上の工夫がなされてきた。¹⁷⁹

主体と他者との区別が分明であるかどうかによって、同一化は一次的同一化と二次的同一化に分かれている。一次的同一化を発達初期とし、自他の区別が確立された上で取り入れられる、すなわち二次的同一化になるまで、さまざまな形態があるとされる。そして、同一

化に至るまでの過程をのみこみ・取り入れ・同一化の三つを包括している内在化という用語で取りまとめている。

また、フロイトは同一視を論じる際、食人種にも言及している。「同一視は、まさしく最初からアンビヴァレント（両価的）であって、それは温情の表現にもなれば、排除の願望にもなりうるのである。同一視は、リビドー体制の最初の口唇期（Oral Phase）の流れを汲んでいるのであって、欲望と尊重の対象を食べることによって同化し、またそのようにして対象を亡ぼしてしまう。食人種がこの立場にとどまっていることは知られている」¹⁸⁵とあるように、フロイトは食人種の食人という行為を同一視とし、その食人行為が対象を亡ぼすにとどまっていると解釈している。

「婚約」において、F・BとKが婚約を結ぶにあたって条件を出し合うとき、F・Bが毎食肉を出してほしいと肉への強い執着を示す。それに、Kが「特別大きな歯をお持ちなんですね」といい、F・Bの口の中に手を突っ込んで歯に触ってみて、「すごい歯だ。まるで犬の歯みたいだ」と感激するシーンがあるように、F・Bの歯の丈夫さが尋常ではない。肉への執着と歯の丈夫さが後にわが子を食らうことを示唆しているのであろう。また、それらは食人種のイメージに繋がる箇所といっても差し支えないであろう。

しかし、フロイトは食人種の食人行為を同一視の範疇に入れながらも、それを対象を亡ぼすにとどまっていると指摘しているため、もしF・Bがわが子を食べる行為を食人行為と捉えるならば、F・Bの食べる行為も対象（わが子）を亡ぼすにとどまっていることになる。その解釈は果たして成り立つのであろうか。

食人は食べることによって、犠牲者のエネルギーを体内に取り込み、自分自身へと同化させる行為である。その点においては、F・Bの食べる行為もそれと同じと考えられる。しかし、F・Bはわが子が奪われる恐怖、不安によって、もともと身体の一部である胎児を食べることによって、主体の身体に還元することになる。それは単純に亡ぼす行為にとどまらず、身体の一部として再生することになる。また、『イメージ・シンボル事典』に「墓は変容を表す。また再生を願って、もとの状態へ退行することを表す（墓 tomb は子宮 womb と関連する）」¹⁸⁶と墓と子宮との関連性が指摘される。そのため、F・Bの食べる行為は「異物」を亡ぼすというよりむしろ、身体の一部を体内に取り入れることによって、死と再生が循環すると解釈できるのではないか。

倉橋の「婚約」における「わが子を食べる母親」の造形の由来や「食べる」行為の意味について考察してみた。造形の由来のいくつかの可能性を考えながら、「婚約」が執筆された当時の倉橋の関心を見ると、ギリシャ・ローマ神話から素材を取り入れた可能性が高いと

考えられる。また、具体的に言う、クロノスとサトウルヌスの話とテーレウスとプロクネーとピロメラーの話から影響を受けたと考えられる。

F・Bは当初子を食べるのを猫とした。なぜかという、女性の本性、官能、優美、狡猾をすべて持っていることや悪魔の化身という民間信仰が働き、女⇨猫⇨悪魔という図式が成り立つと思われる。一方、動物行動学の観点に立つと、親猫がわが子を食べる行為は恐怖による攻撃とストレス性の攻撃とが結びついた混合型の攻撃と考えられるのが妥当であろう。

胎児との関係については、主体（母体）と他者（胎児）との関係という枠組みの中で、疎外・分離と同一化の過程を辿っていると考えられる。主体の自我が、胎児に、Kによって利用されようとしているという自身と同じ状態に置かれるという類似点を見出し、その点において典型的な同一視が形成される。食べるといふ行為によって、胎児を母親の体内に取り入れ、自分自身に同化させる行為と推測される。F・Bの食べる行為は「異物」を亡ぼすというよりむしろ、もともと身体の一部である胎児を体内に取り入れることによって、死と再生が循環すると解釈できるのではないか。

¹⁴⁴山崎真紀子「戦後日本における〈肥満文学〉」『日本文学』五九号、日本文学協会、二〇一〇年十一月、四三頁

¹⁴⁵分析心理学の創始者ともいわれるユングが「人間の普遍的無意識の内容の表現のなかに、共通した基本的な型を見出すことが出来ると考え」、「それを元型と呼ぶ」（九五頁）のである。また、元型として取り上げたものうち、特に重要なものは、「ペルソナ (persona)」、影 (shadow)、「アニム (anima)」、アニムス (animus)、「自己」 (self)、「太母 (great mother)」、老賢者 (wise old man)」（一〇一頁）と名づけられるものである。（河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 一九六七年一〇月）

¹⁴⁶前掲論、山崎真紀子「戦後日本における〈肥満文学〉」三七頁

¹⁴⁷C・G・ユング『元型論』林道義訳、紀伊国屋書店、一九八二年六月、一二九頁

¹⁴⁸エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』ナツメ社、一九八二年六月、一四〇〜一四一頁

¹⁴⁹「このテリブル・マザーは、自分の子を喰って太る飢えた地球である。それはまた、虎、コンドル、棺、肉を喰う石棺などであって、人や野獣の血と精を食りなめつくす。飽食すると、彼女はまた新しい誕生をはき出すが、それはいつも殺すためなのである」（エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』一七〇頁）

¹⁵⁰前掲書、エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』一六九頁

¹⁵¹前掲書、エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』一七一頁

¹⁵²前掲書、エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』一七一頁

¹⁵³前掲書、エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』一七一頁

¹⁵⁴斉藤環、萩尾望都「少女まんがと「母殺し」の問題」（特集 母と娘の物語―母・娘という呪い）『ユリイカ』四〇巻一四号、二〇〇八年二月、五一頁

¹⁵⁵前掲書、斉藤環、萩尾望都「少女まんがと「母殺し」の問題」五八頁

¹⁵⁶榎敦子「倉橋由美子フィクションにおける母娘関係をめぐって」『日本の母―崩壊と再生』新曜社、一九九七年九月、三二八頁

¹⁵⁷フロイトはギリシヤ悲劇『オイディプス』（オイディプスは知らなかったとはいえ、父親を殺し自分の母親と結婚したという物語である）から強い示唆を受け、エディプス・コンプレックスを精神分析の用語の一つとして提示した。母親に愛着を持ち、また父親に対して敵意や対抗心を抱くという、幼児期におけるアンビバレントな心理の抑圧のことをいう。

¹⁵⁸フロイト『エロス論集』中山元編訳、筑摩書房、一九九七年五月、三〇五頁

¹¹⁸前掲書、フロイト『エロス論集』三二三～三二四頁

¹¹⁹この娘（エレクトラ―引用者注）のもつ父親への愛と母親への憎しみから、男性の場合とちよつど反対の、女性の対照的なコンプレックスを「エレクトラ・コンプレックス」とユングは呼んだのです。でもフロイトは、そうした概念は意味がないとひと蹴りでした。女性の願望なら、それは「女性のエディプス」と呼べばいいし、そもそもエディプス・コンプレックスの一番目のモデルにあつたように、女性は男性とは対照的なものではないと述べて、ユングの主張を退けたのです」（妙木浩之『父親崩壊』新書館、一九九七年四月、五七頁）

¹²⁰前掲書、河合隼雄『ユング心理学入門』二八三頁

¹²¹河合隼雄『母性社会日本の病理』中央公論社、一九八七年三月、一四三頁

¹²²前掲書、河合隼雄『ユング心理学入門』二八三頁

¹²³菅聡子「へ女流」作家・Lの微笑―倉橋由美子初期作品をめぐって―』『淵叢』一〇号、二〇〇一年八月、一〇六頁

¹²⁴前掲論、小鹿糸「倉橋由美子論 反世界への降下」七二頁

¹²⁵倉橋由美子「わたしの『第三の性』」『わたしのなかのかれへ』二九頁

¹²⁶クロノスはローマ神話の農耕神であるサトゥルヌスと同一視され、しばしば老人の姿で表現される。

¹²⁷ロバート・グレイヴズ『新版 ギリシャ神話』（高杉一郎訳、紀伊国屋書店、一九九八年九月）五八～六五頁を参照。

¹²⁸ゴヤの「我が子を食らうサトゥルヌス」について、現在は修正されているが、かつてサトゥルヌスの下半身には勃起した性器が描かれていたことがわかっている。このことから、ゴヤはこの作品を通じて、生命の終わりと始まりを象徴的に描いたものだともいわれている。（吉田敦彦『名画で読み解くギリシャ神話』（世界文化社、二〇一三年七月）を参照）

¹²⁹前掲書、ロバート・グレイヴズ『新版 ギリシャ神話』二四二頁。また、舌が切り取られたのはピロメラーとする説もある。

¹³⁰ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピア全集 タイタス・アンドロニカス』小田島雄志訳、白水Uブックス、一九八三年一〇月、一六五頁

¹³¹田村正彦「続・子を食らう餓鬼―凶像の流布とその背景―」『古典文藝論叢』一号、二〇〇八年三月、一五頁

¹³²前掲書、アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』一一〇頁

¹³³ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』竹内信夫、柳谷巖、西村哲一、瀬戸

直彦、アラン・ロシェ訳、大修館書店、一九八九年一〇月、二六三頁

¹¹⁸ テンプル・グランディン、キャサリン・ジョンソン『動物感覚 アニマル・マインドを読み解く』中尾ユカリ訳、日本放送出版業界、二〇〇六年五月、一九二頁

¹¹⁹ 前掲書、テンプル・グランディン、キャサリン・ジョンソン『動物感覚 アニマル・マインドを読み解く』一九五頁

¹²⁰ 前掲書、テンプル・グランディン、キャサリン・ジョンソン『動物感覚 アニマル・マインドを読み解く』一九七頁

¹²¹ フロイド『自我論』井村恒郎訳、日本教文社、一九七〇年五月、一三七頁

¹²² 松岡努「自己愛的同一化と死のイメージについて―安部公房『無関係の死』を素材として―」『駒沢女子大学研究紀要』一七号、二〇一〇年二月、一四五頁

¹²³ 前掲書、フロイド『自我論』一三四頁

¹²⁴ 前掲書、アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』六四四頁

結論

倉橋は戦後の民主主義の発展や男女平等の教育制度の恩恵を受け、自分の才能を自由に伸ばせる環境の中で小説を書くことができた。そうした点では、例えば、広い意味において倉橋と同じように女性の権利の伸張を標榜していた『青鞥』の時代の女性作家たちと比べて、格段に恵まれた条件下で作家生活を始めることができたと言える。倉橋は、『青鞥』の時代の女性作家たちが格闘の相手としていた日本の伝統的な家制度などの問題からは、すでにかなりの程度において解放されていたのである。恋愛結婚、自由恋愛などはもはや当然であるとする時代の中で倉橋に残されたテーマは、さらに歩を進めた、やや過激とも言える男女間あるいは同性間の性的な問題であった。倉橋の小説にサディズムやマゾヒズム的な要素が頻出するのは、そうしたことと無関係ではない。そして、そうした要素が物語りの中で描かれたり、登場人物がそうした要素に身をゆだねるとき、それは通常の道徳観などによって理解しにくいいため、人間の中に潜む不条理の側面が露出されたように見えるのである。

倉橋は、サルトル、カミュ、カフカなどを読み漁り、人間の存在の不条理性に対する意識（人間の存在特に女性の存在に対する不安）を出発点とする文学に目覚め、リアリズム文学が依然として主流を占めていた昭和文壇において、冷静なタッチで抽象的かつ観念的な「反世界」を構築することによって、ひととき異彩を放つことになった。アメリカの第二波フェミニズムの動きに大きな影響力をもった、ベディ・フリーダン『女性の神秘』（邦訳「新しい女性の創造」）の抄訳が、「第二の女性革命のすすめ」（桜井真）として、『婦人公論』に独占掲載されたのは一九六四年八月である。倉橋はそれに先立ち、一九六〇年に「第三の性」という新しい女性のあり方を提示し、主体化された男と客体化された女という関係に揺さぶりをかけ、性役割を再構築することによって、性的役割においても女性を男性と同じ地位に仕上げようとした。

本論文では、倉橋の女性像及び女性論との関わりで、倉橋とカミュやボーヴォワールとの関連性について考察してきた。例えば、倉橋の小説における夏・海・太陽を舞台とする一連の作品をカミュの『異邦人』と比較し、真夏の海岸、砂と海と太陽、無意味の殺人、そして不条理の概念といった共通点を確認した。倉橋は太陽によって肉欲を膨らませるというカミュの太陽のイメージを借用しながら、近親相姦あるいはレイプといった性交渉の場面に太陽を登場させることによって、「太陽と海と灼けた砂」を背景とした性交渉という場面を描いていることが分かる。それは、「太陽と海と灼けた砂」を舞台に、見知らぬ少年と少女、男と女が、陰湿な愛の告白や結婚の申込みなしに自分の楽しみのためにだけ交わる」という

古代ギリシャふうのオルギアの図柄と関連づけることができる。

倉橋の女性論の形成にはボーヴォワールの影響が大きいと考えられる。本論文では、倉橋の女性論の基本とも言える「わたしの「第三の性」」そしてサルトルとボーヴォワールの契約結婚を下敷きにした「暗い旅」の「あなたがた」の關係に焦点を当て、それぞれボーヴォワールの『第二の性』、『女ざかり』と比較して、倉橋のボーヴォワールへの態度や女性論の独自性について考察した。「暗い旅」においては、「かれ」の失踪により、「あなたがた」の關係に終止符を打ったのは、サルトルの欺瞞に満ちた「契約結婚」に振り回されただけだったボーヴォワールに対して、最大の心遣いを送りたかったからと考えられる。言い換えれば、倉橋は「契約結婚」という新しい男女關係に憧れながらも、その限界を感じたのかもしれない。「わたしの「第三の性」」においては、自我と他者、結婚や母性に対する見解といった点において共通点を確認し、倉橋の女性論はボーヴォワール思想を受けて発展させたものと考えられる。そして、ただ経済的な独立を獲得すべきであると主張するボーヴォワールとは違い、女のあるべき姿として「第三の性」という具体的な解決案を提示している。

倉橋の小説は、女性に対する男性の所有が確認されるレイプ行為、性役割を逸脱した女性への制裁とみなされる集団レイプを多く描写している。そして、女主人公たちは結婚反対論者から、やがて見合結婚を通じて家庭に入るといふように変化している。また、結果から言えば、同性愛、近親相姦、サディズム・マゾヒズムなどの行為は破綻している。女主人公の転向行為、そして性規範を逸脱したゆがんだ性行為の破綻といったものは、一見倉橋が思い描いた第三の性の限界性を物語っているように見えるが、実は「第三の性」が形を変化させたものに過ぎず、実質的には変わっていないと考えられる。倉橋自身は、読書などを通して西欧の新しい女性解放思想と接触し、新しい女性の生き方を主張したが、観念的な恋愛・結婚観と現実的な恋愛・結婚観の狭間に苦しんだ末、女性として生きていくほかないという現実を受け止め、妻の仮面をかぶって家庭生活に入ることを一番望ましい生き方だと結論づけたと考えられる。それは、「第二の性」としての立場を利用しながら第三の立場に移行していく」という女性の理想的なあり方が変形して、理想と現実を折衷したものであると考えられる。

ウーマン・リブの運動が日本で幕を開ける十年前に、即ち一九六〇年代において、女である自分の身体に関心を向け、人一倍に敏感に反応し、嫌悪を覚えた倉橋は、現実には許されていない様々な女性像を造形し、伝統文学そして古い思想に謳われる良妻賢母思想を強く批判し、「第三の性」という女性のあり方を提示し、それまで公の場で論じることがタブー視されていたオルガズムや中絶をはじめとするセクシュアリティにまつわる問題を、自ら

の言葉で語り始めた。女のセクシュアリティの主題化という意味において、倉橋がいかに先駆的な存在であったかということが本論文で確認できたと思われる。

「田舎の高校でもっばら「教養主義」的読書をしてきたわたしの内部を、はげしく灼いたのでした」と倉橋が語るカミュ『異邦人』に出会った時の感動から見られるように、西洋文学に土壌を置くとデビュー当時から評価されるが、倉橋の文学の原点には西洋文学以外に、日本の伝統文学も見え隠れしていることが分かる。日本の伝統文学というより、西洋文学に憧憬の念を抱いた倉橋は、西欧文学に栄養を汲み取り、抽象的かつ観念的な作風でデビューを果たし文壇での位置を固めたが、倉橋の内部に、倉橋にとって不本意にも残存している良妻賢母思想に妥協しようとする傾向があることは否定できず、また伝統文学からの影響も度外視すべきではない。今後の研究としては、倉橋と日本の伝統芸能である能とのつながり、あるいは同時代の女流作家との比較などについて研究を深めていきたいと考えている。

参考文献

倉橋由美子の著作

倉橋由美子『倉橋由美子全作品1 パルタイ・雑人撲滅週間』新潮社 一九七五年十月
倉橋由美子『倉橋由美子全作品2 人間のない神・どこにもない場所』新潮社 一九七五年
十一月

倉橋由美子『倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽』新潮社 一九七五年十二月
倉橋由美子『倉橋由美子全作品4 妖女のように・蠍たち』新潮社 一九七六年一月
倉橋由美子『倉橋由美子全作品5 聖少女・結婚』新潮社 一九七六年二月
倉橋由美子『倉橋由美子全作品6 ヴァージニア・長い夢路』新潮社 一九七六年三月
倉橋由美子『倉橋由美子全作品7 反悲劇・霊魂』新潮社 一九七六年四月
倉橋由美子『倉橋由美子全作品8 夢の浮橋・腐敗』新潮社 一九七六年五月
倉橋由美子『倉橋由美子全エッセイ集 わたしのなかのかれへ』講談社 一九七〇年三月
倉橋由美子『アマノン国往還記』新潮社 一九八六年八月
倉橋由美子『毒薬としての文学 倉橋由美子エッセイ選』講談社 一九九九年七月

単行書

アイスラー、コリン『ベルリン美術館の絵画』高階秀爾監訳 中央公論新社 二〇〇〇年三月
天野正子ほか編集委員、斉藤美奈子編集協力、加納実紀代解説『新編日本のフェミニズム9
母性』岩波書店 二〇〇九年四月

天野正子ほか編集委員、斉藤美奈子編集協力、加納実紀代解説『新編日本のフェミニズム10
女性史・ジェンダー史』岩波書店 二〇〇九年二月

アリストパネス『ギリシヤ喜劇1 アリストパネス』高津春繁ほか訳 ちくま文庫 一九八
六年七月

有村隆広、八木浩『カフカと現代日本文学』同学社 一九八五年一〇月

石崎昇子、桜井由幾『日本女性史論集9 性と身体』吉川弘文館 一九九八年六月

石原慎太郎『太陽の季節』新潮文庫 二〇〇二年七月

石本隆一等編『日本文芸鑑賞事典―近代名作10―17選への招待―第一八巻(昭和三三―
三七)』ぎょうせい 一九八八年四月

市古夏生、菅聡子、浅井清『日本女性文学大事典』日本図書センター 二〇〇六年一月

井上輝子ほか編集『岩波女性学事典』岩波書店 二〇〇二年六月

井上輝子、上野千鶴子、江原由美子『日本のフェミニズム(全八巻)』岩波書店 一九九四

年十一月〜一九九五年四月

井上輝子、上野千鶴子、江原由美子『男性学』岩波書店 一九九五年五月

イリガライ、L. 『ひとつではない女の性』棚沢直子、小野ゆり子、中嶋公子訳 勁草書房

一九八七年十一月

岩淵広子、長谷川啓『ジェンダーで読む愛・性・家族』東京堂出版 二〇〇六年一〇月

上野千鶴子『女という快樂』勁草書房 一九八六年十一月

上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社 二〇〇〇年一二月

上野千鶴子『女ぎらい ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店 二〇一〇年一〇月

上野千鶴子、小倉千加子『ザ・フェミニズム』筑摩書房 二〇〇五年九月

上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房 一九九二年一月

上野千鶴子『「おんな」の思想 私たちは、あなたを忘れない』集英社 二〇一三年六月

臼井吉美『近代文学論争』下 筑摩書房 一九七〇年十一月

海老根静江、竹村和子『女というイデオロギー アメリカ文学を検証する』南雲堂 一九九

年二月

江藤淳『成熟と喪失 “母”の崩壊』講談社 一九九三年一〇月

オウイデイウス『変身物語』中村善也訳 岩波書店 一九八一年九月

小倉千加子『セクシュアリティの心理学』有斐閣 二〇〇一年五月

小此木啓吾、河合隼雄『フロイトとユング』思索社 一九九一年一月

小谷野敦『恋愛の昭和史』文藝春秋 二〇〇八年三月

「女と男の時空」編纂委員会編『年表・女と男の日本史』藤原書店 一九九八年十月

加藤秀一『恋愛結婚は何をもたらしたか―性道德と優生思想の百年間』筑摩書房 二〇〇

四年八月

神島二郎『結婚観の変遷』新潮社 一九六一年五月

カミュ、アルベール『異邦人』窪田啓作訳 新潮文庫 一九五四年九月

カミュ、アルベール『シーシュポスの神話』清水徹訳 新潮社 一九六九年七月

カミュ、アルベール『新潮世界文学49 カミュ』渡辺守章、鬼頭哲人、大久保輝臣、白井

健三郎、清水徹、佐藤朔、白井浩司訳 新潮社 一九六九年一月

カミュ、アルベール『カミュ全集』アストウリアスの反乱・裏と表・結婚』佐藤朔、高島正

明訳 新潮社 一九七二年九月

河合隼雄『母性社会日本の病理』中央公論社 一九七八年三月

河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 一九六七年一〇月

- ギグリエリ、マイケル・P『男はなぜ暴力をふるうのか―進化から見たレイプ・殺人・戦争―』松浦俊輔訳 朝日新聞社 二〇〇二年一〇月
- 桐野夏生『グロテスク』文藝春秋 二〇〇六年九月
- グランディン、テンプルとジョンソン、キャサリンの共編『動物感覚 アニマル・マインドを読み解く』中尾ユカリ訳 日本放送出版協会 二〇〇六年五月
- グレイヴズ、ロバート『新版 ギリシヤ神話』高杉一郎訳 紀伊国屋書店 一九九八年九月
- クレベール、ジャンポール『動物シンボル事典』竹内信夫、西村哲一、柳谷巖、瀬戸直彦、アラン・ロシエ訳 大修館書店 一九八九年一〇月
- 香内信子編集・解説『論叢シリーズ1 資料 母性保護論争』ドメス出版 一九八四年一〇月
- 佐伯順子『「愛」と「性」の文化史』角川選書 二〇〇八年一月
- サイード、エドワード『オリエンタリズム』平凡社 一九八六年一〇月
- シェイクスピア、ウィリアム『シェイクスピア全集 タイタス・アンドロニカス』小田島雄志訳 白水Uブックス 一九八三年一〇月
- シュヴァーブ、グスターフ『ギリシヤ・ローマ神話』（新装版）角信雄訳 白水社 一九八八年
- シュヴァールツァー、アリス『ボーヴォワール対談集一九七二〜八二 第二の性その後』福井美津子訳 青山館 一九八五年六月
- シュヴァールツァー、アリス『ボーヴォワールは語る 『第二の性』その後』福井美津子訳 凡社 一九九四年五月
- 鈴木忠士『カミュ』異邦人』の世界』法律文化社 一九八六年三月
- 千足伸行『すぐわかる ギリシヤ・ローマ神話の絵画』東京美術 二〇〇六年三月
- 総合女性史研究会編『日本女性の歴史 性・愛・家族』角川選書 一九九二年三月
- ダイクストラ、ブラム『倒錯の偶像―世紀末幻想としての女性悪』富士川義之ほか共訳 パピルス 一九九四年四月
- 高津春繁『ギリシヤ・ローマ神話辞典』岩波書店 一九六〇年二月
- 高野斗志美『倉橋由美子論』サンリオ選書 一九七六年七月
- 竹中恵美『私の女性論―性的役割分業の克服のために』啓文社 一九八五年四月
- 田中絵美利、川島みどり編『人物書誌大系三八 倉橋由美子』日外アソシエーツ 二〇〇八年三月
- タナズ、ヴィリジル『ガリマール新評伝シリーズ世界の傑物6 カミュ』神田順子、大西比

- 佐代訳 詳伝社 二〇一〇年十二月
- 田端泰子、上野千鶴子、服藤早苗『シリーズ比較家族8 ジェンダーと女性』早稲田大学出版部 二〇〇四年一〇月
- 鶴田欣也『日本文学における「他者」』新曜社 一九九四年一月
- 中村光夫『異邦人論』創元社 一九五二年七月
- 布川角左衛門編『筑摩現代文学大系82 曾野綾子・倉橋由美子集』筑摩書房 一九七七年二月
- ノイマン、エリツヒ『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』福島章、町沢静夫、大平健、渡辺寛美、矢野昌史訳 ナツメ社 一九八二年六月
- 平川祐弘、萩原孝雄編『日本の母 崩壊と再生』新曜社 一九九七年九月
- 馬場謙一ほか編『母親の深層』有斐閣 一九八四年一〇月
- 藤田博史『性倒錯の構造 フロイト・ラカンの分析理論』青土社 一九九三年二月
- ブラウンミラー、S.『レイプ・踏みにじられた意思』幾島幸子訳 勁草書房 二〇〇〇年三月
- ド・フリース、アト『イメージ・シンボル事典』山下主一郎ほか訳 大修館書店 二〇〇八年九月
- フロイド、ジークムント『続精神分析入門』古澤平作訳 日本教文社 一九六九年六月
- フロイド、ジークムント『自我論』井村恒朗訳 日本教文社 一九七〇年五月
- フロイト、ジークムント『エロス論集』中山元編訳 筑摩書房 一九九七年五月
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド『ボーヴォワール著作集6 第二の性』生島遼一訳 人文書院 一九六六年一月
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド『娘時代 ある女の回想I』朝吹登水子訳 紀伊国屋書店 二〇〇四年六月
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド『女ざかり―ある女の回想―』朝吹登水子、二宮フサ訳 紀伊国屋書店 一九六三年五月
- 村松定孝、渡辺澄子『現代女性文学辞典』東京堂 一九九〇年一〇月
- マンフレート、ライテイヤスバーほか『ウィーン美術史美術館』田辺徹、田辺清訳 みすず書房 一九九一年十二月
- 見田宗介、見田暎子『近代日本の名著 恋愛・結婚・家庭論』徳間書店 一九六六年一〇月
- ミルネール、マックス『フロイトと文学解釈 道具としての精神分析』市村卓彦訳 ユニテ 一九八九年六月

- 妙木浩之『父親崩壊』新書館 一九九七年四月
- 森永卓郎『へ非婚へのすすめ』講談社 一九九七年一月
- 諸川春樹『西洋絵画の主題物語』日神話編 美術出版社 一九九七年五月
- 山折哲雄ほか執筆『愛と苦難』岩波書店 一九九九年十二月
- ユング、C. G.『元型論』林道義訳 紀伊国屋書店 一九八二年六月
- らいてう研究会編『『青鞥』人物事典 一〇人の群像』大修館書店 二〇〇一年五月
- 吉田敦彦『ギリシア文化の深層』国文社 一九九三年一月
- 吉田敦彦監修『名画で読み解く ギリシャ神話』世界文化社 二〇一三年七月
- 吉田昇、神田道子『現代女性の意識と生活』日本放送出版協会 一九七五年七月
- 渡辺澄子『女性文学を学ぶ人のために』世界思想社 二〇〇〇年一月

雑誌論文

- 荒木詳二『恋愛と恋愛結婚イデオロギーの誕生について』『群馬大学社会情報学部研究論集』
一三卷 二〇〇六年三月
- 安藤秀国「倉橋由美子の初期作品におけるカフカ受容」『愛媛大学法文学部論集』（人文学科
編）二三号 二〇〇七年七月
- 池上玲子「わたし」と「わたし」、鏡像関係への欲望―倉橋由美子一九六〇年代―『語文』
一二八号 二〇〇七年六月
- 井口浩文「物」との対峙―石原慎太郎『太陽の季節』と田中康夫『なんとなく、クリスタ
ル』―『日本文学誌要』六五号 二〇〇二年三月
- 井上たか子「『第二の性』の翻訳と受容について―発表要旨、および関連報告―」『女性空
間』一七号 日仏女性資料センター 二〇〇〇年六月
- 江種満子「倉橋由美子「パルタイ」のわたし」『国文学解釈と鑑賞』四一巻一―号 一九七
八年九月
- 小倉斉「倉橋由美子論 《妖女》から《老人》へ」『淑徳国文』三八号 一九九七年二月
- 加藤典子「老いたる女性」考―ボーヴォワール女性論再見『女性文化研究所紀要』六号 一
九九〇年十二月
- 加藤宏幸・千葉祐平「アルベール・カミュの『異邦人』論―不条理な感情の生成過程および
自然との関係―」『Artes Liberales』五七号 一九九五年十二月
- 菅聡子「女流」作家・Lの微笑―倉橋由美子初期作品をめぐる―『淵叢』一〇号 二〇
〇一年八月

- 小鹿糸「倉橋由美子論 反世界への降下」『日本文学誌要』二九号 一九八三年一月
- 神於希衣「『聖少女』論」『樟蔭国文学』四八巻 二〇一一年三月
- 斉藤金司「倉橋由美子論―『暗い旅』を中心として―」『主潮』一卷 一九七三年一月
- 榑敦子「倉橋由美子フィクションにおける母娘関係をめぐって」『日本の母―崩壊と再生』新曜社 一九九七年九月
- 佐藤浩子「ボーヴォワール―『第二の性』と母性―」『川村学園女子大学女性学年報』三号 二〇〇五年一〇月
- 椎村宣明「カミュの『異邦人』冒頭部、「今日ママンが死んだ。」について」『東海大学紀要 外国語教育センター』二〇輯 二〇〇〇年三月
- 島田綾香「倉橋由美子の反世界―初期作品『パルタイ』『夏の終り』を読む―」『藤女子大 学国文学雑誌』七五巻 二〇〇六年九月
- 下田城玄「倉橋由美子の『反世界』―「パルタイ」などをめぐって」『民主文学』四八三号 二〇〇六年一月
- 高井邦子「ボーヴォワールにおける他者性の問題」『明示学院論叢』一四六号 一九六九年二月
- 高島正明「アルベール・カミュと「新しい地中海文化」―一九三七年から三九年のいくつかの未刊行資料をめぐって」『芸文研究』三〇号 一九七一年三月
- 谷口絹枝「倉橋由美子「パルタイ」論―「わたし」の存在感覚からのアプローチ―」『方位』一三号 一九九〇年八月
- 田村正彦「続・子を食らう餓鬼―図像の流布とその背景―」『古典文藝論叢』一号 二〇〇八年三月
- 玉井真理「アルベール・カミュ『異邦人』における「太陽」の役割について」『Bilia candida フランス語フランス文学論集』一九号 一九八九年三月
- 古野千恵『『異邦人』における「太陽」』『Stella』二四号 二〇〇五年十二月
- 中田平「ボーヴォワールとその時代」『金城学院大学論集（人文科学編）』一四号 一九八一年二月
- 中田平「ボーヴォワールとその時代」『金城学院大学論集（人文科学編）』一五号 一九八二年三月
- 中山和子「批評の荒野 1960―「パルタイ」から「囚人」まで―」『昭和文学研究』三九号 一九九九年九月

- 中丸禎子「太陽と死―サイードのカミュ論をヒントに、ラーゲルレーヴ『エルサレム』を読む」『北欧史研究』二四号 二〇〇七年八月
- 難破攻士「戦後ユース・サブカルチャーズについて（1）太陽族からみゆき族へ」『関西学院大学社会学部紀要』九六号 二〇〇四年三月
- 野本泰子「佐多稲子の恋愛観」『COMPARATIO』四号 二〇〇〇年三月
- 発田和子「倉橋由美子における女とは何か―『ヴァージニア』知ることへの欲望」『国文学解釈と鑑賞』四六巻二号 一九八一年二月
- 松岡努「自己愛的同一化と死のイメージについて―安部公房『無関係の死』を素材として―」『駒沢女子大学研究紀要』一七号 二〇一〇年十二月
- 水林章「サイドとともに読む『異邦人』―植民地的無意識のエクリチュール」『みすず』五二八号 二〇〇五年六月
- 山崎真紀子「戦後日本における〈肥満〉文学」『日本文学』五九号 二〇一〇年一月
- 山野浩一「女性的前衛小説について」『ユリイカ』一三巻二号 一九八一年三月
- ロブレス、エマニユエル「アルベール・カミュ―太陽と悲慘の刻印―」窪田般彌訳『海』二卷七号 一九七〇年七月
- 『群像』（追悼 倉橋由美子）六〇巻八号 二〇〇五年八月
- 『国文学解釈と鑑賞』（特集 高橋和巳と倉橋由美子）三六巻九号 一九七一年八月
- 『国文学解釈と鑑賞』（特集 女とは何か―女性作家の世界）四六巻二号 一九八一年二月
- 『昭和文学研究』第五八巻 昭和文学会 二〇〇九年三月
- 『新潮』（追悼 倉橋由美子）一〇二巻八号 二〇〇五年八月
- 『文学界』（追悼 倉橋由美子）五九巻八号 二〇〇五年八月
- 『文学界』（特集 倉橋由美子の魔力）六三巻四号 二〇〇九年四月
- 『文芸研究』（特集 倉橋由美子の世界と反世界）一〇二号 二〇〇七年三月
- 『ユリイカ』（特集 倉橋由美子）一三巻二号 一九八一年三月
- 『ユリイカ』（特集 母と娘の物語―母・娘という呪い）四〇巻一四号 二〇〇八年十二月

Beauvoir, Simone de, *La force de l'âge*, Paris: Gallimard, 1960.

_____, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Paris: Gallimard, 1964.

Camus, Albert, *Oeuvres complètes d'Albert Camus*, t.1, Paris: Aux éditions du Club de

l'Honnête Homme, 1983.

Gagnebin, Laurent, *L'athéisme nous interroge: Beauvoir, Camus, Gide, Sartre,*

Paris:Van Dieren Editeur, 2009.

付録1 倉橋由美子略年譜

- 一九三五年十月十日 高知県香美郡土佐山田町（現・香美市）に生まれる。
- 一九五四年 土佐高等学校卒業、京都女子大学国文科入学。
医師を目指し、予備校に通う。
- 一九五五年 日本女子衛生短期大学別科歯科衛生士コース入学。
- 一九五六年 日本女子衛生短期大学別科卒業、歯科衛生士国家試験に合格。
明治大学文学部文学科仏文学専攻に入学。
- 一九五九年 「雑人撲滅週間」が第三回明治大学学長賞佳作第二席となる。
- 一九六〇年 「バルタイ」が第四回明治大学学長賞を受賞。選者・平野謙が「文芸時評」『毎日新聞』で紹介したため『文藝界』に転載される。その後、芥川賞の候補作として、『文藝春秋』に再転載された。文藝春秋から、『バルタイ』を刊行する。
明治大学卒業。同大学院文学研究科に入学。
「非人」「貝のなか」などの短編を次々に発表。
- 一九六一年 『バルタイ』で女流文学賞を受賞。『暗い旅』を東都書房より刊行。『暗い旅』論争が起こる。
- 一九六二年 父の急逝による帰郷。大学院を退学。
- 一九六三年 第3回田村俊子賞を受賞。
- 一九六四年 熊谷富裕と結婚。
- 一九六五年 フルブライト英語研修生となり上京。『聖少女』を刊行。
- 一九六六年 渡米。アイオワ州立大学院に入学。
『妖女のように』を刊行。
- 一九六七年 帰国。神奈川県中郡伊勢原町（現・伊勢原市）に居を構える。
- 一九六八年 長女まどか出産。『反悲劇』シリーズを『文藝』に掲載開始。
- 一九六九年 三年ぶりの書き下ろし長編『スマキストQの冒険』を刊行。
- 一九七〇年 『ヴァージニア』、初エッセイ集『わたしのなかのかれへ』を刊行。
- 一九七一年 次女さやか出産。『夢の浮橋』を刊行。
- 一九七二年 第二エッセイ集『迷路の旅人』を刊行。家族でポルトガルに住む。
- 一九七三年 写真集『アイオワ静かなる日々』を刊行。
- 一九七四年 ポルトガルでクーデターが起こり帰国。
- 一九七五年 翌年にかけて『倉橋由美子全作品』（全8巻）を刊行。
- 一九七七年 シェル・シルヴァスタイン『ぼくを探しに』で初の翻訳に挑む。以後、数多くの翻訳を手がける。
- 一九七九年 第三エッセイ集『磁石のない旅』を刊行。
- 一九八〇年 十年ぶりの長編『城の中の城』を刊行。
- 一九八四年 『おとなのための残酷童話』を刊行。
- 一九八五年 『シュンボション』を刊行。

一九八六年 『アマノン国往還記』を書き下ろし刊行。翌年、同書で泉鏡花文學賞受賞。

第四エッセイ集『最後から二番目の毒想』を刊行。

一九八八年 『ポポイ』を刊行。

一九八九年 『交歓』、『夢の通り路』を刊行。

一九九六年 第五エッセイ集『夢幻の宴』を刊行。

二〇〇一年 自身の小説論をまとめた最後のエッセイ集『あたりまえのこと』を刊行。

二〇〇二年 『よもつひらさか往還』を刊行。

二〇〇三年 『老人のための残酷童話』を刊行。

二〇〇五年六月十日 拡張型心筋症により永眠。享年六九歳。

付録2 倉橋由美子作品一覧表（*本表は主として「第十四回 明治大学中央図書館
企画展示 明治大学特別功労賞受賞記念 倉橋由美子展」（明治大学中央図書館ギヤ
ラリー企画運営WG、二〇〇六年六月）の展示リストを基に作成したものである。太
字はエッセイ集、傍線部は翻訳書を示す。）

書名	出版社	出版年
パルタイ	文藝春秋新社	一九六〇年八月
婚約	新潮社	一九六一年二月
人間のない神	角川書店	一九六一年四月
暗い旅	東都書房	一九六一年一〇月
聖少女	新潮社	一九六五年九月
妖女のように	冬樹社	一九六六年一月
蠍たち	徳間書店	一九六八年一〇月
スマキストQの冒険	講談社	一九六九年四月
暗い旅	学芸書林	一九六九年一二月
ヴァージニア	新潮社	一九七〇年三月
わたしのなかのかれへ 全エッセイ集	講談社	一九七〇年三月
悪い夏（角川文庫）	角川書店	一九七〇年五月
人間のない神	徳間書店	一九七一年三月
夢の浮橋	中央公論社	一九七一年五月
婚約（新潮文庫）	新潮社	一九七一年六月
反悲劇	河出書房新社	一九七一年六月
暗い旅（新潮文庫）	新潮社	一九七一年一二月
現代の文学32 倉橋由美子	講談社	一九七一年一二月
迷路の旅人	講談社	一九七二年五月
スマキストQの冒険（講談社文庫）	講談社	一九七二年六月
ヴァージニア（新潮文庫）	新潮社	一九七三年五月

書名	出版社	出版年
わたしのなかのかれへ(上)(講談社文庫)	講談社	一九七三年九月
わたしのなかのかれへ(下)(講談社文庫)	講談社	一九七三年九月
夢の浮橋(中公文庫)	中央公論社	一九七三年十月
アイオワ 静かなる日々	新人物往来社	一九七三年十一月
パーティ(文春文庫)	文藝春秋	一九七五年一月
迷路の旅人(講談社文庫)	講談社	一九七五年六月
妖女のように(新潮文庫)	新潮社	一九七五年七月
倉橋由美子全作品1 パルタイ・雑人撲滅週間	新潮社	一九七五年十月
倉橋由美子全作品2 人間のない神・どこにもない場所	新潮社	一九七五年十一月
倉橋由美子全作品3 暗い旅・真夜中の太陽	新潮社	一九七五年十二月
倉橋由美子全作品4 妖女のように・蠍たち	新潮社	一九七六年一月
倉橋由美子全作品5 聖少女・結婚	新潮社	一九七六年二月
倉橋由美子全作品6 ヴァージニア・長い夢路	新潮社	一九七六年三月
倉橋由美子全作品7 反悲劇・霊魂	新潮社	一九七六年四月
倉橋由美子全作品8 夢の浮橋・腐敗	新潮社	一九七六年五月
反悲劇(河出文芸選書)	河出書房新社	一九七六年五月
迷宮	文藝春秋	一九七七年四月
夢のなかの街(新潮文庫)	新潮社	一九七七年四月
ぼくを探しに	講談社	一九七七年四月
人間のない神(新潮文庫)	新潮社	一九七七年八月
パーティ(新潮文庫)	新潮社	一九七八年一月
磁石のない旅	講談社	一九七九年二月

書名	出版社	出版年
歩道の終るところ	講談社	一九七九年六月
反悲劇（新潮文庫）	新潮社	一九八〇年八月
嵐が丘にかえる（第一部・第二部）	三笠書房	一九八〇年十月
城の中の城	新潮社	一九八〇年十一月
聖少女（新潮文庫）	新潮社	一九八一年九月
続ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い	講談社	一九八二年七月
屋根裏の明かり	講談社	一九八四年一月
大人のための残酷童話	新潮社	一九八四年四月
城の中の城（新潮文庫）	新潮社	一九八四年八月
倉橋由美子の怪奇掌篇	潮出版社	一九八五年二月
シユンポシオン	福武書店	一九八五年十一月
最後から二番目の毒想	講談社	一九八六年四月
アマノン国往還記	新潮社	一九八六年八月
ポポイ	福武書店	一九八七年九月
スマヤキストQの冒険（講談社文芸文庫）	講談社	一九八八年二月
倉橋由美子の怪奇掌篇（新潮文庫）	新潮社	一九八八年三月
シユンポシオン（新潮文庫）	新潮社	一九八八年十二月
交歓	新潮社	一九八九年七月
夢の通ひ路	講談社	一九八九年十一月
クリスマス・ラブ―七つの物語	JICC 出版局	一九八九年十二月
アマノン国往還記（新潮文庫）	新潮社	一九八九年十二月
大人のための残酷童話（カセットブック）	新潮社	一九九〇年一月
ポポイ（新潮文庫）	新潮社	一九九一年四月

書名	出版社	出版年
幻想絵画館	文藝春秋	一九九一年九月
アメリカ・インディアンの民話1 イクトミと大岩	宝島社	一九九三年五月
交歓(新潮文庫)	新潮社	一九九三年五月
アメリカ・インディアンの民話2 イクトミと木イチ	宝島社	一九九三年九月
夢の通り路(講談社文庫)	講談社	一九九三年十一月
イクトミと羊	宝島社	一九九三年十一月
アメリカ・インディアンの民話3 イクトミとおどるカ レオンのぼうし	宝島社	一九九四年二月
アメリカ・インディアンの民話4 イクトミとしゃれ こうべ	宝島社	一九九五年二月
ラブレター 返事のこない60通の手紙 *古屋美 登里との共訳	宝島社	一九九五年四月
アメリカ・インディアンの民話5 クロウチーフ	宝島社	一九九五年十月
夢幻の宴	講談社	一九九六年二月
そのために女は殺される(『愛の殺人(ハヤカワ・ミス テリ文庫)』所収)	早川書房	一九九七年五月
人間になりかけたライオン	講談社	一九九七年十一月
大人のための残酷童話(新潮文庫)	新潮社	一九九八年八月
毒薬としての文学 倉橋由美子エッセイ選(講談社文芸 文庫)	講談社	一九九九年七月
天に落ちる	講談社	二〇〇一年十月
あたりまえのこと	朝日新聞社	二〇〇一年十一月
クリスマス・ラブ―七つの物語(宝島社文庫)	宝島社	二〇〇一年一月
よもつひらさか往還	講談社	二〇〇二年三月
パルタイ 紅葉狩り 倉橋由美子短編小説集(講談社)	講談社	二〇〇二年十一月
老人のための残酷童話	講談社	二〇〇三年九月

書名	出版社	出版年
暗い旅 (Shincho On Demand Books)	新潮社	二〇〇三年十月
あたりまえのこと (朝日文庫)	朝日新聞社	二〇〇五年二月
よもつひらさか往還 (講談社文庫)	講談社	二〇〇五年三月
偏愛文学館 (書評集)	講談社	二〇〇五年七月
新訳 星の王子さま	宝島社	二〇〇五年七月
新訳 星の王子さま (宝島社文庫)	宝島社	二〇〇六年六月
酔郷譚	河出書房新社	二〇〇八年七月
最後の饗宴	幻戯書房	二〇一五年五月

初出一覧表

- 第一章第一節〜第三節 『比較文化研究』一二〇号、二〇一六年二月、一三〜二四頁
第四章第一節 『九大日文』二四号、二〇一四年十月、六五〜七六頁
第四章第二節 『COMPARATIO』一九号、二〇一五年十二月、三五〜四六頁
第五章第三節 『COMPARATIO』一八号、二〇一四年十二月、五〇〜六一頁
その他の部分は書き下ろし。